DIGITAL DEVIL STORY 2

AM JuJu

魔都の戦士

作/西谷 史
絵/北爪宏幸

デジタル・デビル・ストーリー2



デジタル・デビル・ストーリー2 魔都の戦士 西谷 史

アニメージュ文庫N—018
定価380円

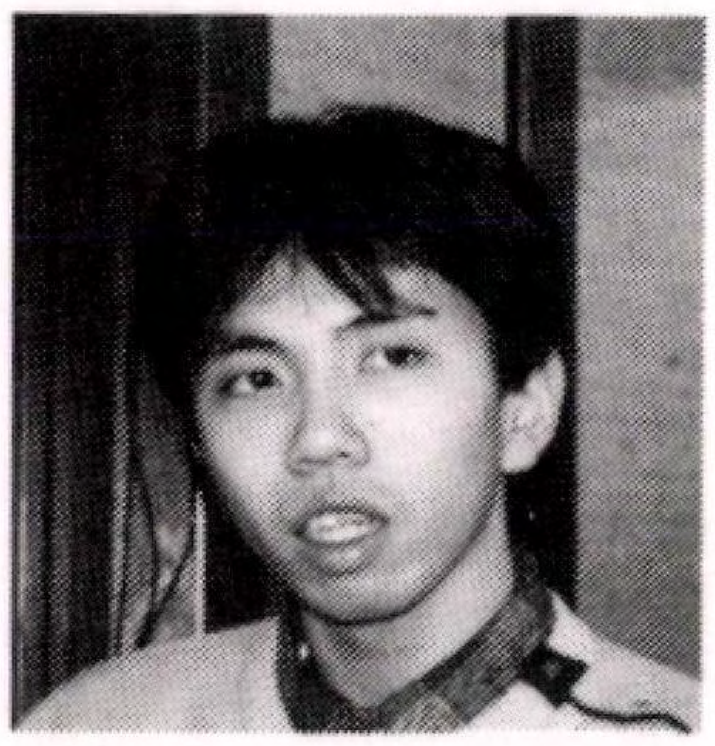
デジタル・デビル・ストーリー2

魔都（まと）の戦士（せんし）



西谷（にしたに） 史（あや）

　昭和30年三重県生まれ。北海道大学経済学部卒業。著書に、パソコン誌『Ｏｈ！　ＰＣ』に連載したＳＦショート・ショートを集めた『2020年ホログラフ元年』(日本ソフトバンク刊) がある。



北爪宏幸（きたづめひろゆき）

　昭和36年東京都生まれ。東京デザイナー学院アニメ科卒。「機動戦士ガンダムＺＺ」でキャラデザイン・作監を担当。スタジオ・ぱっく社長。現在、ビデオ「ロボットカーニバル」の制作に参加。



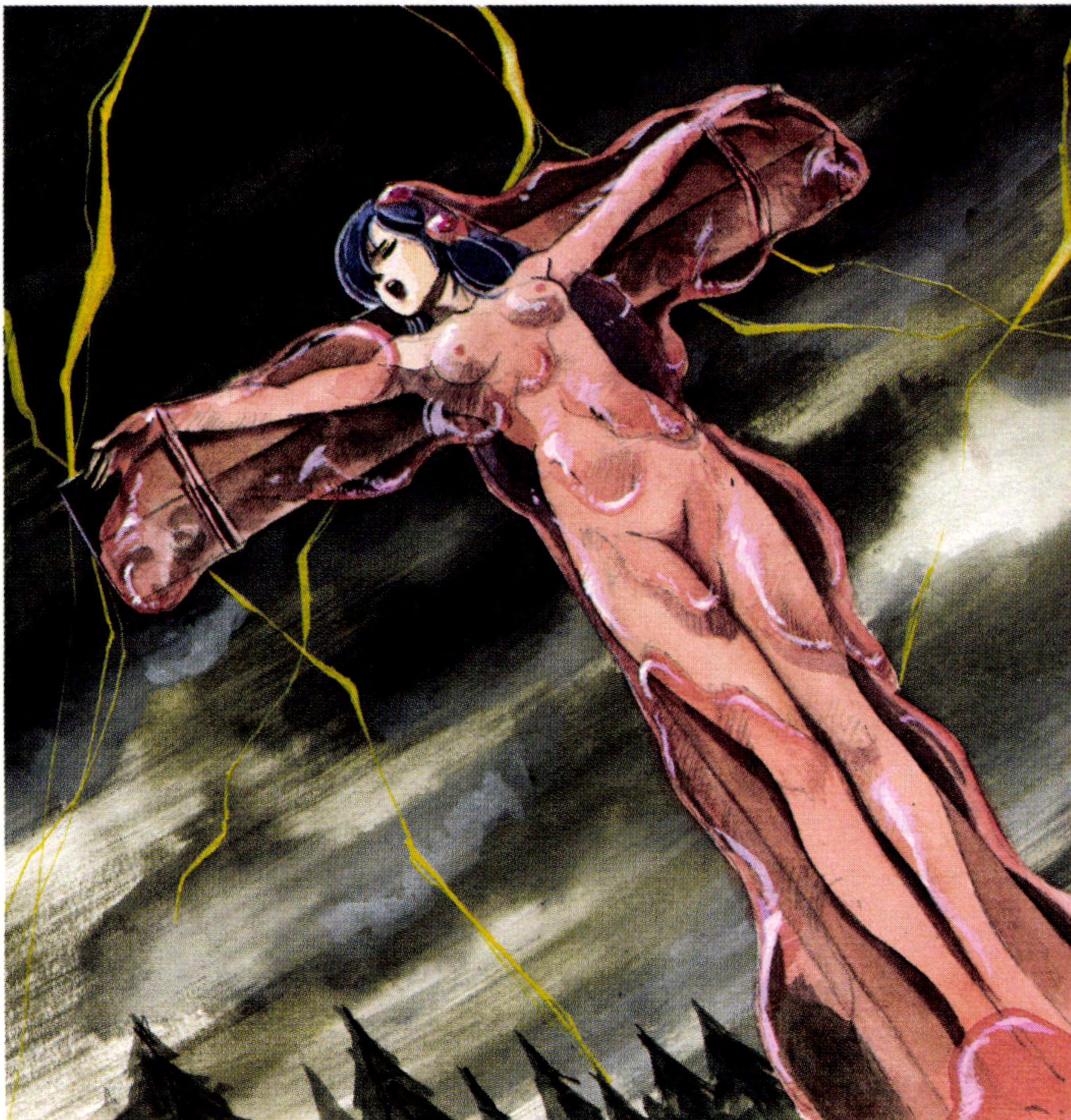
弓子の目が強烈な光を放った！　小原にはがい締めにされた中島の目前で、中島の母は炎に包まれる!!（P.84）

東京

蘇我の森



ゆわえつけられた美しい少女が……（P.106）



蘇我の森に、何かに憑かれたかのような人々が集まる。そこには、十字架に



鳥に戻り、イザナミに再会した。イザナミは自分の衣を中島に与えた(P.160)

飛鳥・白鷺塚(しらさぎづか)

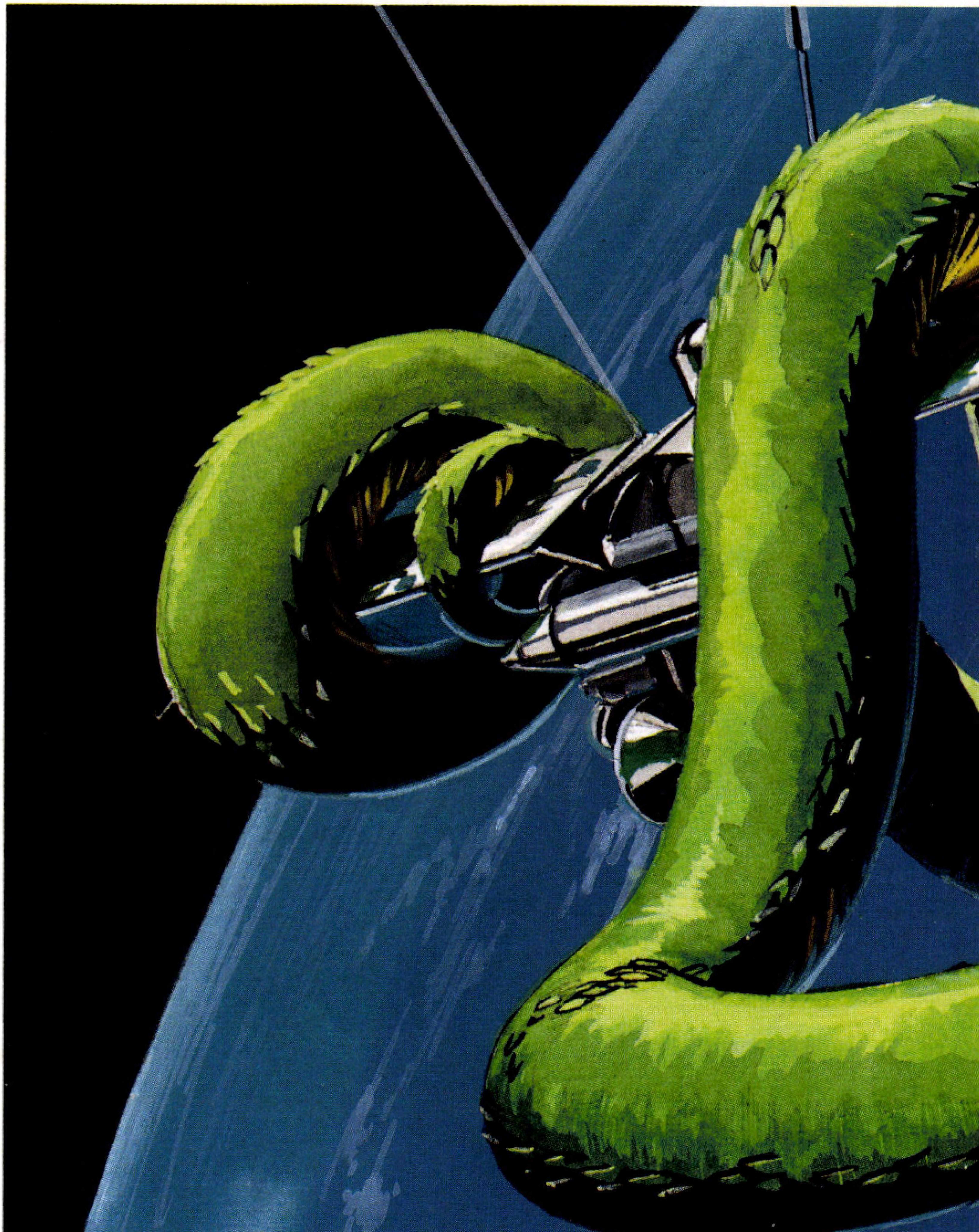


「セトを倒すための"力"が欲しい!」中島は飛

静止衛星スタースコーピオン



ジタルデビル・セトが、静止衛星にとぐろを巻いている姿だった(P. 184)



決戦のため宇宙へ飛び出した中島が見たもの。それは大蛇の形に実体化したデ



「五十億の人間より、ぼくは君一人を選ぶ！」。弓子と共に中島は地球に向かう（P.190）

青い星へ……

デジタル・デビル・ストーリー2

魔都の戦士

西谷　史

　デジタル・デビルは〝ロキ〟だけではなかった！　中島が作り上げた降魔プログラムを利用し、黒魔術師イスマ・フィードは、最強の悪魔〝セト〟をデジタル・デビルとして呼び出してしまったのだ。
　人類の叡知を集めた〝退魔プロジェクト〟は、果たして〝セト〟を葬りされるのか？　そして再会もつかの間、愛する弓子を〝セト〟に奪われた中島の新たなる戦いの結末は!?　いま舞台は、東京から漆黒の宇宙空間にまで広がる……。
　高度なコンピュータ社会が生んだ恐怖と、天才プログラマー・中島朱実（あけみ）の壮烈な戦いを描くニューウェーブ伝奇ＳＦ、堂々の第２弾!!

主な登場人物



中島朱実（なかじまあけみ）

十聖高校の３年生。コンピュータを利用し悪魔を呼び出すことに成功。それが中島の運命を大きく変えた。



白鷺弓子（しらさぎゆみこ）

十聖高校への転校生。日本古来の神・イザナミの転生であり、中島とは深い因縁で結ばれている。



小原教諭（おばら）

十聖高校の古文の教師。デジタル・デビル〝ロキ〟に犯され、その子を身ごもっている。



チャールズ・フィード

白魔術の研究家。マサチューセッツ工科大学（MIT）の教授。魔術を科学に役立てようとしている。



イスマ・フィード

チャールズ・フィードの弟。黒魔術師。悪魔の力で、この世の支配をたくらむ男。

目次

第一章　帰還……13
第二章　胎動……41
第三章　セト降臨……65
第四章　呼ぶ者……91
第五章　緒戦……117
第六章　魔都……143
第七章　宇宙へ……171
解説……192

第一章　帰還

マサチューセッツにセイレムと呼ばれる古い港町がある。

十九世紀に漁港として栄えたこの町は、合衆国の漁業の盛衰と運命を共にし、現在では最盛期の一割にも満たない人々が、食品加工を業(なりわい)として細々と生計をたてている。

街の中央に、今はもう通う船もない運河が、濁った水をたたえて入江へと続く。

運河を背にして、大仰(おおぎょう)な造りに盛時の面影を留(とど)めた古い家並みが、剝(はが)れかかった白ペンキの木肌を、夏の陽光の下にさらけ出している。

その一角に、第一次大戦前に建てられたまま、改修をほどこされることもなしに今日に至った、煉瓦(れんが)造りの安宿があった。

その二階の一室。

ベッドと電話以外に家具らしい家具もない部屋に、年代もののＧＥのエアコンがコンプレッサーの唸(うな)り音を響かせている。

男はそれを気にするふうもなく、全神経を眼前のハンドヘルド・コンピュータに集中していた。コンピュータは電話機に直結され、オンラインでＩＳＧ（インターナショナル・サタニス

ト・ガーデン）の人工知能クラフトに繋がっている。男とクラフトの間では、もう十数時間も対話が続けられていた。

黄ばんだ麻の貫頭衣に、すりきれた黒の革靴、そして肩まで届く銀色の髪。年のころはもう五十に近いのであろうか。

彼の名はイスマ・フィード。工学博士にして魔術研究家として名高いＭＩＴ（マサチューセッツ工科大学）のチャールズ・フィード教授の弟にあたる。

兄のチャールズが、ＩＳＧを組織し、錬金術・魔術を科学に役立てようと画策しているのとは対照的に、イスマは黒魔術の実践を人生の目的に置いていた。知る人の間では、イスマの名は悪魔に伍して恐れられる存在であるとも聞く。

たしかに、鷹のような眼でディスプレイに向かう男の全身からは、サタンを彷彿させる禍々しい気が立ち昇っていた。

その眼を半眼に閉じたかと思うと、イスマは日に焼けた蜘蛛のような指でキーボードを撫でた。

――Is that sure？

――Maybe.

人工知能は瞬時にメッセージを返してきた。

「…………」

深い溜め息とともにイスマはオンラインによる対話を打ち切った。

「信じ難いことではあるが、東洋の一少年がコンピュータによる悪魔召喚(しょうかん)に成功したことは疑いがなさそうだ」

枯れ葉のような唇が独(ひと)り言(ご)ちる。

樫(かし)の木のドアが、重い音をたててノックされた。

「入るがいい」

ハンドヘルド・コンピュータの電源を落とすと、イスマは椅子の背もたれに体をあずけたままドアの方に顔を向けた。

気まずそうな苦笑いを浮かべた宿の老主人が、上目づかいにイスマを見つめている。

「セイントにどうしてもと……」

皆まで言わせず、抜き身のままのハンドガンが老人を背後から押しのけた。鋭い眼付きの巨漢が、イスマの胸のあたりに銃の照準を合わせている。

「魔道士イスマ・フィード。ようやくのことで捜しあてたぞ」

男の声には、抑えがたい憎しみがこめられていた。

「捜してくれたのはありがたいが、ずいぶんと穏やかならざる挨拶(あいさつ)の仕方だな」

イスマは口の端を緩めながら、ゆっくりと立ち上がった。

「残念ながらＦＢＩは不粋(ぶすい)なことで有名でね。それに今さら前口上に貴様の罪状を数えあげてみても、日が暮れるばかりだろう」

イスマの眼光に気圧(けお)されたか、声が心なしか震えている。

「さて、おとなしく同行を願おうか。死体を運ぶのは楽な仕事じゃないんでね」
精いっぱいの虚勢をこめて、男はハンドガンのトリガーに指をかけた。
「わしの方は死体でも一向に構わんが……」
淡いブルーの瞳に冷たい光を浮かべ、イスマは男の眼を凝視(ぎょうし)する。
沈黙が場を支配した。
男の顔面を大粒の汗が伝う。
十数秒の間を置いてイスマの貫頭衣の裾(すそ)が床を掃くように揺れた。
「待て！　それ以上近寄るな！」
乾いた声で叫ぶと、男は一歩退いた。
が、ハンドガンの銃口はすでにイスマの胸を外れ、あらぬ方角に向けられている。
「仲間をさそってから来るべきだったな。もっとも、一人が三人でも結果に変わりはあるまいが」
「うう……」
染みだらけの壁を舐(な)めるように、ゆっくりと銃口が向きを変える。
男は左手で、自分の意志とは無関係に湾曲(わんきょく)をはじめた右手の動きを止めようとして、懸命の努力を続けている。
抗(あらが)い難い力を持った透明な腕にねじあげられているかのように、右手は銃床を冷や汗で濡らしながら、着実に銃口を男の顔に向けていった。

「よせ、やめて、グウッ……」

口にねじ入った銃身の冷ややかな酸味が、悲鳴を唾液とともに喉へ押し込む。

自らの両手でハンドガンを奪い合いながら、男は天井を睨んでのけぞった。

バウーン。

くぐもった銃声が部屋を揺るがした。次の瞬間、男は後頭部から血と脳漿をまき散らしながら、背後の壁に吹っ飛んでいた。

「ヨセフ、例によって後の始末は頼んだぞ」

イスマは、部屋の隅に縮こまっていた宿の老主人に声をかけた。

「わしはこれから日本に行く。今度は少々長い旅になるかもしれん」

黒い靴が血溜まりを滑り、コンクリートの床にかすれた足跡を数歩残したところで、樫の木のドアが音もなく閉じた。

＊

東京都、国立市。

七月二十日、午後四時。

夏休みに入った十聖高校の校庭に人影はない。ようやく灼熱の勢いを落とした陽光が、静まりかえった校舎に照り返す。

午睡の気怠さを全身に残したままの主婦達が、その眩しさに目を細めながらも、好奇心に満

ちた眼差しを投げかけてゆく。

同校のCAIルームが破壊され、授業を受けていた生徒全員が行方不明になるという事件が起きたのは、ほんの一週間前のことであった。

「クラス全員が共謀して施設を破壊したうえ、どこへともなく姿を消した」

担当教官である小原教諭は、そう状況を説明した。

けれども、一見校内暴力の深刻化を象徴するかのようなこの事件の真相は、部外の誰もが想像だにできないところにあった。

同校の三年生、中島朱実（あけみ）は、その少女と見紛（みまが）われる端整な顔立ちから、他の男子生徒の嫉妬（しっと）を招きがちであった。

プログラマーとしての天賦（てんぷ）の才にも恵まれていた中島は、コンピュータ理論と魔術理論の類似性に着目し、魔界から悪魔をデジタルデータとしてコンピュータに呼びこむことに成功した。

――悪魔の力を借りて、自分に危害を加えた奴らに復讐してやる。

当初は実体を持たない思念体（一種の人工知能）としてCAI用のホストコンピュータに出現した悪魔ロキは、受講中の生徒を操ることにより中島の願望をかなえた。

ほどなく十聖高校の支配者となった中島。が、意に反してその心は虚（うつ）ろだった。

一方、実体化を図るロキにとって、必ずしも意のままに動かない中島の存在は、次第にうとましいものになっていった。

中島により生贄に捧げられた美貌の女教師小原が、ロキの悪魔としての魅力に心を奪われてしまったことを利用して、ロキは小原に中島の代役をつとめさせようと試みる。

悪魔ロキの指示により、小原は中島の作った悪魔召喚のプログラムのパワーアップに専念した。やがて、アッシャー界（現実世界）に実体を持つことに成功したロキは、自由を謳歌するかのように、完全に中島のコントロールを離れ、食人鬼と化して、無差別的な殺戮劇を展開しはじめた。

私怨と好奇心の招いた思いもかけぬ重大な結果に対する自責の念から、中島はハンドヘルド・コンピュータによるデータ処理でも十分に実体化できる魔獣ケルベロスを擁して、勝ち目のない戦いを挑む。

もともと勝負の見えていたこの戦いの果てには、やはり予想どおりの敗北しかなかった。けれどもロキは、戦いの結末に思わぬ敵に出食わすことになる。

中島を慕う転校生、白鷺弓子に憑依した倭の神イザナミである。筆舌に尽くしがたい激闘に、ＣＡＩルームはたちまち廃墟と化した。そしてイザナミは、戦いに傷ついた中島を自分の墳墓のある飛鳥へと移動させる。それを追って、ロキもまた飛鳥へと向かったのである。

無論、そうした経緯を知り得る者がいるよしもない。

とにもかくにも、事件の表面上の結末だけが、夏枯れぎみのマスコミに格好のネタを提供しているのであった。

「エリートクラスに起きた教室破壊と集団逃亡」

そんなタイトルが、週刊誌の車内吊り広告を賑(にぎ)わしている……。

問題のＣＡＩルームは、警察当局が事件の真相を究明するまで、当分の間、使用を禁じられていた。

その瓦礫(がれき)の散らばる室内には、もうかなり薄れたとはいえ、なお耐えがたい異臭が漂っている。

ひびの入った硬質ガラスに仕切られ、そのおかげで何とか無傷で残ったマシンルームに、不審な人影があった。

真紅のマニキュアが、端末機のキーボードを撫(な)でる。

ディスクドライブ装置が、忙(せわ)しげに、それが今まさに稼働中であることを示すＬＥＤランプを点滅させる。

おそらくは相当に長大なプログラム、もしくは膨大な量のデータのコピーが行われている最中のようである。

八インチのフロッピーディスク十枚に、ようやく納まったコピーをとり終えると、女の口から思わず溜め息が洩(も)れた。

「小原先生、まだ終わりませんか？」

遠慮がちに細く開いたドアから、しわがれた男の声がした。

落ちつかない視線が忍び寄ってくる。

「本当にまずいんですよ。ＣＡＩルームに人を入れたことがわかると」
「大丈夫。もうほんの少しで終わりますから」
女が鼻にかかった声でいうと、用務員は不承不承、顔を引っこめた。
小さく舌打ちすると再び指がキーボードの上を這う。
ディスプレイ画面にはメッセージが浮かんでいた。

——PROGRAM"DEMON"

DELETE YES OR NO?

コンピュータがプログラムを抹消してしまっていいかどうかを、問い合わせているのである。

——YES

ゆっくりと指がキーボードをなぞり、おもむろにリターンキーを押す。
ホストコンピュータは何の感情も見せずにカタカタと磁気テープを動かし、やがてすぐに動きを止めた。
その瞬間に、中島朱実が組みあげた悪魔召喚のプログラムは、十聖高校のＣＡＩ用ホストコンピュータから跡形もなく姿を消した。
コンクリート塀に肘をついて寄りかかり、影のようにその男は立っていた。
黄ばんだ麻の貫頭衣に、肩まで届く銀色の髪。イスマ・フィードである。

だが、通りすぎる人々の視線は、決してイスマに向けられようとはしなかった。別に意図して避けているわけではない。人々は、彼がそこに存在することに気がつかないといった様子なのである。

彼の身のまわりには、結界が張りめぐらされていた。

彫りの深い、陽に焼けた顔。だが、時折、校舎の方角に向けられる鋭い両の目は、何かしらの不満をたたえていた。

――どうにも〝気〟が感じられない。中島とかいう少年が悪魔召喚に成功したことは疑いのない事実なのだが……。

古来、アッシャー界（現実世界）に悪魔を召喚することの難しさは、悪魔の出現に必要な環境を整える作業が、地磁気や気象などの偶発的な要素に左右されやすいという点にあった。

それが近年に至って、コンピュータで制御された強力な磁界を設定することにより、こうした不確定要素の影響をかなりの割合で排除できるのではないかという推論がなされ、広く欧米の魔術師の注目を集めている。

イスマは、ＩＳＧのコンピュータの内部データから、日本の一少年がコンピュータによる悪魔召喚に成功したという確証をつかみ、取るものもとりあえず日本に駆けつけたのである。

けれども、探し求めた中島の行方は知れず、ましてや、この十聖高校にも悪魔の気配などとんと見当たらない。

――時間をかけても、中島とやらを捜し出すのが近道のようだな……。

ゆっくりと踵を返したイスマの銀髪が揺れる。
その耳に、
「先生、今日のことはくれぐれもご内密に……」
と、おもねるような声が絡み入った。
振り返ってみると、大きなバッグを抱えた女が、風采のあがらない初老の男をあしらうように片手で制している。
——女……。いや、そんなわけがあるはずもないのだが。
イスマの魔術師としての感性に強く働きかける〝気〟を、小原は有していた。
見つめられているとは気づかず、イスマの方に歩いてくる小原の表情には、明らかに焦りが見られる。
下手なモデルよりはよほど均整のとれた肢体には、いよいよ女としての魅力が増している。
熱を帯びた、それでいてどこかしら影のある視線は、それこそ禁断の果実の誘いを思わせる。
——やはり悪魔はアッシャー界に出現した。あの女の体に宿る魔の生命が何よりの証拠だ。
イスマの唇が歪む。
小原が近づいてきた。
イスマは、二度、三度と小刻みに目をしばたいた。
それが結界を破る合図でもあったのだろうか、小原が、ビクッと電撃にでもうたれたかのよ

うに顔をあげる。
その目と鼻の先に、妖しい煌(きらめ)きを放つブルーの眼があった。
人の心を底まで見通すような、深みのある、けれども一種の凶悪さを秘めた眼である。
小原は吸いこまれるように歩みを止めた。

小原のロキを慕う感情……。
彼女が、教え子でもある中島朱実のコンピュータ技術によって呼び出された悪魔ロキに、生贄として捧げられたのは、六月のことであった。
当初はこの世に実体として出現することのかなわなかったロキは、イメージの世界で小原を抱いた。
妖艶な小原が男を知らぬわけもない。
が、悪魔との交わりによる強烈な、死を傍(かたわら)においた快楽の渦は、本来彼女が身に備えていた女としての魔性を極限にまで引き出した。
やがてロキは、実体化してアッシャー界に君臨する能力を身につけた。
小原は身も心もロキのものとなり、悪魔の子を身籠(みごも)った。
だが、飛鳥に逃亡した中島を抹殺すべくその後を追ってよりこのかた、ロキはぷつりと消息を断ってしまっていた。
——まさか、ロキが中島ごときに敗れるはずはない。

そう信じてはいたものの、悪魔召喚のプログラムを何度稼働させてみても、ロキからの応えはない。かわって、セトと称する別の悪魔が出現するばかりである。
しかも肝心のCAIルームは、事件以来公式には立ち入りを禁止されており、自由にコンピュータを動かすことさえままならなくなってしまっていた。
なんとか盗み出すことに成功した悪魔召喚プログラムを、どこでどう稼働させればロキに会えるのか。小原にはまだ、そのあてすらない。
——でも、このプログラムさえあれば……。
ロキの幻影を振り払おうとするかのように足を早めた小原の背に、
「ヨッド・ヘー・ヴァウ・ヘー」
ねっとりとした声が、たしかにそう告げた。
小原の歩みがぴたりと止まる。
「…………」
振り返った小原に、イスマの唇から白い歯がのぞいていた。
結界を解いたせいか、道行く人々の好奇に満ちた視線が、美しい女と異形の外人の妙なとりあわせに注がれる。
「行こう」
半眼に閉じられた目で小原を睨むと、イスマは黙って歩き出した。
見えない糸に引き寄せられるかのように、小原もまた、イスマの後に従っていた。

＊

男は急いでいた。

猪首にちょこんと乗っかった禿げ頭の赤ら顔が、期待に輝いている。

新宿駅西口の高層ビル街のはずれにあって、外人宿泊客の多いことでも広く知られる西都プラザホテル。

ロビーを小走りにエレベーターに向かう男の様子は、決してこのホテルにふさわしいイメージとはいえない。

島崎竜之助。

外資系資本と結んで、内外企業の買収に辣腕をふるう金融資本家として、悪名をはせる男である。

三百社にのぼる島崎の傘下企業が、一日に動かす資金は、ゆうに五百億を超えるといわれている。

また島崎は、与党自由党に太いパイプを持つ財界人としてもよく名を知られていた。

その彼が秘書も連れず、一体、誰を訪ねようというのか。

十五階に停止したエレベーターから吐き出された島崎は、一五〇四とプレートに記されたルームの前で足を止めた。

「ロキは悪魔よ！　悪魔が死ぬわけがないじゃないの！」

洩(も)れ聞こえてきた女のヒステリックな叫びが、島崎の動きを滞(とどこお)らせる。いぶかしげにポケットからメモを取り出し、部屋番号を確かめる。やがて、おもむろに彼はドアをノックした。

「すると現在は、ロキにかわってセトという名の悪魔が現れるわけですな」

島崎のせっかちな、ハイトーンの声が問いかける。

「ミス・オバラの話によればね」

薄い唇を曲げてそう答えたのはイスマである。

イスマは、小原から聞きだした悪魔召喚のこれまでの顚末(てんまつ)を、こと細かに島崎に伝えていた。

その間、呆(ほう)けたように突っ立っていた小原が、唐突にドアに手をかけた。

「どこへ行く」

イスマの視線が小原を呪縛(じゅばく)した。

「あなたの指図(さしず)は受けないわ」

苛立(いらだ)たしげに睨みかえす。

だが、イスマは露ほども動じる気配はない。蜘蛛を思わせる細い腕が空を泳いだかと思うと、たちまち小原は首筋を押えられていた。

「お前一人に何ができるというのだ。確かにロキが死んだと決まったわけではない。だが、にわか仕込みの貴様の知識でこれ以上プログラムを稼働させてみたところで、セトに取り殺され

るのが、おちと知れ！」
　イスマが投げ棄てるように小原を放つ。
　崩れるようにしゃがみこんだ白いうなじには、くっきりと赤黒い指の跡が残っている。
　屈辱と困惑の交錯した目をドアに向けたまま、小原は荒い息を吐いていた。
「ミスター・シマザキ。急いでコンピュータを用意してもらえるかな」
「喜んで、セイント。ＩＢＭの大型コンピュータでも、クレイ１(ワン)でも、ご指示どおりのマシンを準備いたしましょう。そのかわりと言ってはなんですが、悪魔の力をぜひ私にも……」
　島崎はもみ手せんばかりのへり下りようである。
　皮肉な笑みでこれに応えたイスマの眼が、這(は)うようにドアからのがれようと試みる小原を捉(とら)えた。
「まだ分からぬのか！」
　振り向きざまに、
「ヨグソホート・ヤ・リュビケイ・ハラ」
　低い呪文がイスマの口をついて出る。
　その瞬間、小原は獣のような呻(うめ)き声を発して床に転がった。
　両手で喉を必死にかきむしっている。
　マニキュアの光る長い爪が素肌に食いこみ、血の筋を引く。
「お前の首についたその痣(あざ)、滅多なことで消えはせぬ。私が呪文を唱えるたびに、お前は絞首

台の苦しみを味わうことになるだろう」
イスマの声は、もだえ苦しむ小原の耳に、遠い残響のように聞こえた。

＊

中島の四方に、無限の虚空が広がっていた。
光も闇もない渾沌。
つい先程まで、イザナミの墳墓を守る朱の壁と、清浄な空気が彼を取り巻いていたというのに。
恐れが彼を跪かせる。
美少女といっても十分に通用しそうなほっそりした顔の切れ長の目が、固く閉じられた。
だが、頭蓋の中で、凛とした声が彼を叱責した。
「立つのです……そして思い浮かべるのです、あなたを今、一番必要としている人を！」
中島は懸命に弓子の顔を思い描こうとした。
眼前に白い霧が渦を巻き、人の顔の形をなぞりはじめる。
「弓子！」
だが、その名を呼んだ途端、霧は形を崩した。
何か、体が、幾分小さくなったように感じられる。
「中島君、私よりもずっとあなたを必要としている人がいたはずよ」

懐かしい弓子の声。が、声はすぐに遠ざかる。
「アケミ、アケミ」
かわって聞き慣れた声が、彼の名を呼んだ。
中島は、反射的に両耳をしっかりと押えていた。
呼びかける声はどんどん大きくなる。声の大きさに反比例するかのように、中島は体の矮小感に捉われていく。
再び凝集した白い霧が、彼に似た面差しの美しい女性を描き出す。中島の母である。
「嘘だ！　ぼくはあなたになど会いたくはない」
駄々っ子のように彼は叫んだ。だがそれは声にならない。
家庭を顧みることの少ない母親に対する反感は、彼の自我を支えるほどに強いものであったのかもしれない。
けれどもやがて、膨れあがった霧は、ゆっくりと彼を包み込んでいった。
「い・や・だ！」
必死の抵抗に、一瞬、霧の流れが鈍る。
美しい顔が、寂しげに彼を見降ろしていた。
がんじがらめに体を縛りつけていた糸が融解したかのように、その優しい眼差しは、中島の心を解きほぐしていた。
「母さん」

呟(つぶや)いた瞬間、彼の体は霧を構成する雨滴の一つに変じていた。
至福感に融け込もうとするかのように、彼は全身を投げ出していた。
ゆらゆらと中島を包みこんだ霧が、静かに虚空を移動しはじめる。
距離も、時間も、そこには無かった。
――ずっとこのままでいたい……。
中島はそう念じていた。しかし、いつの間にか、虚空は実像を伴いはじめる。
ほの暗い照明が、白い壁が、中島のまわりに渦を巻く。
視界の隅を、沈んだ表情の母の横顔が通り抜けていった。
「母さん」
無重力状態のような浮遊感が、意識を惑わせる。
「むう――」
呻き声をあげて起き上がったとき、すでに彼は現実世界に降り立っていた。
見慣れたソファ。見慣れたサイドボード。どこか閑散とした部屋に、一人もの想いにふける寂しげな母親の後ろ姿があった。

＊

イスマ・フィードがはじめて小原との邂逅(かいこう)をはたしたのと同じとき、首相官邸を、一人の外人が訪れていた。

まさに中島が、イザナミの神力によって、母の待つ現世へと、その身を転送されていた頃である。

「All right, Richard. I'll do my best for your friend Dr.Feed」

国際電話を切ると、眼鏡の奥の実直そうな目が、とまどいがちにソファの外人を見やった。

内閣官房長官の藤田。そしてここは、彼の執務室である。

「止むを得んな」

呟きながら、いかつい指でインターホンのボタンを押す。

「特務二部の成川をよこしてくれ」

短く命ずると、藤田は立ち上がった。

「ドクター・フィード。たった今、リチャード大統領補佐官から、あなたのことをよろしくとの依頼を受けました」

「ありがとう……」

ひょろりと背の高い白人が、そそくさとソファから立ち上がった。見事な白髪と、それにまけないくらい白い髯。

ISGの創始者。チャールズ・フィードMIT教授である。

「まあ少しお待ち下さい。ドクター・フィード」

ぎこちない微笑で相手を制すると、藤田は向かい合ったソファにどさりと腰をおろした。

「わが国の一高校で起きた行方不明事件に、なぜあなたのような方が興味を持たれたのか。ま

してや、大統領補佐官までが、なにゆえにその後押しをするのか、私にはよく分かりかねるのですが……」

「それはおそらく、少々説明してみたところで、納得してはもらえんでしょうな」

フィード教授の表情が複雑に曇る。

ノックの音がした。

「入れ」

振り返った藤田がそう命じると同時に、小柄でほっそりした影のような男が、ドアを後ろ手にしめていた。

「内閣情報調査室、特務二部の成川をご紹介しましょう。警視庁を経由していたのでは、なかなか自由な調査ができにくいでしょう。その点、この男と一緒なら、どのような局面においても、あなたの自由は保証されます」

成川が右手を差しのべる。青白い手の甲に、火傷の跡がはりついている。

「よろしく、ミスター・ナルカワ」

その手を握り返したフィードは、次の瞬間、電流にでも打たれたかのようにビクッと顔をあげた。

「成川は武芸百般に長じた男です。ボディーガードとしても、十分に教授を守ってくれることでしょう」

藤田の言葉に、フィードを見上げる成川の細面(ほそおもて)が不敵に微笑(ほほえ)んだ。

焼けつくような日射しを浴びた武蔵野の木立ちが、十聖高校に向かうキャデラックの車窓を滑るように流れてゆく。
「これが中島朱実に関するすべての資料ですね？」
後部座席に深々と身を委ねたフィードが、隣席でしきりと無精髭をなでている岩間刑事に問いかけた。
「ええ。ごく普通の高校生に、それ以上の資料は準備できません。けれどもドクター・フィード、あなたは本当に中島が、今回の事件の首謀者であるとお考えなのですか？」
岩間には、まだこの奇妙な白人が、なぜ捜査に介入してきたのか、納得がゆかない。
「ある意味で、彼は被害者ではないかと、私は予想しています。しかし、彼が今回の事件にはたした役割は、非常に大きなものがあります」
「それには何か根拠でもあるのですか？」
岩間の口調は、胸の内の不快感を隠しおおせてはいない。
——生徒一人一人に関する調査は、とうの昔に終えている。中島朱実というのは、確かに目立つ生徒ではあったようだが、暴力的な性向はうかがえない。教師達にも評判のよい生徒だったはずだ。
だがフィードは、岩間の心中など一向にかまう様子もなく、忙しげに資料を指で捲っている。
「彼が、私の主宰するオンラインデータベースに残した記録です。事件が起こったのは、確か

……」
「日本時間で、七月十三日の、午前十時から十二時の間です」
感情のない声が、運転席から割って入った。
成川である。
「まさにその時間に、中島はマサチューセッツ州アーカムに設置された人工知能クラフトと、オンライン対話（チャット）を試みているのです」
「なんですって！　そんな重要な話をなぜ、今まで……。いや、失礼。ただ、当然その内容は公開いただけるのでしょうな」
「安易に公開できる内容ではないからこそ、私がこうして出向いてきているのではありませんか」
フィードの口調は、あくまでもおだやかである。
「しかし、それは捜査上の……」
思わず身を乗り出したところを、急な減速に出喰わして、岩間は体を前にのめらせる。
黒塗りのキャデラックは、すでにカーブを描いて十聖高校の校門をくぐっていた。

――この連中、よく平気でいられるもんだ。
密閉されていたＣＡＩルームにこもる熱気と異臭に顔をしかめながらも、岩間は状況の説明を続けていた。

「すると、この物質の解析結果は、まだ明らかにされていないわけですな？」
瓦礫に付着した粘着物を、手慣れた仕草でシャーレにおさめながら、フィード教授が問いかける。
「残念ながら、今のところ……」
岩間は渋面を作ってみせる。
そのとき、成川の腕に小さな発信音がした。
「本部からの連絡が入ったようだ。失礼」
成川の動作には、いつもながら無駄がない。
かわって、マシンルームから、CAI担当の教師が顔をのぞかせた。
「ホストコンピュータの準備が整いました。どうぞこちらへ」
エアコンが稼働しはじめ、蒸し風呂のような室内に、ようやく冷風が流れはじめる。
「マシンはIBM製ですね？」
手慣れた動作で、フィードはホストコンピュータに収納されたプログラムの内容を調べはじめた。
節くれだった指がキーを叩（たた）くと、膨大なプログラムリストが画面を駆ける。
「MATHEMATICS I（ワン）, It's not!」
手にしたプログラムの一覧表に、赤印がつけられる。
――たしかに、コンピュータの内容はチェックすべきだったかもしれない……。

ディスプレイの一覧表を見比べるフィードの背中をぼんやりと見やりながら、岩間は内心後悔していた。

「ENGLISH READER II(ツー), It's not!」

次々と画面に表示されるプログラムリストを、鷹(たか)のような目で追っていたフィードは、やがてがっくりと肩を落とした。

「私が見たいと思っているプログラムは、ここに無いのかもしれません。あとは、O(オペレーティング)・S(システム)に仕掛けを加えた可能性があるくらいでしょう。このシステムのO・Sのマニュアルを見せていただけますか」

「それでしたら、職員室に置いてありますが」

わけが分からないといった表情の担当教師である。

「いや待てよ……」

不意にフィードは、不安げな視線で教師と岩間を見比べた。

「事件が起こってから、このシステムをいじった者はいないのでしょうな？」

「警視庁としても、当然、一切この部屋の中のものには手を触れないよう、指示はしてありますが」

岩間の一瞥(いちべつ)が、教師に向けられる。

そのとき、いつの間に戻っていたのか、成川がフィードに何やらメモを手渡した。

“Ⓝ came back”

紙片を目にした途端、フィードの顔が輝いた。

遠慮がちにソファに腰を降ろした男は、内閣情報調査室の佐賀とだけ名乗った。耳なれない組織の名称。

男の口ぶりから察するに、その組織は警察よりももっと強大な権力を持っている様子だった。そんな連中が、どうして息子の朱実にかかわり合おうとしているのか。

「お母さん、あなたにはぜひ、われわれの調査にご協力いただく必要があります。朱実君のために……」

＊

実のところ彼女は、十聖高校にいったい何が起こり、息子がそこでどんな目にあったのか、何一つ聞かされてはいない。

だが、突然、空から降って湧いたように舞い戻ってきた朱実の自分を見つめる目には、今まで見せたことのない暖かい光が宿っていた。甘えるような、それでいて反対に彼女を包みこんでくれるような優しい目であった。

朱実は何も語りはしなかった。現れた状態のまま、小一時間も彼女の背中に顔をよせ、じっと何かを考えこんでいただけである。

彼女は、朱実を抱きしめたいという想いを懸命にこらえていた。そうすることで、また再び朱実がどこか遠くへ行ってしまいそうな、そんな気がしたからだ。

やがて気持ちの整理がついたかのように立ち上がると、朱実は自室に引きこもり、泥のように眠り込んでしまった。が、それでも彼女にとっては十分だった。
わずか一週間の間に、自分の息子がどれほど激しい未知の体験を経たのかを、彼女の母親としての本能は、敏感に感じとっていた。
——何があったのか、どんなことが起こったのか、決して知りたくはない。けれども朱実は、少なくとも自分を置き去りにはしなかった。
彼女は今、あらためて自分の息子に心の底からのいとしさを感じていた。
——もし朱実を脅かすなら、誰だって許さない！
母親の厳しい視線を幾分もてあまし気味に思ったのか、佐賀と名乗った男は胸ポケットからマイルドセブンを取り出した。
「すみませんが、灰皿を貸していただけますか」
口を開いた途端に、チャイムが鳴った。
母親は立って壁のインターホンをとる。
「……ええ、先程からお仲間がみえていますわ。今、開けますから、少しお待ち下さい」
小型スピーカーの声にそう応えた彼女は、意を決したように下唇を嚙むと、玄関に向かった。
苦笑を洩らして、なごりおしげに煙草を箱に戻すと、男もその後に続いた。

第二章　胎動

ちょうど武蔵野市と三鷹市にまたがる格好で、蘇我の森と呼ばれる二千坪ばかりの雑木林が広がっている。

年輪を重ねたカラマツやブナが雑然と生い繁る、この武蔵野の面影を彷彿させる樹林は、昼の間、子供達のいい遊び場にもなっている。

けれどもその子供達も、雑木林の片隅に濃緑色の水草をたたえた沼には、決して近寄らない。それは危険な水遊びを恐れる親達の、とがめだてのせいばかりでもあるまい。ほとりに建つ朽ちかけた洋館の、言いようのない不気味な雰囲気が、沼そのものにとりついてしまったのかもしれない。

もとは戦犯となった旧華族の持ち家であったと伝えられるこの洋館は、迎えた住人のことごとくに不幸が相次ぎ、果ては最後の家族全員が強盗に惨殺されるという事件があって以来、借り手すらもつかぬままに放置されていた。

島崎が悪魔召喚の地としていくつもの候補を掲げた中で、イスマをしてこの館を選ばせたのは、やはり魔道士の感性に強く働きかける何ものかがあったのだろう。

ひんやりとした、コンクリートをむき出しにした地下倉庫。
その一角から、微かに異臭が漂ってくる。
螢光灯の光が、まだ乾ききらない赤黒い塗料が描く、奇怪な紋様を浮かび上がらせている。
鳥の目を抽象化したような、不思議な幾何学紋様である。
鳥の目の中央にあたる部分には、コンピュータの本体が設置されている。
そして、そこから伸びた五メートルほどのケーブルが、やはり赤黒い塗料で描かれたソロモンの六角形へと続いている。そこにはキーボードとディスプレイが設置されていた。
「これでセトを招く準備はすべて整った……」
コンクリートの壁に、六角形の中央に立つイスマの冷ややかな声が反響した。
ディスプレイには、先ほどからヒエログリフ（エジプトの象形文字）らしきものが表示されていた。
六角形の隅に立った島崎は、しきりと唇をなめまわしている。
イスマの節くれだった指がキーボードを叩く。
おもむろに回転をはじめたハードディスクの唸りとともに、ディスプレイに意味不明の模様が明滅をはじめた。
やがて画面が黒く染まり、束の間静止したかと思うと、突如として大地が鳴動をはじめ、館全体を揺るがした。
脅えたように視線をめぐらす島崎。が、イスマは動じる気配もない。

「来るぞ！」

ピシッ。

コンピュータの置かれた場所を軸に、コンクリートの床が放射状に亀裂した。

床の裂け目から、たちまち瘴気が吹き上がる。だが、ソロモンの六角形は、平然とその異変から守られていた。

「わしを呼ぶのは誰か」

まといつくようなかすれた声が、スピーカーからこぼれ出る。

「我、セトのロメト（人間）、イスマ・フィードなり」

「聞かぬ名だ」

今にも腰をぬかさんばかりの島崎が、よろよろとイスマのかける椅子の背に倒れかかる。

その手を邪険に払いのけると、イスマはディスプレイにいどみかかるかのように仁王立ちになった。

「ヌートの子セトと力を一にし、アッシャー界支配を図る者と知れ」

「…………」

しばしの間、沈黙が流れた。

ハードディスクの激しく回転する音が、大量のデータ処理の行われていることを告げる。

ややあって、再び低い声が響いた。

「わしを呼んで何を献ずる？」

「望むがままに。ただし、私に力を貸すことがその条件だ」
「人間の分際で、わしに伍するつもりか」
「いかにも。今、汝をアッシャー界に呼ぶことのできる者は、私をおいて他にない」
「何をこしゃくな……」
陽炎が立ち昇るかのごとく、コンピュータのまわりの空気が揺らめいたかと思うと、熱波がイスマを襲う。
怒りの波動のすさまじさに、さしものイスマも一歩引き下がった。
天井を支える鉄骨が弓のように曲がり、螢光管がガラスの塵と化して降りそそぐ。
島崎はとうに膝を折っていた。
しかしイスマは、コンピュータの画面を臆することなく凝視し続けている。
「セトよ、汝がどれほどこのアッシャー界に執着していたか、私が知らぬとでも思うのか」
静かな声色に、烈風がぴたりとやんだ。
「アッシャー界をわがものにせんと、実の兄オシリスを殺し、ホルスを擁するすべての神々を敵にまわしてまで戦い抜いた汝の伝承、今の世にも飽くほどに伝わっておるわ」
「だからどうだというのだ」
セトの声にも、若干の躊躇が見られた。
「汝ら魔族を縛る数々の掟を破るだけの技術を、私は身につけている。私と組むことは、大いなる繁栄を約することになるはずだ」

ややあって、ディスクが再び回転音をあげる。
「イスマとやら、お前と誓約をかわすことをヌートに誓おう」
セトの声が不満げに響いた。
悪魔にとっては、自らの上位者の名をあげての誓いは、絶対を意味している。イスマの頬に、勝者の笑みが浮かんだ。
「何なりと、私にできることのすべてを献じよう」
「わし以外の魔族と手を結ばぬことを誓うか？」
「よかろう。汝が私以外の人間と結ばぬことを、ヌートに誓うのならば」
すでに悪魔セトとイスマは、具体的な契約に入っていた。

*

唐突な帰還を遂げてより後、見るからに衰弱し切っていた中島は、内閣情報調査室の保護のもとに、国立武蔵野病院で体調の回復を期していた。
「これで何もかもお話したと思います、フィード教授」
ベッドに半身を起こし、フィードのもの問いたげな視線を正面から捉えた中島の口調は、どこか虚ろであった。
——心の一部が、目覚めることを拒否しているようだ。自分が呼びだした悪魔に、級友達が殺されたという事実を、認めたくないのだろう……。

フィードは、初対面の中島にそんな印象を受けた。

「何と言っていいか……。君が最初に悪魔を呼びだし、クラフトとコンタクトをとったとき、私がアメリカにいさえすれば、こんな事態は決して招かなかったはずだ。しかし、君が重大な罪を犯したことに変わりはない。法がそれを裁けるかどうかはともかくとして……」

フィードは、部室の隅で、感情を表に出さぬ顔で話に耳を傾けている成川を、ちらと見た。

「殺人教唆(きょうさ)の立証は難しいでしょうな。せいぜいコンピュータのマシンタイムの盗用といった罪止まりでしょう……」

中島の横顔をじっと見つめていた成川は、フィードの視線にうながされたのか、とってつけたような法解釈を口添えする。

成川はこの美少年に、久しく離れていた恋人に再び出会ったときのような、妙な胸の高鳴りを感じていた。

最初は我知らず、中島の美形に魅惑されてしまったのかとも思った。が、時がたつにつれ、それはもっと異質な、懐かしさを伴った感情であることに気づいた。

——どこかで会ったことがあるような……。

けれどもいかように記憶の糸をたぐりよせてみても、成川には中島との接点を見いだすことはできなかった。

「まさかコンピュータによる悪魔召喚を成功させるほどの頭脳が、この日本に生まれていようとは……」

フィードの呟きが、成川の既視感覚を破る。
「僕の能力というよりも、東京という都市が悪魔召喚に適しているのでしょう。同じようなコンセプトで作られたプログラムは海外にも多くあるはずですが、成功例は聞いたことがありません」
中島の口調は、もはや他人事を語るかのように冷静である。
溜め息をついたフィードは、話題を変えた。
「ところで、問題のプログラムはどこにあるのかね？」
「十聖高校のホストコンピュータに入っているはずですが」
「ファイル名は？」
「DEMONです」
フィードと成川が顔を見合わせる。その意味を中島はすぐに理解した。
「誰かが消去したのですね」
「君以外の誰にそんなことができる？」
「おそらくは、小原でしょう」
成川が横から割って入った。
「当面、私は小原の行方を追うことにします。中島君の話を全面的に信じたわけではありませんが、彼女が事件の鍵を握っていることだけは確かなようですから」
ドアを開けた成川と、ちょうど入れ替わるように、中島の母が病室に顔をのぞかせた。

「フィードさん。もう一時間以上にもなりますわ。朱実はまだ体の具合が十分ではありません。そろそろお引きとり願えませんでしょうか」

「おそれいります、ミセス・ナカジマ。けれどもご子息のためにも、中途で話をやめるわけにはいかないのです」

断固とした口調で、フィードが首を横に振ってみせる。

「大丈夫だよ、母さん」

息子にまでたしなめられて、不承不承引き下がった彼女だが、ドアの曇りガラスに、聞き耳を立てる影が映っている。

苦笑まじりにフィードは、中島の耳元に口を寄せた。

「私に協力してくれる意志はあるんだね？」

「ええ……勿論(もちろん)です」

「まずは、どこからはじめるのがいいんだろう？」

「……そうですね、やはり悪魔召喚のプログラムを、もう一度、作り直す必要があるでしょう……」

呟いた中島の表情には、どこか虚無的な影があった。

＊

八月一日、深夜。

新たに大型コンピュータが増設された地下倉庫は、やや手狭に感じられる。
小原が盗み出してきた悪魔召喚のプログラムは、イスマの手により大幅に改良が加えられていた。
島崎傘下のソフトウェア技術者の手助けがあったことはいうまでもない。が、デジタルデビル・セトの実体化は、思いのほか困難を伴うものであった。
「セイント、いかがです、進行状況は？」
島崎の声にもやや焦りが感じられる。
「どうもこのプログラムには不備な点が多すぎる。悪魔の召喚には、まず悪魔を呼ぶための磁界を設定し、しかる後に実体化を手助けするという二段階の手順を踏むことが必要なのだ。ところがこのプログラムでは、その手順がごっちゃに入りくんでしまっておる」
「でも現に、ロキとかいう悪魔は、そのプログラムで実体を持つことができたんじゃないですか？」
「魔物としての格は、はるかにセトの方が上だ。処理するデータ量がロキの場合とは比較にならん。おまけにこのプログラムをそのまま稼働させると、低位の悪魔がセトのデータの中に入り混じってしまうため、なおさら実体化が難しくなっておる。私なりにプログラムに改良を加え、データ処理の効率化をはかってはいるが、未だセトを実体化させるには至っていない。とにかく、まずは低位の悪魔を分離実体化させるところからやってみよう」
ソロモンの六角形に入ると、イスマはキーボードに触れた。

磁気テープがカタカタと音を立てて回りはじめ、ディスプレイが目まぐるしく明滅する。
物音もせぬまに、あたりに麝香の香が満ちる。
「ヨッド・ヘー・ヴァウ・ヘー」
くぐもった声とともに、ディスプレイの表面に、白濁した水滴が付着しはじめた。
「おお、ついに！」
イスマと島崎は、身じろぎもせずに画面を見やっていた。
やがて画面が水滴に覆いつくされたかと思うと、ズルリとそれは床にこぼれ落ちた。
と、掌に乗るほどの小さな白蛇が二匹、うねうねと水滴の落ちたはずの床を這いまわっている。
不審げに屈みこもうとする島崎を、イスマが一喝した。
「近寄るな！　命が惜しいのならな」
「このちっぽけな蛇は何者ですか？」
島崎は、もの足りなそうな声である。
「セトの眷族の一つ、アピペという毒蛇だ」
「このような小さな蛇が、なにほどの力を持つというのです？」
「アピペは人の体内に入りこみ、毒をもって脊椎を溶かし、自らが神経となり、その者を操るのだ」
ゴクリと島崎が唾を飲みこむ。

「アピペは、セトが人間を遠隔操作するための一種のレシーバーの役割をはたす。使いようによっては、むしろどのように強大な力よりも役に立つ……」
イスマは宝石でも見るかのように目を細めて、うごめく二匹の小さな毒蛇を見やった。

同じ洋館の二階、ベッド以外にはこれといった家具も置かれていない十畳間。
カーテンを開けると、沼の面(おもて)を覆う水草の合間に、満月が静かに波打っている。
「ロキ……」
呟いた声は闇に溶けこんでいった。
小原には、帰る家もなかった。
島崎の手の者が、自分の家にも捜査の手が伸びていることを告げていた。
——けれども、誰がこれほどまでに奇怪なことの真相を知り得るだろう。いや、もし真相を語る者がいたとしても、ほとんど異常者扱いされるのがいいところに違いない……。
腹部がしきりに動く。
——まだ三月(みつき)にもならない子供が、こんなに暴れるものだろうか？　想像もつかない能力を持った子供が生まれるのだろう。ロキの子なら、きっと美しい容貌(ようぼう)を備えているに違いない。
そっとカーテンを引いた小原は、ベッドに腰をおろした。
——それなりに平凡な結婚を夢見ていた自分が、今は嘘(うそ)のように思えてくる。いったいどこへ行ってしまったの、ロキ……。

直感は想(おも)い人(びと)の死を告げていた。だが、それを認めたくはなかった。
ロキに替わる存在が、この世にあるとは思えなかった。
――中島、白鷺、もし生きていたら、私と同じ苦痛を、きっと味わわせてやる。
嚙(か)みしめた唇に血がにじんでいた。
手の甲には、うっすらと緑色の鱗(うろこ)が光る。いつのまにか、小原の体にも魔性の力が宿りはじめていた。

*

新宿中央公園の裏手にある、国立電子産業研究所、通称電産研の真新しいビルの一室を、ところ狭しと並べられたコンピュータ機器類と、何やら複雑な数式の書きなぐられたホワイトボードが占拠していた。
端末機の置かれたデスクを囲むように床に描かれた朱色の円が、ひときわ異彩を放っている。
フィード教授が、官房長官に直訴して作らせた、退魔プロジェクト推進室である。
勿論、退魔などという名称を公的に使用できるはずはなく、部屋のドアには「新ＡＩ（人工知能）プロジェクト推進室」と記されたプレートが掲げられている。
一週間前の夕刻、フィードは体調の回復した中島と、成川とともに藤田官房長官を訪ねていた。
フィードは中島の個人的な立場にさしさわりがない範囲で、コンピュータに呼び出された悪

魔との戦いの顚末と、事件が将来にもたらす危険性について説明を重ねた。

が、藤田官房長官の返答はつれなかった。

「いかにMITのフィード教授の言葉とはいえ、悪魔の存在など信じろという方が無理でしょう」

藤田の眼鏡の奥の目は、驚きを通り越して困惑を浮かべていた。

「少なくとも米国の政府高官の中には、その可能性を信じる者が決して少なくありませんがね……」

フィードは肩をすくめてみせる。

「ただでさえ手の足りないところを、内調の中でも最も優秀な捜査官を、教授の趣味にお付き合いさせているんですよ……」

藤田としては、精いっぱいの抑えた皮肉である。

「中島君、ケルベロスをお見せしてくれないか」

それまで藤田とフィードのやりとりを黙って聞いていた成川が、口を挟んだ。

「わかりました」

気のない素振りでハンドヘルド・コンピュータを取り出した中島が、キーボードに指を滑らせる。

液晶ディスプレイの表面に立ち昇るもやに、藤田の貧乏ゆすりがピタリと止んだ。

急速に膨張をはじめたもやは、次第に異界の獣の輪郭を露わにする。やがて、臓腑をえぐる

すさまじい唸り声が執務室を揺るがしたかと思うと、炎のような二つの目が、藤田を睨みつけていた。
「これは……」
「悪魔ですよ、長官。もっとも主人である中島君に忠実な、きわめておとなしい悪魔ですがね」
ケルベロスの今一度の咆哮にのけぞった藤田は、もう分かったといわんばかりに、手を振った。

退魔プロジェクト推進室の最初の仕事は、何者かによって消し去られた悪魔召喚のプログラムを、作り直すことであった。
そのこと自体は中島にとって苦もない作業である。
「以前のものと比べてどうかね？」
数日後、ほぼ再構築を終えたプログラムのリストを一行ずつ確かめていた中島の背に、フィードが声をかけた。
「マシン語サブルーチンの一部が、少し前のものとは違うかもしれませんが、大筋に変わりはありません」
中島は幾分沈んだ声で言った。
もう悪魔となどかかわりを持ちたくないというのが、彼の本音なのかもしれない。

「やってみるかね？」
硫化水銀で描かれた朱の円の中に足を踏み入れながら、フィードはこともなげに言った。
「はい」
コンピュータの稼働音とともに、麝香に似た刺激臭が鼻をつく。
奥深い鳴動が、真新しい建物を覆い尽くし、白壁に亀裂を走らせる。
「悪魔が現れたら、後の処理は私にまかせなさい」
フィードの右手は、しっかりと十字架を握りしめていた。
このとき中島は、はじめて彼に親近感を覚えた。
が、鳴動はそのまま次第に遠ざかり、麝香の香も薄れてゆく。
「プログラムのどこかにミスがあったのでしょうか？」
フィードに中島のもの問いたげな視線が向けられていた。
「いや、今の状況から判断して、悪魔召喚の磁界が設定されたことは疑いあるまい。にもかかわらず悪魔が姿が現さないのは、他の磁界を通じてすでにアッシャー界に出現しているからなのかもしれない」
「降魔のメカニズム自体、ぼくにはまだよく分からない点があるのです……」
「世界で初めてコンピュータ降魔を成功させた天才の言葉とも思えんな」
フィードは鷹揚に笑って見せたが、すぐに真顔に戻って中島の目を正面から捉えた。
「最後に現れた悪魔は、たしかに自らセトと名乗ったんだね？」

「はい」

「もとより、魔界の事象をわれわれの世界観を基準に推(お)し計(はか)ろうとすることは、危険にすぎるが、私は魔界を、力ある悪魔を核(コア)として成立した無数の小宇宙の、ゾル状集合体であると考えている。おそらくはロキの死とともに、この日本に近接する小宇宙が消え、そこにセトの小宇宙が流入してきたのだろう。悪魔召喚とは、小宇宙との接点を開くことに他ならない」

「では、二カ所で同時に接点を開いた場合にはどうなるのです？」

「どちらに出現するかは、悪魔自身の選択に委ねられる。だが、磁界の強さが極端に違う場合、悪魔の意志とは無関係に、強い磁界に引き寄せられた例が、中世の降魔記録に多く見られることも事実だ……」

控え目なノックの音が、フィードの説明を中断した。

ぶ厚い書類の束を抱えた成川が、後ろ手にドアを閉めて二人に近付いてくる。

「首都圏に限定した場合、降魔に利用できる規模のコンピュータの設置台数は、六千台を越えない程度ですな。人海(じんかい)戦術をとれば、一カ月で詳しい設置場所まで調査の可能な数字です」

と成川。

彼はこのプロジェクトが正式に発足して以来、小原の行方を追うと同時に、悪魔召喚に必要なハードウェアに着目し、中規模以上のコンピュータの設置状況を調べていたのである。

「なるほど。しかし、小原の行方はまだ分からんのかね？」

「残念ながら。ただ、教授の耳に入れておきたいことがありまして……」

成川が声を落とした。
「何かね」
いぶかしげにフィードが眉を寄せる。
「教授はイスマ・フィードという男を御存知でしょうか」
その名を聞いた途端、教授の表情がにわかに曇ったのを中島は見逃さなかった。
「どこでその名を？」
「ＦＢＩから、イスマが日本に潜入した旨、連絡が入ったのです」
「やっかいなことになった。知ってのとおり、セトは蛇の化身として、エジプトのすべての神々を相手に単身戦いを挑み、互角に戦い抜いたという強者だ。そのセトとイスマが手を結ぶようなことでもあると……」
呟いたフィードの目は、焦点の合わぬまま窓の外に向けられていた。

＊

永田町の参議員議長公邸に近接する八階建てのビルの二階に、自由党の幹事長をつとめる太田優の個人事務所がある。
奥に設けられたプライベートルームでは、ベッドに腰をかけた太田が、午前一時だというのに、もう小一時間以上も受話器を握りしめたなりであった。
国家機密保護法の成否をめぐって、このところ睡眠不足が続いているのだろう。ブルドッグ

と渾名(あだな)される肉厚の顔にも、さすがに累積した疲労が色濃かった。

「そもそも君は、国家機密保護法の必要性を提唱してきた一人でもあるんだよ。その君が今さら及び腰では話にならんじゃないか」

太田の声は、やや投げやりにも聞こえた。

「とにかく的場(まとば)が反対である以上、諸手(もろて)をあげて賛成とはいかないのも、十分お分かりいただけるはずです」

受話器の向こうの声も疲れている。的場委員長の名前をあげていることから察するに、相手は野党第三党である社民党の国会議員であるのだろう。

「私も的場の説得には十分尽くしたつもりです。それでもなお不足とおっしゃるのなら、太田さんからお話しいただくほかありませんな。連合政権を前提に話されれば、的場もまんざらではないでしょう」

言うだけ言った格好で、ぷつりと電話は切れた。

「チッ」

受話器をたたきつけた太田は、背からベッドに倒れ込んで、瞼(まぶた)を指でもみあげる。深い呼吸とともに、太鼓腹(たいこばら)がカエルそこのけに波打った。

ノックの音がした。

「開いているよ」

欠伸(あくび)まじりに応えた太田は、振り返ろうともしない。

カチリと音をたてて開いたドアから、満面に愛想笑いを浮かべた赤ら顔がのぞいた。
島崎竜之介である。
「こんな時間に何の用か知らんが、わしは余り機嫌がいいとはいえんぞ」
太田はベッドに半身を起こすと、ポキポキと骨を鳴らしながら、ゆっくりと首をめぐらせた。
「ぜひ、お耳に入れたいことがありましてね」
島崎の目が、意味ありげに笑っている。
「もうけ話はありがたいが、今はそれどこじゃないんだ。何が何でも法案の成立が第一だ」
「次期総裁の筆頭候補としては、幹事長職にある間に、一つでも多くポイントを稼いでおきたいというわけですな」
太田のギョロ目が、不快げに島崎に向けられる。だが、島崎は一向にかまうふうもない。
「社民党の的場委員長が、国家機密保護法を支持する側に回るんですから、何もご心配なさることはないでしょうに」
「今、何と言った……？」
はじかれたように腰を浮かせた太田を揶揄するように、島崎は少し間を置いた。
「……私におまかせいただければ、という前提条件を申し上げておきましょう」
「冗談話では済まされんぞ」
太田の声は震えていた。

長らく社民党の委員長をつとめる的場は、池上本門寺より歩いて十分ほどの邸宅街に、中小企業の味方を標榜するにはやや贅沢に過ぎる自宅を構えていた。

古びた和風の門構えが立ち並ぶ中に、蔓草をはわせた門柱と、モダンな鉄筋の二階建てはよく人目を引く。

島崎が太田を訪ねていた頃、その門柱から少し離れた位置に、黒塗りのセドリックから、小ぶりのスーツケースを手にした長身の男が降り立った。

屈強な体格ではあるが、男の素振りにはどことなく落ち着きが見られない。

男は小道を抜けて的場邸の裏にまわると、スーツケースの蓋を開いた。どうやらスーツケースと見えたのは、ハンドヘルド・コンピュータであったらしい。

男がおぼつかない手つきでキーを叩くと、ややあって液晶ディスプレイの表面に、雨滴のような結晶がにじみはじめた。

やがて白濁した液体と化した結晶は、男の足元にぽたりとこぼれ落ち、そこにはすでにセトの分身アピペの蛇身があった。

白蛇は小さな鎌首をもたげてあたりを見回すと、音もなく鉄筋の邸宅内に消えていった。

その頃的場は、執務室がわりに使っている書斎のソファベッドで仮眠をとっているところだった。

目の下に黒い隈が目立つのは、機密保護法の成立阻止にむけ、党内意見の一本化に奔走した疲れのせいか。

情報戦国時代とも比喩(ひゆ)される昨今の情勢を逆手にとった同法の制定が、自由党の右傾化に一層の拍車をかけることは目に見えている。いかに与党に最も近い立場にあるとはいえ、社民党にとってもそれは許し難いぎりぎりの節度であるはずだった。

つけっ放しにされたエアコンが、静かに風を送り続けている。

その風の音さえ乱さずに、ドアの下の隙間(すきま)から、その蛇は入ってきた。

獲物(えもの)を見定めでもするかのように、白蛇はゆるやかに鎌首をもたげた。

軽いいびきをかきながら眠り続ける的場の全身を、赤い小さな目が見すえていた。

白蛇は素早く身をくねらせると、苦もなくソファベッドに這い登り、的場のネクタイを解いてはだけたYシャツの胸に、するりともぐり込んだ。

次の瞬間、大仰(おおぎよう)に膨張と収縮をくり返しているでっぷりとした腹に、白蛇は何の躊躇もなく牙をたてていた。

鋭いドリルの刃のように、白蛇の細い体が的場の腹にのめりこんでゆく。

言いようのない不快感に無意識のうちに腹部に手をやったとき、白蛇はすでに彼の体内にあった。

「うっ……」

突然、高圧電流にでも触れたかのような鋭い痛みが腹部を襲った。

身をよじった的場の顔は、たちまち紫色に変じてゆく。

が、ほどなく痛みは去ったらしく、結局、何が起こったのかもわからぬままに、的場は再び

いびきをかきはじめた。
不思議なことに、腹部の傷はまるで心霊治療でも受けたかのように、あとかたもなく消えている。
しばらくして、的場邸の前から、セドリックの軽いエンジン音が遠ざかっていった。

その翌朝、永田町の事務所で泥のように眠りこけていた太田を、秘書が揺り起こした。
「もう本会議の時間か？」
ねぼけた目で眼鏡をさぐる太田に、秘書の興奮した声が飛びこんできた。
「社民党の的場委員長が、今朝の記者会見で、機密保護法支持の方針を打ち出しました。おめでとうございます、幹事長。これでもう法案は成立したも同然ですね」
まだ夢からさめやらないというように、太田は激しく左右に首を振ってみた。

第三章　セト降臨

昨日来の雨にたっぷりと水分を含んだ蘇我の森の空気は、エアコンがフル回転を続ける洋館の地下室をも、じめじめとした湿気の内に沈めていた。
キーボードを叩(たた)いていたイスマが、階段を降りてくる靴音に眉を寄せて振り返る。
島崎が黄色い歯を見せて笑いかけていた。
「アピペは見事に働いてくれております」
「当然のことだ。だが、アピペに憑依(ひょうい)された人間の体は、十日ともたぬことを忘れるな」
「そういえば、自由党の幹事長がセイントに会いたがっていましたが……」
「この私が日本の政治家になぞ興味を持つはずもなかろう」
イスマの口調には、とりつくしまもない。
島崎はやむなく得意の愛想笑いを引っ込めたが、それでもめげずにディスプレイを見つめるイスマの背後にまわりこんだ。
「今度は何をしておいでで？」
「セトの眷族、アピペの実体化に成功したとはいえ、そんなことはほんの序の口にすぎぬ。あ

くまでもセト自身を実体化させることに成功しないかぎり、真のアッシャー界支配はおぼつかない」
「さすがにセイントは、望みが大きくていらっしゃる。おっと、そういえば……」
わざとらしく声を落とすと、島崎は手近にパイプ椅子を引きよせて、イスマの傍らに腰をおろした。
「どうやら、中島が無事に帰還したようです」
イスマの指先がキーボードの上で動きを止めた。
「中島がロキを倒したということが、それではっきりしたわけだな」
「かと思います。ところでそれに関連して、今ひとつ気にかかることがございまして」
島崎は顔を寄せてきた。
「チャールズ・フィードという男が中島に肩入れをして、悪魔に対峙することを目的としたプロジェクトを発足させたという噂を耳にしたのですが……」
「私の兄だ」
感情のない声でいうと、イスマは再びキーを叩きはじめた。
「ほう、それは何とも妙な因果で……」
島崎にとってはとうに調査済みのところではあるが、一応のところ驚いてみせる。
「今後、どのように対応すべきかを、ご相談にあがったわけです」
蜘蛛のような指をようやくキーボードから離して、イスマはゆっくりと顔をあげた。

「小原をさし向けるがいい」
「はっ……？」
さすがに意味を解しかねたのか、島崎が戸惑いの表情を見せる。
「邪魔なやからには消えてもらうのが一番手っとり早かろうが、奴らの実力も見極めておきたいところだ。小原はこのところ、魔人化の兆候を見せている。奴らの持てる力を計るには、もってこいの捨て駒だ。え、そうは思わんかね……？」
言うとイスマは、含むような笑い声をあげた。

*

その頃、黄泉の国へと誘われた弓子は、イザナミから神の力の伝授を受けていた。
黄泉という特殊な空間の生み出す不思議であろう。わずかな期間のうちに、弓子は自分の内に眠っていた底知れぬ力を、さしたる苦労もなく自在に操っていた。
わずかに二メートルばかりの幅をへだてて、ほぼ地表と垂直に、向かいあって屹立する岩壁。
その合間をぬうように、弓子はゆるやかな浮遊を続けていた。
その白い肌が、次第に紫の燐光に覆われていく。
雷雲のような轟きとともに、燐光はその光量を着実に増しつつあった。
不可思議な光は、弓子をオーラを背に微笑む彌勒像のように見せていた。
やがて弓子自身が光の粒子と化したかのように、その輪郭を曖昧に崩しはじめた。

弓子は静かに右手をあげた。
全身を覆いつくしていた光の雲が、指先に凝集する。
弓子は思い切って腕を振り降ろした。と、指先から放たれた光は、強靭な矢となって岩肌を撃つ。
轟音がとどろき、青い火柱が舞いあがった。巨大な岩が、あたかもスローモーションの映画のように崩れ落ちるさまを、弓子は酔ったように目を細めて見つめていた。
だが、何を感じたか、その瞳が突然に曇った。次の瞬間、弓子の体は二十メートルの高さから、翼をもがれた鳥のようにきりもみしながら、まっさかさまに地上へと落下していった。
「危い！」
着地寸前、目に見えぬ力が弓子の体をふっと持ちあげると、羽のようにゆっくりと下に降ろした。
「どうしたことです、この有様は！」
傍に膝をついたイザナミ神の口調は、いつになく厳しい叱責に満ちている。
「このように未熟な術では、いつになれば現世に帰れることやら……」
が、女神は弓子の瞳に異質な怯えの片鱗を認めると、すぐに言葉をやわらげた。
「何かを見たのですね？」
「はい」
弓子の唇からは血の気が失せている。

「大切な人の叫び声と、血の匂いが……」
「中島の声を聞いたのですか？」
「いえ……」
弓子は静かに首を横に振った。
「母の声でした……」
弓子はすがるように虚空を見やった。
だがもはや、谷をわたる風の音のほか、耳に聞こえるものはない。
「イザナミ様、何か母の身によくないことが起こったのではないでしょうか」
思いつめた声である。
イザナミの体質を受け継ぐ弓子の超感覚には、並はずれたものがあった。
——あるいは予知かもしれぬ。
弓子を帰還させるべきかどうか、イザナミもまた、迷っていた。
弓子は短期間に、十分悪魔に伍するだけの超常能力を身につけたように見えた。
だが、その精神はあくまでも十七歳の高校生のものにすぎない。今日のように、ちょっとした心の乱れが、すぐに術に反映してしまう。
しかも弓子は、能力の発露を視覚に頼りすぎるきらいがあった。
——しかし、心の未熟さは短い訓練で補えるものではない。中島のそばに置いた方が、むしろ欠点の矯正には役立つのかもしれない。

「帰りますか、現世へ？」

イザナミ神は優しく弓子に微笑みかけた。

＊

井の頭線の西永福駅から、線路沿いに続く小道を、チャイナ服を思わせるハイカラーのワンピースに身を包んだ女が、足早に住宅街に向かって歩いていた。

夜目にも艶やかな鳶色の瞳に浮かんだ凄惨な気が、いっそう女の美貌を際立たせている。

やがて女は、白いタイル貼りの中層建築の前で足を止めた。

正面玄関のプレートには、三芝電機社宅という浮き彫りの文字が読み取れる。

社宅とはいっても、上級管理職専用とされているだけあって、ちょっとした高級マンション並みの造りである。

三階建てのあちこちの窓から漏れるおだやかな灯りと、エアコンのコンプレッサーの音が、中に住む人々の安息を告げていた。

女はその最上階の一角を、怨みを込めた視線で凝視した。

——白鷺弓子、どこからなりと見ているがいい。おまえの一家を皆殺しにしてやるわ。

今や魔性をあらわにした女、小原の両目は、銀色の異様な光を帯びて見えた。

ＣＡＩルームで弓子がロキを傷つけた現場を、小原は目のあたりにしていた。実際には弓子に憑依したイザナミがロキと戦ったわけだが、小原にとっては、どちらでも同じことだった。

——もしロキが死んだのだとしたら、弓子のせい以外にどんな理由が考えられるだろう。
小原の白鷺に対する憎しみは、中島に対するそれをはるかに超えていた。彼女が、最初に対するべき敵を中島と指示したイスマに、まずは弓子の家族に危害を加えることによって中島を挑発しようと提言した裏には、そうした心理の背景があった。
小原は気持ちを静めようと、瞼を閉じた。
その表情から険しさが失せ、微笑さえ浮かぶ。
一呼吸おいて、小原は瀟洒な階段をのぼりはじめた。
二度目の軽快なチャイムが余韻を消すと同時に、チェーンをつけたままのドアが細く開いて、光の帯をコンクリートの通路に滑らせる。
いぶかしげな女の視線が、夜の訪問者に向けられた。
「十聖高校の原山と申します。弓子さんのことで……」
さすがに小原も、ここで本名を名乗るわけにはいかなかった。
一度閉じたドアが、チェーンを外す音とともに大きく開かれる。
小太りの中年女が、熱を帯びた視線で小原の長身を見上げるように立っていた。
「わざわざ夜分においでいただきまして……。何か新しい情報でも入ったんでしょうか？」
弓子に似たところといえば、二重瞼の大きな瞳くらいだろうか。
百五十センチあるかないかの上背に、存分に脂肪を蓄えた体つきは、ほほえましささえ感じさせる。

束の間小原は、殺意をそがれた格好で、鼻白(はなじろ)んだ。
「そんなところで何をしてるんだ。上がっていただきなさい」
そのとき、リビングルームの奥から声がしたかと思うと、長身の男が顔を出した。見事なロマンスグレーである。
その風貌に弓子との相似を見出した瞬間、再び小原の理性は消し飛んでいた。
厚い化粧の下で、肌が鱗(うろこ)状に硬質化するのが感じとれる。
「ごめんなさい。つい気が動転してしまって。さ、どうぞお上がりください」
弓子の母は気恥ずかしげに小原を中に招き入れると、ドアをロックした。
シュッ。
聞き慣れない音が、リビングルームに戻りかけていた男の耳を捉(とら)えた。
振り向くと、脱いだ靴を揃えているのか、こちらに背を向けて腰を落とした来訪者を、妻が驚愕(きょうがく)に満ちた目で凝視している。
「おい、どうかしたのか」
が、妻は夫の問いかけに答えるかわりに、ぱくりと口を開けた喉元(のどもと)の傷から、おびただしい量の鮮血をほとばしらせていた。
「クッ、クッ、クッ」
ワンピースの女の背が、こらえかねたように含み笑いを漏らす。
男は、喉元を鋭く両断された妻が、空気の抜けた人形のように、血の海と化した玄関先にへ

なへなと崩れ落ちるのを、まだ信じられないといった面持ちでぼんやりと見つめていた。すでに倒れた妻の目に生気は見られない。

「クォッ、ホッ、ホッ、ホッ」

女の含み笑いが哄笑へと高まった。

「き、きさま……！」

男はようやく事の重大さを認識しはじめていた。が、ゆっくりと立ちあがりこちらを向いた謎の来訪者は、男の心身の動きすべてを凍りつかせた。黒髪をたたえたブロンズの顔を、かっと開かれた口が朱色に裂き、銀色の目が狂気の輝きをたたえて男を見据えていた。

小原自身、自らの激しい変貌ぶりに狼狽せぬでもなかった。

しかしその半面、ロキの血が自分に授けたのであろう不思議な力に、酔いしれてもいた。

すでにびっしりと緑色の鱗におおわれた両手で、ものも言えずに立ちすくむ男の首を締めあげると、軽々とその体を持ちあげた。

男の顔が見るまに紫色に変じていく。

ただ本能的な生への執着から、男は海老のように体をのけ反らせ、足をばたつかせていた。

「あがくがいい。そう、思いきり醜くあがくがいいわ」

呟きながら小原は指先に力をこめていった。

「グォエッ」

叫びともつかぬ異様な声とともに、男の体が激しく痙攣し、やがてふっと力が抜けた。

そのとき、玄関のチャイムが軽快な音を響かせた。おそらく弓子の弟が帰ってきたのだろう。剃刀(かみそり)よりも鋭利な爪にこびりつかせたどす黒い血を口元で拭(ぬぐ)いながら、小原のブロンズの顔は、予想以上のタイミングの良さに、ほくそ笑んでいた。

＊

翌日の夕刻。中島の母は、息子の帰宅時間の遅さに、しびれをきらしていた。

――いくら調査に協力するといっても、ここまでつき合う必要もないでしょうに……。

不満げに見あげた時計は、もうとうに八時を回っている。

このところの中島は、フィードのところに入り浸っていた。

そもそも彼の存在を抜きにして、退魔プロジェクトは成り立たないのである。

だが中島の母が、事件の真相を知るよしもない。

ＭＩＴのチャールズ・フィード教授なる人物の出現。特務機関めいた内閣情報調査室の介入。そのいずれもが、自分の息子が何か重大な事件にかかわりを持っているらしいことを暗示している。

けれども、彼女にとって目下最大の関心事が、受験を来春に控えた息子の将来であったとしても、決して責められまい。

「朱実君ならＭＩＴで世界に通用する研究成果をあげられるでしょう。ぜひ私に入学の便宜(べんぎ)をはからせてください」

半ば本気めいたフィード教授の方便がなければ、今ごろ彼女と息子の間に、再び深刻な対立が生じていたかもしれない。
チャイムが鳴った。
「ようやくご帰還だわ」
が、インターホンから聞こえる少し鼻にかかったような声は、十聖高校の補導担当を名のった。
鏡に向かって顔を整えると、母親は玄関のドアを開けた。
そこには艶やかな微笑を浮かべた女が立っていた。
――本当に先生なのかしら。これなら補導された生徒も逆らえそうもないわね。
ハイカラーのワンピースに包まれた豊満な肢体には、およそ教師などという言葉は似合いそうもなかった。
「中島君のことで、ちょっとご相談しておいた方がいいと思いまして」
小原は相手を信用させるための口調を心得ていた。現にやや派手にすぎる小原の風体に当惑気味だった中島の母も、愛想笑いを浮かべてスリッパを揃えている。
「散らかしっぱなしで何ですが、どうぞお上がり下さいな」
背を向けた母親の後ろ姿を見つめる小原の表情が、一瞬引きしまった。
――似ている。中島朱実にそっくりだわ……。
小原は感情の奔流をこらえようと、きっと唇を噛みしめた。

「小原と申します。先ほど補導担当と申し上げたのは偽り(いつわ)で、その点あらかじめ謝らせていただきますわ」

ソファに母親と向かいあった女教師は、意外な言葉を口にした。

「えっ……？」

怪訝(けげん)そうに母親が首をかしげる。

「その様子では、私の名前は聞いてらっしゃらないようね」

小原は目を細めて相手を見た。

二人の間の空気が張りつめる。

「でも、本当によく似てらっしゃる」

呟きながら、小原はすでに化粧の下で、頬が硬質化しはじめるのを感じていた。

「ごらんなさいな」

抑えた声で言うと、小原は両手を母親の前に突き出した。

「これは……」

白い手を、緑色の鱗がじわじわと侵食しつつあった。

「私をこんなふうに変えたのは、あなたの大事な朱実君なのよ」

小原の瞳が銀色に燃えはじめていた。

「どういうことですの？」

わけもわからないままに、母親の声は悲鳴に近かった。が、席を立とうにも彼女の体は金縛(かなしば)りにあったように動かない。
小原がソファの上に置いていたポシェットから、するりと小さな白蛇が抜け出てきた。
鎌首をもたげた赤い眼が、中島の母にぴたりと照準を合わせた。
「いや！　何なのこれは。あなたはいったい……」
はじかれたように立ち上がった彼女の足元に、白蛇が素早く滑り寄る。たちまちそれは彼女の細い足を、巧みに這(は)いのぼっていった。

同じ日の夕刻、黄泉の国から戻った弓子は、はじめて前夜の惨劇(さんげき)を知った。
久し振りに自分を迎え入れてくれたわが家は、血の匂いに満ちていた。
弓子は乾ききらぬ玄関の血だまりに、呆然(ぼうぜん)と立ち尽くしていた。
——どうして、誰がこんなことを……。
力なく床についた両手が、血糊(ちのり)にぬるりと滑った。
母が父がそして弟が、無惨な屍(しかばね)となって横たわっていた。
あまりにも大きすぎる衝撃が感覚を麻痺(まひ)させてしまったのか、不思議に涙は出てこない。不意に弓子の目の前に、あざけるような笑みを浮かべた女の顔が浮かんだ。
「小原！」
とぎすまされた弓子の超常感覚が、微かな母親の残留思念を鮮明な映像としてとらえたのだ。

「あなたなのね、小原！」
悲しみと怒りに目の前が真っ赤に染まっていた。
いつの間にか弓子は、ふらふらと表に歩み出ていた。
「弓ちゃん！　あなたいつ帰ってきたの？」
ちょうど階段を上ってきた隣家の主婦は、弓子の両手にこびりついた血を見て、思わず買物かごをとり落とした。
それさえ目に入らぬかのように、弓子は階段を夢遊病者のような足取りで降りてゆく。
社宅の三階から、けたたましい悲鳴が聞こえてきた。
先程の主婦が、惨劇の現場を見たのだろう。
弓子にはそれらのすべてが、遠い世界のできごとのように思われてならなかった。
——なぜ東京になんか来たのかしら。あのまま札幌にいれば、こんな目に会わずにすんだのに。
三カ月前まで暮らしていた北国の街路樹が、目の前の銀杏(いちょう)並木に重なって映る。
——中島君、あなたにさえ出会わなければ……。
弓子の心を、中島の怜悧(れいり)な横顔がよぎった。いとしさ、怨み、わずらわしさ。収拾のつかない感情の渦(うず)が、体中をかけめぐる。
耐えきれず、弓子は道端にしゃがみこんだ。
中島のことを考えた途端、涙がとめどもなく溢(あふ)れ出してきた。

怪訝そうに覗(のぞ)きこんだ子供が、弓子の服にこびりついた血に気づき、気味悪そうに駆け去ってゆく。
——とにかく中島君に会わなくては。
たった一つ残された縁(よすが)に向かって、弓子はとぼとぼと歩き出していた。

午後九時をまわっていた。
高校生の帰宅時間としては早い方ではない。
ためらいがちにインターホンのボタンを押した中島の前で、待ちかまえていたようにドアが開いた。
「遅くなってごめん。フィード教授が……」
母親の視線に異様に冷たいものを感じ、中島は言葉を切った。
——今日に限って、どうしたっていうんだ。
が、母親はすぐにつくり笑いを浮かべ奥を指さした。
「お客様がお待ちかねよ」
「僕に？」
心の中に弓子の顔が浮かんだ。
だが、玄関口に揃えられたハイヒールが、すぐにその期待を打ち消した。
「誰なの？」

背を向けてソファにかけていた女が、ゆっくりと立ち上がると、おもむろにこちらを振り向いた。

叫ぶなり中島は、靴を脱ぐのももどかしげに、リビングルームに駆け込んだ。

「何だって！」

「小原先生っておっしゃってるわ」

「久しぶりね、中島君」

聞きなれた声である。だが、そのブロンズの鱗に覆われた顔は、彼の知る小原のものではありえなかった。

悪夢の中にいるような非現実感が、中島の全身から気力を奪い去ってゆく。

「何を……しに来たんだ！」

中島はやっとの思いで口を開いた。

「お前を殺すために決まっていようが」

こともなげに言うと、小原は狂ったような笑い声をあげながら、中島に襲いかかった。

悪魔の血を受け、獣と化した小原に、素手で立ちむかえるはずもない。

一瞬、小原が眉を寄せたのは、あまりにも中島がやすやすと組み伏されたせいだろう。

「どうしたの中島。これでは私も殺しがいがないというものよ！」

小原の生臭い息が、中島の顔面に吐きかけられた。

——今の一瞬の隙に僕を殺さなかったことを、後悔させてやる……。

中島は心の中に青い玉を思い描いていた。

二つの玉が心の中に重なり合い火花を散らしたかと思うと、にわかに右手の芯（しん）から燃えるような気が湧（わ）きあがった。

額を熱風にさらされて、小原は顔をのけぞらせた。

いつの間にか中島の右手には、朱の閃光（せんこう）を発するヒノカグツチの剣が握られている。

イエーッ。

気合をこめて振り降ろされた朱の剣が、たがわず小原の腕を裂く。

たまらず飛びのいた小原に、二振りめの剣は空を切り裂いたにとどまった。

まさに猿（ましら）の身の軽さである。

中島の視界が、事の成り行きにたじろぐ母の姿をとらえた。

「母さん隠れていて！」

手負いの小原が次の攻撃に移る前に、何とか母を外に逃がさねばならない。

「ロキを倒したこの剣に、きさまもまた刺し貫かれたいのか」

「やはりお前がロキを……！」

小原は切られた腕をかばいながら歯がみすると、一歩退いた。

「僕に剣を持つ余裕を与えたお前の負けだ。いいかげんに目を覚ますんだ」

朱に輝く剣をかかげた中島の目には、むしろ憐憫（れんびん）の念すらうかがえる。しかしそれは、一瞬の後に彼の右腕を襲った激痛とともに、驚愕（きょうがく）に転じていた。

鮮血を吸った果物ナイフを握りしめた母親が、憑かれたように彼を見つめている。

「母さん、どうして……」

一瞬の隙を見逃すことなく、すでに小原の両腕は中島をはがい締めにとらえていた。

「お前の母はすでに私の思いのまま。母親の手にかかって死ねるのを、せめてもの情けと思うことね」

アピペに憑依された母の手に握られた血塗りの果物ナイフは、中島の胸の間近に迫っていた。

中島のマンションを訪れた弓子は、インターホンのコールボタンを押す前に、異様な気配を感じとっていた。

ためらわずドアのノブに手をかけると、全神経をその手に集中する。

きなくさい煙が立ちのぼったかと思うと、万全のセキュリティを誇っていたはずのロックシステムは一瞬のうちに溶解し、ノブが彼女の足もとに転がった。

桁はずれの自動発火能力である。

弓子は土足のまま中へ踏み込んだ。魔物と化した小原に両腕を絡められた中島の、蒼白な顔が目に入る。

まさにその胸に、銀色のナイフが突き立てられる寸前だった。

「中島君、危い！」

「待て！」

二人は同時に叫んでいた。
弓子の目が一瞬強烈な光を放ったかと思うと、ナイフを握った両腕に、紅蓮の炎が湧きあがった。
自らの意思を失っていた刺客は、一瞬のうちに不動明王のごとく炎を全身にまといつかせ、ゆるやかな舞いを演じるようにうごめきながら、黒い炭と化していった。
すでにベランダから逃れた小原の姿はない。
「母さん……」
炎の中からまろび出た白い蛇が、空にかき消えたことに気づこうはずもない。
中島はただ呆然と炎に包まれた自分の母親の最期を見つめていた。
「弓子……」
ようやく振り向いた中島の目は、宙を彷徨う者のように見えた。
「君は、ぼくの母さんを……」
絞り出すような声が、弓子の心臓をえぐった。
——嘘よ、そんなひどいことってないわ……。
顔を両手で覆ったまま、弓子は外に駆け出していた。
沼のほとりで、小原は大きく息をついた。
暗緑色の水面は、ところどころに朽ちかけた洋館の像の断片をたゆたわせている。

ヒノカグツチの剣の一撃をあびた腕には、メスで裂いたような深い傷が、ぱっくりと口を開けていた。
不思議にもう血はあまり流れ出てこなかった。
もとより小原にとって、イスマのもとに帰るべきいわれは無い。
けれどもこの蘇我の森には、魔性を帯びた彼女の心をなごませる何かがあった。
「ロキ……」
小原はカラマツの幹に体をあずけ、呟いた。
――自分の手を汚した復讐（ふくしゅう）も、結局、ロキを殺した張本人を仕損じてしまったってわけね……。
小原の目に熱いものが溢れ、ブロンズの頬を濡らしてゆく。
夜風がその涙の熱を、心地よく拭い去っていった。
ぼんやりとした小原の視界に、不意に白い少女の像が浮かび出た。
中島の家を飛び出した弓子が、半ば無意識のうちに小原の後を追っていたのは、かろうじて憎しみだけが今の自分を支えられるものだということを、本能的に知っていたせいなのかもしれない。
――君は、ぼくの母さんを……。
弓子の耳もとで、中島の声が幾重にも反響し続けていた。
弓子もまた、涙にぼやけた視界の中に、小原の姿をとらえていた。

弓子はゆっくりと手をあげた。
気を込めれば、一撃でケリはつくだろう。
が、何かが弓子を躊躇させていた。
――小原先生も、魔界との戦いの犠牲者のひとりなんだわ。中島君のお母さんだって、悪魔が心を支配してしまっていたのに違いない。それを私は……。
「クックックッ」
弓子の心を読みとったかのように、小原は口元を歪めて笑い声をあげた。
「下手な同情は身をほろぼすよ。ごらん、この指を。お前の家族の血の匂いが、まだ残っている……」
「やめて！」
叫びながら弓子は、瞼を閉じたまま手を薙いだ。
手の描く弧にあわせるように小原の胸が切り裂け、血しぶきが弓子の顔を染めた。
弓子は思わず駆け寄ると、松の幹に絡みつくように崩れ落ちた小原の体を抱き起こしていた。
小原の顔からは、鱗が跡形もなく消えていた。
血の気のない唇が、何かを告げようと震えている。
しかし、それが何を意味するのか、弓子に読みとることはかなわなかった。
弓子の頬から、涙が小原の顔に伝い落ちる。
そのとき、突然沼の対岸に轟音がとどろきわたったかと思うと、あたりに瘴気が立ちこめ

はじめた。

*

ちょうどその頃、沼の対岸の洋館では、セトを実体化させるべく不眠不休でデータ分析を続けていたイスマの傍で、コンピュータの磁気テープがすさまじい勢いで回転をはじめていた。
コンピュータは端末機からの指令をいっさい拒絶し、膨大なデータが狂ったようにディスプレイの画面を走り抜けていた。
「何ごとだ！」
立ち上がったイスマの足元のコンクリートが、すさまじい音とともに亀裂する。
ケーブルには火柱が立ち、床に描かれた六角形さえもが、生き物のようにうねっている。
ザワザワとした異界の者達の声が、地下倉庫に満ちていた。
「セト」
「セトが生まれるぞ」
「いよいよ生まれるぞ」
古代アラム語、ヘブライ語、ギリシャ語。
どこの国の言葉ともしれぬ声が、無秩序に交錯していた。
――生まれる？　生まれるとはどういう意味だ？
イスマはようやくの思いで、館の外へ転び出た。

そのとき、イスマの超感覚は、沼の対岸にかつて体験したこともないほどに強大な、魔の気配の集積を感じとっていた。

＊

ビシッ。

弓子の腕の中で静かに息をひきとったかに見えた小原の体内から、生肉を裂くような音が聞こえた。

「あうっ」

息を飲んで後ずさった弓子の顔に、生温かい体液が飛ぶ。

両眼に刺すような痛みを感じ、弓子はその場にうずくまった。

「キュッ、キュッ」

ガラスをこすりあわせるような硬質の笑い声が耳元近くに響く。

禍々（まがまが）しいものを感じ、弓子は身構えた。

だが、視力を失った彼女は、足元すらおぼつかなげである。

それはすでに肉塊と化した小原の裂けた腹から這い出て、ゆっくりと宙に浮き上がりはじめていた。

それは巨大なアメーバーのように、ぶよぶよとうごめく生き物であった。

それはぬめぬめと輝きながら、小原の鮮血と体液が地表にしたたりおちるにつれ、淡い緑色

の体表を露わにしていった。
耐えがたい腐臭が漂ってくる。
膝を折った弓子は激しく咳こんでいた。
「キュッ、キュッ」
再び硬質の笑い声が聞こえた。
「エイッ！」
弓子は盲滅法に笑い声のした方角に気を放つ。
が、念波はそれのゼリー状の体を突き抜け、背後のカラマツの大木に火柱をあげるにとどまった。
間髪をおかず、それはゆるゆると弓子の頭上に舞い上がり、突然形を崩したかと思うと、雨のように弓子の全身に降り注いだ。
ほどなく、弓子の体を半透明のゼリーで覆いつくしたそれは、明確な意思を持った二つの赤い光点を満足げに明滅させた。

第四章　呼ぶ者

一週間がすぎていた。

午後十時の井の頭公園。

八月も後半になり、日中の暑さは相変わらずなものの、さすがにこの時間になると、うんとしのぎやすくなる。

「よしてよ、こんなところで」

甘えるような鼻にかかった声が、虫の声と重なり合う。

「バカいえ、こんなところだからいいんじゃないか」

荒い息遣(いきづか)い。

虫の声が突然とぎれたことに、女の方が気づいた。

「ねえ、誰かいるんじゃない？」

「いいじゃないか、のぞかれながら、なんてのも悪くはないだろ」

そのまま二人は、虫の声などおかまいなしの状況へと、突入していった。

「ケルベロス、弓子の気配がどこかで二つの方向に別れたりしていないか、注意するんだ」

耳もとの切迫した声に、驚いて顔をあげた女の喉から、押し殺した悲鳴が漏れた。

「なんだよ、急に」

うるさそうに振り返った男の方も、二の句がつげない。

虎に似た、異様な巨獣をつれた美少年。ＳＦＸのワンシーンを思わせる情景であった。

女がゴクリと唾を飲む。

けれども、最初の驚愕から抜け出た彼女の関心は、異形の巨獣ではなく、少年の美しさに寄せられているようである。自分の胸を弄んでいた手を引っこめるのも忘れて、脅えきっている男と少年とを見比べる彼女の眼差しには、明らかな失望が浮かんでいた。

その後のアベックの仲がどうなったかはさておき、中島は大気を嗅ぐように鼻梁を突き出して慎重に歩むケルベロスの後に従って、ゆっくりと坂道を登りはじめていた。

やがて木立が途切れ、アスファルトの車道に出たところで、ケルベロスは困ったといったように首をかしげてみせる。

「やはり気配はここまでか……」

呟くと中島は、ハンドヘルド・コンピュータのケースを開く。

ほどなく魔獣は、小さな液晶ディスプレイに吸いこまれるように消えた。

翌朝、中島とフィードは、退魔プロジェクト推進室に成川が到着するのを待っていた。

このところ、三人の間には多少の役割の変更が見られた。

中島はプログラマーというよりも、むしろ戦士といった立場におさまっていた。昼はヒノカグッチの剣を使いこなす修行、夜は夜でケルベロスを使った弓子の捜索活動を続けている。

成川は警視庁と協力し、小原と弓子の行方を追いながらも、一方では降魔に使われる可能性のあるコンピュータの絞りこみに余念がない。

鬼っ子ともいうべき推進室のことゆえ、これ以上の人員の増員は見込めない。

フィードはとりまとめ役をこなしながら、退魔プログラムの制作に没頭していた。

「いいのかね中島君、ロスにいるお父さんに、お母さんのことを連絡もしないで」

赤い目をディスプレイに向けたまま、フィードが聞いた。

「連絡すれば父は日本に帰ってくるでしょう。そしてまた、犠牲者が増えるということになりかねません。考えてしかるべきでした。自分や弓子の家族のことを……」

フィードに向けられた中島の眼には、以前見られなかった激しい闘争心が秘められている。

母親の死は中島に、自分の運命が分かちがたく悪魔と結びついており、その悪魔を退けるより外に、決して安息は得られないことを、あらためて思い知らせる結果となった。

溜め息をついたフィードは、いったんプログラムをセーブした。

「完了したのですか、教授？」

「うむ、一応な。君がやっていれば、もっと早くできていたんだろうがな」

それでもほっとしたように、フィードは大きく伸びをした。

「デバッグのお手伝いは、僕にもできると思いますが」

「いや、戦士にそんな作業をさせるのは、時間の無駄というものだ。適役のクラフトがいることを忘れちゃいかん」

マサチューセッツに設置した人工知能の名をあげると、フィードはモデム電話をセットした。プログラムをマサチューセッツに電送し、人工知能に仕上げをさせるつもりなのであろう。フィードがクラフトとの対話をはじめたとき、遅刻を詫(わ)びながら、成川が飛び込んできた。

「現場に残された毛髪から、白鷺家惨殺も小原の犯行であることが判明したそうです。警察も必死です。十聖高校の行方不明事件が解決しないうちに、今度は生徒父兄の殺人事件ですからな。現在千人の捜査官が小原の行方を追っています」

成川が感情を混じえぬ声で告げていた。

「で、手がかりはつかめたのかね」

「はい、目撃者がいることはいるのですが……。いや、事件の日の深夜なんですが、吉祥寺付近と大田区の二カ所に、それぞれ複数の目撃者が現れたため、捜査が混乱しています」

「ぼくは前者が正しいと思います。御覧下さい」

すかさず口を挟(はさ)んだ中島が、傍のディスプレイを指さした。

画面には、東京都下の地図に、数本の赤線が引かれている。

「弓子のあの夜の足どりを、ケルベロスに追わせてみたものです。弓子は自宅からぼくの家を訪ねた後、武蔵野市方向に向かっています……」

中島は感情の奔流をこらえるように、いったん言葉をきった。

「弓子は小原を追っていたのだと思います。そしてその直後に、彼女の身に何かが起こったのです」

「しかし、弓子君というのはかなりの超常能力の持ち主であるのだろう？」

「もちろん、小原など問題ではありません。ですが、あの夜の弓子の精神状態を考えると……」

「うーむ、それにしても大田区にも目撃者が出たというのが解せぬ話だなあ。無論、裏になんらかの組織の意志が働いていたとすれば、偽の情報で事態を混乱させるくらい、わけもないことなんだが。成川君、君達内調が直接捜査を手がけるわけにはいかないのかね？　日本の警察が優秀なのはよく分かっとるつもりだが、何しろ相手が悪い」

「われわれは本来、海外の情報収集が業務なのです。ＣＩＡの百分の一程度の人的パワーでは、国内の情報収集にまで手は出せません」

成川がおざなりに応じる。

「それに私は、組織的犯罪と言い切るのは早計にすぎると思います。少なくとも表面に現れた事象だけをつなげて見る限り、すべて小原個人の怨恨のなせるわざと考えられなくはないのですから……」

モデム電話の着信音が響いた。

「クラフトからだ」

「退魔プログラムの完成ですね」
メインコンピュータに駆けよる二人につられたように、成川もディスプレイをのぞき込む。
「退魔プログラムというのは、どの程度役に立つんです？」
「このプログラムをO・Sの中へ組みこんでおけば、転送されてきたデジタルデビル自体が破壊されてしまうというわけだ。もっとも今のところ、自衛の役にしかたたんがね」
「要するに、このプログラムを内蔵させたコンピュータには、悪魔は出現できないというわけですな」
成川は分かったような分からないような顔付きで、一応は頷いてみせる。

＊

赤坂プラザホテルのＶＩＰルームに、自由党の太田と島崎が向かい合っていた。
重要法案成立の原動力となり、党内での評価を上げたせいか、太田の顔色にはいつになくいつやが見られた。
「的場委員長は、異様な死に方をしたが、気の毒したな」
セトの分身ともいうべきアピペは人間に憑依し、その者を自在に操ることができる。だが、憑依された人間の肉体は、十日もすると毒のために腐敗をはじめる。無論、太田がそんなことを知るよしもない。
「それはそうと幹事長、新ＡＩプロジェクトを廃止させる件の方はどうなりましたでしょう

か」

島崎のかん高い声は、いささか不興げである。

もとより新ＡＩプロジェクトとは、退魔プロジェクトの公式名称であった。

「うむ、藤田の一存で作ったものなら、適当な理屈をつけて廃止させるのは訳もないことなのだが、なにせ米国の大統領補佐官の後押しがあってな。あちらの意向を無視するわけにはいかんのだ。首都圏再開発プロジェクトの方はすべて君のところを通すようにしたんだから、そう欲をかきなさんな」

油断なく島崎を見やりながらも、太田は鷹揚に声をあげて笑った。

「それにしても、どうしてＡＩなんぞにこだわっているんだ。何か君の商売に影響するとでもいうのかね」

「ま、そんなところですな」

島崎がケントに火をつける。

「藤田はできる男だ。やつと対立することは避けたい」

太田は真顔になって言った。

「次期総裁選に向けての布石ですな？」

「勝手にそう思うがいいさ」

「見通しの方はいかがです？」

島崎の目がこずるく光る。

現在、自由党内で太田は有力な総裁候補と言われているが、太田派自体は、衆議院に六十名弱の議席を持つ中間派閥(はばつ)にすぎない。太田が総裁選に勝利するためには、他派閥の支援を受けるか、ライバルを潰(つぶ)すことが必要不可欠である。彼が藤田に強い態度をとれないのも当然であった。

「浜野さえ、総裁選出馬を見合わせてくれれば……」

太田は意志をこめた目で島崎を見た。

「おそらくは、お望みどおりの結果が得られるでしょう。まあ、ご安心なさっていて下さい」

「わしは何も頼んだ覚えはないぞ。だが一体、いつの間にそれほどの力を手にしたんだ」

さすがに太田も声をひそめている。

「いずれご紹介できる機会もあるでしょう」

──どのみち、あなた自身が身をもって体験されることとなのですから……。

島崎は黄色い歯を見せて笑った。

＊

三鷹市宮前平は、蘇我の森に近接する住宅地である。午後十時。

──明直君、今頃勉強でもしてるのかなあ……。

田野内みどりの、ショートカットのほっそりした顔には、少女マンガの主人公のような大きな眼が、くりくりと輝いている。

夏休みも間もなく終わろうかというのに、彼女の肌は白く滑らかなままだった。
今年は水着を着ないまま夏を終えてしまいそうだった。
——十七歳の夏としては、最低の出来だったわね。
ぼんやりと窓の外を見る。
受験を控えているとはいっても、適当な私立の文科系あたりにでも引っかかれば、と気楽に考えている彼女のことだ。プールにいく時間くらい、無いはずはなかった。
それをしなかったのは、東大の理工をめざしているボーイフレンドに、柄にもなく義理立てをしたせいなのである。
「電話でもしてみよっと」
立ち上がったとき、何か聞こえたような気がした。
「えっ？」
みどりは反射的にステレオを見た。
チューナーを入れっぱなしにすることが、よくあるからだ。
だが、電源は切ってあった。
首をかしげたとき、もう一度はっきりと頭の中に声が響いた。
——おいで、私のところへ——
「だれよ！」
みどりは精いっぱい厳しい顔で、部屋の中を見回した。無論、人の気配は無い。

——来るんだ、みどり——
体が自然に声の方を向いてしまっていた。
言い知れぬ至福感が、抗(あらが)いがたい力でみどりをうながす。
「わかったわ」
うっすらと膜のかかったような眼差しで、みどりは頷いていた。
彼女は部屋を出た。階段の下には家族がみどりを待ち構えていた。
皆、一様に生気の無い、夢見るような顔付きをしているのが無気味である。だが、みどりはそれにも頓着(とんちゃく)しない。
「お姉ちゃん、早く」
小学校三年の弟が、待ち切れぬようにドアに手をかけていた。虫の声がよく聞こえる。
「サンダルで行くかい？」
母親がうつろな声で聞いた。
「そうね」
みどりは弟の後に続いて、玄関を出た。
家族のだれもが、自分達がどこに行こうとしているのかを知らない。
しかし、頭の中に響く声は、何も迷うなと告げていた。

＊

汗ばんだ手が由起子の腰を抱きしめていた。

「やあよ、こんな明るい所で」

素っ頓狂な声に鼻白んだように、ボーイフレンドの透が体を離した。

沖縄旅行のときに知りあって、まだ二週間。

一日中体を寄せ合っていてもあきなかった。

——透君となら、永遠にこのまま愛しあっていける気がする……。

由起子はそう思っていた。

彼女は二十歳の大学生。まだ高校生の透は無責任なところもあるが、根アカで由起子をいつも冗談で笑わせてくれた。

何にもまして、ハンサムなところが好きだった。

「電気消すぜ！」

気どった声が言うと、部屋は暗くなった。

透の顔が間近にあった。顔にかかる息が熱い。いきなり唇を重ねてきた。

——好きよ。

心の中で呟いたとき、頭の中に声が響いた。

——来るんだ——

「何か言った？」

「由起子こそ」

怪訝そうに顔を見合わせたとき、もう一度声がした。
――来るんだ――
抗いがたいものがその声にはあった。
二人は同時に立ち上がっていた。

＊

宮前平に生じた人の列は、蘇我の森に向かって途切れることなく続いていた。その数およそ二千名。
宮前派出所の仁村巡査は、午後十時十五分、その先頭集団を目撃した。
――何事だ、これは？
仁村は対応にとまどった。
子供の手を引く母親。手をつないだ恋人同士。
勤め帰りに一杯やった後で列に加わったのか、ネクタイを締めたままのサラリーマンも目立つ。
普通すぎるほど普通な市民の大集団である。
しかし、どこか見る者を総毛立たせるような異様な雰囲気が、その集団にはあった。
「デモ行進てわけでもなさそうだし……」
しばらく隊列の様子をうかがっていた仁村は、やがて列に加わっている人々が、一言も口を

きいていないことに気がついた。
「どう考えてもおかしい。本庁に聞いてみるか」
だが、電話の向こうの返事はつれなかった。
「今の時期なら盆踊りか何かじゃないのか。いちいちくだらんことで本庁を呼び出すんじゃないよ」
頭に来た仁村は、列の後ろのサラリーマンの腕をつかんで、話しかけた。
「ちょっとすいません。みなさんはこんな時間にどちらへいらっしゃるんです？」
だが、男は応えなかった。
警官の問いかけを意図的に無視したわけではないことは、すぐに分かった。
男の目は何かに憑かれたように宙を見つめたまま、狂気さえ帯びている。
仁村は、すぐ前を歩いていた学生風の男に声をかけた。
だが、やはり応えはない。
さながらレミングの群れのごとく、人々は黙々と歩み続けていた。
しばらく迷った後、彼は列の最後尾に加わった。
小一時間も歩いただろうか。
人家がまばらになり、街路灯の間隔が広がりはじめた頃、この異様な行列を深い霧が包みはじめた。
人々の目にこもる情熱は、一層狂的なものに高まりつつあった。

「蘇我の森のあたりか」

仁村は鼻孔に異臭を感じた。

麝香(じゃこう)に似た腐臭といえばいいのだろうか。

仁村はひとり、歩みを止めた。

無意識のうちに警棒を握りしめている。

二メートル先も見定められないほどの濃霧が、あたりを包んでいた。

人々の足音は徐々に遠ざかりつつあった。

次第に恐怖が仁村の心に忍びこんでくる。

再び足音を追ったのは、職務遂行のためというよりも、霧の中に一人とり残されることが怖(こわ)かったからかもしれない。

ともすればカラマツの大木にぶつかりそうになりながら、こけつまろびつ仁村は走った。

霧がわずかずつ薄れはじめている。

それに反比例するように、異臭は強まっていった。

列の最後尾に追いついたところで、ほっと息をもらした仁村は、人々が円陣を築きつつあるのを目にして、とっさに木陰に身をよせた。

円陣の中ほどからは、読経(どきょう)に似た低い呪文(じゅもん)が漏れ聞こえてくる。

その声がひときわ高まるや、人々は一斉にその場にひれ伏した。

仁村の目がはじめて、円陣の中にあるものをとらえた。

仁村は懸命の努力で、かろうじて叫びをこらえることに成功した。
陣の中央には、Tの字の形をした鈍い銀光を発するエジプト十字架に、全裸の少女が結えつけられていた。
——人形？
そう思えるほど少女は美しかった。
だが、時折苦しそうに頬を歪める仕草が、彼女が生身の人間であることを明らかにしていた。
少女の全身を、透明なゼリー状の物質が、ベールのようにうっすらと覆っていた。
そのベールが時折、生き物のようにうごめくのを仁村は見た。
——これは現実のできごとなのか？　もしかしたら映画の撮影か何かじゃないのか？
それが恐怖を隠すための言い訳にすぎないことは、仁村自身にも分かっていた。
全身が凍りついたように動かなかった。
自分の息づかいが、とてつもなく大きな音となって耳を脅かした。
——いったい何が起きようとしているんだ……。
半時ほどもじっとしていただろうか。ゼリーのベールが少女の髪を波打たせたかと思うと、二つの赤い光点が、ちょうど髪飾りのように燐光を発しはじめた。
十字架の上で、少女が激しく首をのけぞらせる。
仁村ははじめて少女が、巨大なアメーバーとしか表現しようのない、得体の知れない生き物の体内にとり込まれているのだということに気付いた。

しかもその異界の生物は、明らかに増殖しつつある。
赤い光点はいよいよ輝きを増し、魔性の眼となってあたりを睥睨（へいげい）している。
ゼリー状の物質は、すでに少女の結えられた十字架の全体を飲み込んで、なお余りある体積に膨れあがっていた。
そのとき仁村は、十字架の後方に白いサリーのような衣をまとった男の姿を認めた。
遠目に見ても、明らかに外国人とわかる彫りの深い顔立ちである。
先ほどから続いている読経のような声は、この男の口元から漏れてくるものであったようだ。
不意に呪文が止（や）んだ。
男が静かに右手を天に掲げる。
と、それを合図とするかのように、円陣の最前列にいた者達が立ち上がり、着衣を脱ぎ棄てて中央の十字架に歩み寄った。
アメーバーがぬるりと脈打ち、苦もなく彼らの裸身を包み込む。
その瞬間、彼らの表情は恍惚（こうこつ）に満ちていた。
円陣が崩れはじめた。
服を脱ぐ手間ももどかしげに、老若男女は先を争って異界の生物の透明なベールの中に身を委ねるのであった。
もうとうに、十字架の少女は肉魂の群れに覆い隠されてしまっている。人が人を踏みにじり、骨の砕ける鈍い音が、仁村の耳にも届いてくるように思われた。

だが、だれ一人として悲鳴をあげるわけでもない。
人々の裸体を雑作もなく飲み込んでゆくアメーバーは、無限に膨張してゆくのではないかとも思われた。
円陣をなしていたすべての人々が、肉体の山に同化しようとしたとき、アメーバーの表皮に閃光(せんこう)が走った。
低い、地の底からわき出たような異様な咆哮(ほうこう)が、これまでようやくの思いで持ちこたえていた仁村の神経の糸を、ぷつりと切った。
腰からガクンと力が抜けて、たまらず四(よ)つん這(ば)いになる。
わけのわからない叫び声をあげながら、仁村は必死に這った。
手が、顔が、雑草に傷つくのもおかまいなしに、とにかく後を振り返るわけにはいかなかった。
突然、額がぐにゃりと何かに突きあたった。
目の前に黒い壁が立ち塞がっていた。

＊

イスマは、小原の腹を割って飛び出してきた異様な物体が、ロキの子に憑依することによって実体化をはかろうとしたセトの、仮の肉体であることを知った。
コンピュータ降魔においては、悪魔召喚(しょうかん)の磁界の設定と、悪魔の実体を形成するデジタルデータの処理という二つの作業を、ほぼ同時に進行させなければならない。

磁界が弱ければ、魔界とアッシャー界の接合面積がそれだけ狭くなり、データのとり込み量に制約が生じる。

逆にいくら磁界が強くても、とり込んだデジタルデータを迅速に処理し切ることができない限り、悪魔は実体を得られない。

膨大なデータ量よりなる高位の悪魔を実体化させるには、大容量のスーパーコンピュータさえ力不足といったケースも、十分あり得るのである。

ところが、相当に高位の悪魔であるセトが、たとえ仮の肉体とはいえ、アッシャー界に実体を持つことができた。

そこにはおそらく、磁界の設定を助ける強力な力が加わっていたに違いない。

その分コンピュータは、データ処理の方に専念できたわけである。

イスマはそれが弓子の存在であることに確信を持った。

おそらくは、弓子の体に含まれる高濃度の生体マグネタイトが、磁界形成に大きな役割をはたしたものと思われた。

また実際のところ、弓子がイザナミから受け継いだ神の体質とは、まさに高濃度の生体マグネタイトを保有する体質に他ならなかったのである。

弓子に較べればほんの微量にすぎないにしろ、普通の人間も生体マグネタイトを保有している。これを大量に集積すれば、魔界とアッシャー界を恒常的に融合させることさえ可能となるかもしれない。

そう考えたイスマは、すでに契約を果たしていたセトの力を借りて人々に念波を送り、肉体の塔を築こうと試みたのであった。

＊

白いサリーの男、他ならぬイスマは、人々の肉体の山を包み込んだ表皮に閃光を走らせるアメーバーを、頼もしげに目を細めて見つめていた。

やがて、轟音とともに天空が裂け、胴周りがゆうに十メートルは越そうかという大蛇が、あたかも黒いカーテンの向こうから這い出てきたかのように、蘇我の森の木々をなぎ倒しながら、虚空に鎌首をうねらせた。

――テュホンよ、よう来た。存分にアッシャー界の空気を味わうがよい。

イスマはセトの放つ閃光に黒い鱗を光らせる大蛇に、親しみを込めた視線を向けた。

――ほれ、あの木の陰に、お前にとってはじめての獲物（えもの）がおるわ。

樹々の向こうに大蛇が姿を消すと同時に、閃光が止んだ。

人々を飲み込んだ巨大な原形質の生物は、見上げるばかりに巨大な、醜悪な肉塊と化し、食用ガエルの腹のように無様（ぶざま）に波打っていた。その頂きに赤く光る魔性の眼が、その肉塊の抱く邪悪な思念を誇示していた。

――テュホンが出現したということは、セトの君臨する魔界が、このアッシャー界と順調に融合しはじめている証（あかし）にほかならない。あとはより多くの生体マグネタイトを集めて、この

融合を確たるものに進めるのみ……。
イスマの目もまた、狂気の輝きを増していた。

黒い壁が動きはじめた。
生臭い空気が仁村を包んだ。
いつの間にか仁村は、黒い壁にすっかりとり囲まれてしまっていた。
――何だ、いったいどうなってるんだ……？
這いつくばったまま、仁村は腰の拳銃に手をやった。
上空にしゅるしゅるという妙な音がする。
顔をあげた仁村は、銃を抜くことも忘れてそのまま絶句した。
黒い鱗を光らせた大蛇が、真紅の口をかっと開いて、長い舌の先を仁村の鼻先に寄せてきた。

＊

赤坂、竹林亭の鶴の間から、芸妓の爪弾く三味の音が静かに漏れ聞こえていた。
向かい合って座した三人の顔ぶれは、太田と浜野という自由党の総裁候補同士、それに官房長官の藤田が加わっている。
終始笑みを浮かべた表情とは裏腹に、場に漂う空気の緊張ぶりは、ほとんど箸のつけられていない料理からも存分に伝えられていた。

ふつっと、三味の音が止んだ。
「ちょっと外してもらおうか」
芸妓に声をかけた太田が、正面から浜野を見据えた。
「この秋は、是非私を男にしてほしい。頼む。それだけだ」
対する浜野の口元が歪み、笑いに皮肉が混じえられた。
「こんなところで宣戦布告とは、芸のない話だな」
浜野は気を紛らすように、冷めた盃（さかずき）を口に運んだ。
「この秋は私にというのが党の方針と心得ていたんだが、太田さんの支持を頂けないとなると、苦しい戦いになりますかな」
「あくまでも、総裁選で決着をつけるという意味かね」
「まあまあ、お二方（ふたかた）とも子供じみた話は抜きにして……」
藤田が割って入る。
「浜野さんも太田さんも、どのみち天下をとられる方には違いない。たしかに、この秋はうちの派の出方によって、どちらが総裁になられてもおかしくはないわけですが……」
藤田は思わせぶりに言葉を切って、眼鏡を外した眉間（みけん）を、ゆっくりと指でもみはじめる。太田と浜野の焦慮（しょうりょ）に満ちた視線が、インテリ然と構える官房長官の額に、鋭く交錯した。
眼鏡をかけ直すと、藤田は二人を見比べた。
「ただ、総理のお考えは、この秋は浜野さんにやっていただき、次に太田さんということで落

ち着いていると伺っておる。ここはひとつ、太田さんに大人になっていただくのが、党の利益に適う（かな）ことになるんでしょうな」

太田の唇がぴくりと震えた。

——島崎め、大きなことを言いおって、とんだ恥をかかせてくれたわ……。

「いや、私とて決して我を通すつもりはなかったんだが、総理からまずは君だと励まされたばかりのところだったものだから……」

言い訳めいた台詞（せりふ）を口にしながら腰を浮かせた浜野の足元を、太田は屈辱に脳髄をたぎらせながらじっと見つめていた。

ふとその視界の隅に、白い影が走った。

「うっ！」

突然、声をあげて屈みこんだ浜野の顔が、見るまに紫色に変わる。

苦痛に歪んだ表情のまま、浜野はその場につっぷした。

「浜野さん！」

駆け寄った藤田の足に、小さな白い蛇がからみつくのを、太田ははっきりと見た。

はっと振り向いた太田は、細く開いた襖（ふすま）の陰から、島崎が不敵に笑いかけているのに気付いて、思わず背筋に悪寒を走らせた。

次の日、東日新聞政治部は、浜野正裕代議士が、次期総裁選不出馬を表明したとのニュース

に、沸き返っていた。

「浜野代議士関係の資料、どこへ置いたっけ」

若手記者の元山が、うずたかく積み上げられたファイルの山をかき分けている。

「これで次の総裁は太田に決まりだな」

髭をそりながら、ベテラン記者の渡辺が呟いた。目の前の電話は鳴りっぱなしのままである。

「やっこさん、機密保護法を成立させてから、つきっぱなしじゃないか」

デスクの井村が声をかける。

「いや、機密保護法成立の手腕を藤田が認めたってことじゃないですか」と渡辺。

「藤田が太田についたから、浜野はおりたってことか」

うるさく鳴り続ける電話を、元山がとり上げていた。彼は怪訝そうな顔でしばらく聞き入っていたが、

「そんな話は社会部に回してくださいよ」

いうと電話を切った。

「なんだね？」

渡辺は関心のなさそうな声で、それでも一応は聞いてみる。

「いや、武蔵野地区で最近、集団蒸発が相次いでいるっていうたれこみです。どうせガセでしょう」

「そういや、経済部の田野内がしばらく無断欠勤してるって聞いたけど、あいつ三鷹市じゃな

かったっけ」

それ以上触れようとせず、二人はそれぞれ担当する政治家のもとへ、自由党の行方についてのインタビューに出かけていった。

第五章　緒戦

午後の日射しが、退魔プロジェクト推進室を焦がしている。

藤田長官に呼び戻され、ここ数日の間プロジェクトを離れていた成川が、憔悴しきった様子で、中島とフィードがしきりに議論を重ねていたテーブルに近付いてきた。

「おお、ようやく戻って来てくれたか、成川君」

それに気づいたフィードが、椅子から立ち上がると、抱きかかえんばかりにして成川を歓待する。

「君の留守の間に、悪魔の降臨地点がほぼ正確に把握できた。もし、君の到着があと一時間遅れていたら、中島君が単身で悪魔の本拠地に乗りこもうとするのを、私はもう止められなかったろう……」

複雑な表情で成川は中島を見た。

「その降臨地点というのをお教え願えますか？」

成川の問いかけに、フィードは黙って傍のディスプレイを指さした。画面の東京都の地図の中央に、赤い光点が点滅を繰り返している。

「三鷹市と武蔵野市にまたがる、半径二キロほどのエリアだ。ほぼ中央にあたる部分は、蘇我の森と呼ばれる樹林になっている」

「なるほど……。ところで教授、中島君も、まずは私の報告を聞いていただきたい」

成川は資料を二人に手渡すと、珍しく性急な口調で語りはじめた。

「この一週間に、分かっているだけでも一万名近い人々が、東京都下から蒸発しているのです。主に三鷹市・武蔵野市・練馬区の住民ですが、昨日あたりから小金井市・杉並区にも行方不明者が目立つようになりました。中島君は調査中に、とくに変わったことに気付かなかったかい？」

「確かに人影は少ないような気もしましたが、何しろケルベロスを連れた調査ですから、深夜に限られておりそのせいだろうと単純に割り切っていたのですが……」

「一万名ねえ……」

フィードも数字の大きさに、中島と顔を見合わせている。

「二千人がまるごと蒸発した地区さえあります」

「よくマスコミが騒ぎませんね？」

と中島。

「騒がぬよう、われわれも警察もあらゆる手をつくしています」

そう言うと成川は、ポケットからモノクロの写真をとり出した。

「教授はご存じのことと思います。アメリカが打ち上げている極東監視用衛星から、問題の地

区を撮影した写真です」
中央に雲がかかったようにぼやけている地区がある。
写真を注視していたフィードがうめいた。
「われわれの調査結果と、ほぼ同じ地域ではないか……」
「二重露光のようですね」
中島が指摘したとおり、問題の地区の中心部には、二つの景色がダブって撮影されていた。
「ここがまさにその、蘇我の森と呼ばれる地点です。この地区にはすでに警視庁の捜査官が幾人か潜入していたようなのですが……」
「そんな奴らの手には負えまいて」
写真を光にかざして見ながら、フィードがうそぶいた。
「おおせのとおり、誰一人帰ってはきませんでした。蘇我の森に近寄るにつれ、無線も、センサーもすべてが用をなさなくなってしまうらしいのです」
「政府はどう対応するつもりかな？」
「それが……」
成川が視線をそらせた。
「どうしたね？」
「昨日の閣議で、警視庁に事態を静観するよう指示するという結論が下されました……」
「何だと！」

見るまに白髪を逆立てたフィードが、成川に詰め寄っていた。

「私が行って藤田長官を説得してやる。いや、こうなったら、総理に会わせたまえ。悪魔に関する真相をこと細かに説明してやらねば、頭の固い政治家には事の重大さが分からんとみえる」

「残念ながら無駄骨です」

成川は、フィードの肩にそっと手を置いた。

「閣議決定はそれだけではありません。新ＡＩプロジェクト、つまりこの退魔プロジェクト推進室も今日限りで廃止されることが決定されました」

フィードはしばらくの間、ぽかんと口を開けていた。成川の言った意味が、よくわからなかったのである。

ほどなく、中島の口元に浮かんだ皮肉な笑みに、わが耳を疑うことに諦めをつけると、今度は英語と日本語をちゃんぽんに、非常な勢いで喋り出した。

「いったい連中は、わしが何のためにわざわざ日本にまでやって来たと思ってるんだ。口はばったいが、この国が悪魔に蹂躙されるのを救ってやろうとしたからなんだぞ。それを満足な機器も研究員もよこさずに、あげくの果てにはこの大事な時に廃止話とは何ごとだ！　中島君、米国に来い。わしの母国ならいかような機器でも思いのままに使わせてやる」

激昂するフィードに静かに微笑みかけると、中島は殺伐とした室内を見回した。

「ありがとうございます、教授。でも僕には弓子を救う義務があります。僕の母のことで、き

っと彼女は必要以上に傷ついてしまった。その彼女を救えるのは、僕以外にはないのですから……」

「結構なことだ。まったく日本人ってやつは、義務感でしか動けんのかね？」

「……愛情も義務感の一種なのかもしれませんね」

自分でも少々気障な言い回しだとでも思ったのか、中島は小声で呟くなり踵を返してドアのノブに手をかけた。

「私もお伴しよう」

成川の声が、中島の背を追った。

「……？」

一瞬、中島が不審げに成川の精悍な顔を振り返る。

「私もまだ、このプロジェクトの一員だからな」

――妙に君にひかれるものを感じてね。

とも言えず、成川は苦笑するほかない。

「やれやれ、せっかちな連中だ」

いつの間にか、フィードは自分のスチールデスクの引き出しから、ハンドガンを取り出している。

「S&Wですか……そんなものの所持がばれただけで、プロジェクトは即刻解散ですよ」

成川があきれたように言った。

「どのみち廃止の決まったプロジェクトに遠慮はいらぬわ。それより、この銃の弾丸にはちょいとした仕掛けがあってね」

マガジンをポケットに詰めこみながら、フィードはいたずらっぽく笑った。

エレベーターが地下駐車場に三人を吐き出した。

が、成川は車に向かおうとした中島とフィードを、ぴたりと手で制する。

とっさに中島も、油断なくあたりを見回していた。

「どうした……？」

そう呟きかけたフィードの体を、成川がいきなり突き飛ばした。

フィードの頭上を空気を切り裂く音がかすめ、後方のコンクリート壁に小さく穴をうがった。

「どうやら内調の特務部隊らしいが、まさか本気で撃ってくるとは……」

成川の顔を、二発目の銃弾がかすめとぶ。

成川は二人を抱きかかえるように、クラウンの陰にとび込んだ。

すでにその手には、ワルサーPPスーパーが握られている。

「私は内調特務二部の成川だ。知ったうえでの攻撃か」

その声めがけて銃弾が連射され、車のフロントガラスを粉砕した。

「長官の命令だ。悪く思うな」

「その声は佐賀だな。おい、少しは私の話を聞け！」

立ち上がりかけた成川を、中島が抱き止めた。
一瞬の後、二人の頭上に数十発の銃弾が集中する。
「フルオートマチックのベレッタ相手では、どうみても分(ぶ)が悪いな。しかも少なくとも五人はいる」
そう言いながらも成川は、ワルサーをしっかりと構えている。
「こんな所で戦うのは時間の無駄です」
「ここはほかに出口がないんだ」
成川の苛立(いらだ)った返事を待つまでもなく、中島はハンドヘルド・コンピュータにコマンドを入力していた。
「ケルベロス、やつらを倒せ。ただ、なるべく殺すんじゃないぞ」
ディスプレイから飛び出た魔獣は、一声咆哮(ほうこう)を発するや、銃弾の来る方角に向かって、地を這(は)うように飛んでいった。
ほどなく悲鳴と血しぶきが、地下駐車場を埋めた。

*

日はすでに半ば暮れかけている。
成川の調達した白のカローラは、青梅街道を西に下っていた。追跡された場合に不安は残るものの、できるだけ目立たぬようにと、成川はその車を選んだ。

「検問はやってないようだな」
沈みがちな成川を引き立たせようと、フィードはなにくれとなく話しかけていた。
「内調の特務部隊が出てきたということは、公式にわれわれを葬る気はないのでしょう。しかし……」
やりきれないといった表情で、成川は前の車を追い越した。
「先ほどわれわれを襲った連中の指揮をとっていたのは、佐賀という私の部下でした。彼が嘘をつく男とも思えません。なにが長官にああまで過激な命令を下させたのか……」
「おそらく悪魔でしょう」
後部座席からの声は中島である。
「悪魔が政府内部にまで入りこんでいるというのか」
思わず成川が声を荒げる。
「中島君のお母さんが、突然小原の味方についた件といい、悪魔が人を操る術を用いたのだと考えれば、すべてに納得のいく説明がつく。大量蒸発事件の放置命令や、われわれに対する暗殺未遂など、藤田長官の急な変心はとても常識では考えられんことだ……」
フィードの声は興奮を伝えていた。
「信じられない」
と、成川が溜め息をつく。
出会ってはじめて、中島は彼の弱音を聞いたように思った。

青梅街道が環状八号線と交差するあたりから、霧が濃くなりはじめた。
走る車の数も、急に少なくなったように見える。
「ここにも魔の気配が漂いはじめています。二日前、調査したときは、何事もなかったのに……」
ウィンドーガラスを半分ほど降ろした中島が、緊張した声でそう告げた。
ハンドルを握る成川が目を走らせたルームミラーの中で、中島は窓からの風に髪を打たせるにまかせて、人気のない歩道を見つめている。
ほどなくカローラは、井の頭通りに入っていた。灯りのないビルが、ゴーストタウンのように連なっている。
「信じられない。たしかに二日前まで、このあたりはまだ何の異常もなかったのに……」
濃霧にはばまれた車は、徐行せざるをえなかった。
「車を降りて歩いた方が、よっぽど早いんじゃないかね」
せっかちなフィードは、今にも車から飛び降りそうである。
「かもしれません。けれども、教授はこのまま車に残られた方がよくはありませんか？」
「わしが君達よりも逃げ足が遅いとでもいいたいのだろうが、恋人を人質にとられたヒーローに、悪魔にまるで無知な脇役のコンビでは、あまりハッピーエンドは期待できそうもないんでな」
車を止めた成川に、フィードはS＆Wのマガジンを取り出して見せている。

「この中の弾丸は、硫化水銀をたっぷり含んでおる。君のハンドガンより、よほど悪魔には効果がある……」

成川は白い歯を見せて、フィードの肩を叩いた。

「成川さん、あなたこそ」

中島も口元をほころばせている。

「身を引くなら今のうちですよ」

「ああ、逃げたくなったら、いつでも逃げるとしよう」

——たしかに、内調が手を引いた今、得体の知れぬ悪魔と戦う義務など、どこにもない。が、それでも……。

心の中に渦巻く不安を抑え込もうとするかのように、成川は中島の運命に否応なしに同化していこうとする自分の運命の不思議に、思いをめぐらせていた。

——前世の因縁としか、いいようがないな。

濃い霧が、車を棄てた三人をすっぽりと包んでいた。ぬめぬめと、水草のようにまとわりつく霧である。

ハンドヘルド・コンピュータから呼び出したケルベロスを中心に、三人は蘇我の森の方向を目指していた。街燈の灯りを唯一の頼りに、小一時間も歩いたろうか。不意に霧がはれて、あたりの風景が目に飛び込んできた。

だが、それは異様な風景だった。

少なくとも彼らの知る、東京の街並みではあり得なかった。

排気ガスに細々と命脈を保っていたはずの銀杏の並木は、枝を縦横無尽に張りめぐらせ、力強い生命力をもて余したそれらの根は、歩道の敷石をもたげてしまっている。

人気のない家々の壁は、熱帯性の蔓草に覆われ、中には強靭な蔓に窓ガラスを砕かれ、屋根を突き破られた住宅もある。

「これは……」

つい先日、弓子の捜索に同じ場所を歩いたはずの中島が、さすがに最初の驚きの声をあげた。

「まるでマヤの遺跡そのままじゃ……。ん、どうした？」

フィードが、急にワルサーを天に向けて構えた成川を、怪訝そうに見やる。

「あれを！」

成川の震える指は、頭上を旋回する白っぽい鳥を指していた。

「何だ。夜鳥じゃないか？」

「顔ですよ、教授」

中島が落ちついた声で、成川を補足する。

ランランと輝く碧い眼で彼らを見降ろしている鳥の顔は、どう見ても人間の女の顔だった。

「ハーピィじゃな。シベリアでは何度か見かけたが、なかなか美しいではないか」

とぼけた口調に毒気を抜かれて、成川はワルサーを降ろした。

「害はないのですか？」

「勿論、隙を見せれば襲ってくるさ。心配するな。こちらにケルベロスがいる限りは安心じゃ」

一羽のハーピィが、魔獣を牽制するように、羽を揺らして高度を下げた。

不意に樹々の合間から、何やら褐色の塊が飛び出したかと思うと、ピシリと音がして、太い腕が怪鳥の羽を薙いだ。

ふいを襲われたハーピィは、たまらず地面に叩き落とされる。褐色の猿に似た魔物が素早く地面に飛び降り、体勢をたて直そうともがく怪鳥の首に、鋭い牙をたてた。

「キィエー」

かん高い叫び声をあげながら、ハーピィは必死に翼をばたつかせている。

だが、所詮は相手の方が一枚上手。あれよあれよという間に、太い腕で一気に首をしめあげられてしまった。

「魔界にも食物連鎖があることが、どうやら証明されたようじゃな」

フィードが乾いた笑い声をあげる。

褐色の魔猿はハーピィの屍を引きずったまま、ひょいと木に登る。

やがて蔓に覆われた家の陰に隠れようかという寸前に、魔猿は好奇心に耐えかねたのか中島達の一行を振り返った。

皺だらけの顔に、一つしかない大きな濁った眼が、きょろきょろと落ち着きなく、三人を見比べている。

やがてケルベロスと目が合うと、一声負け犬のような叫びをあげて、ふっと姿を消した。
「このぶんじゃ、何が襲ってくるか知れたもんじゃない。森に入りましょう。ここでは敵からまる見えになってしまう」
ようやく我に返った成川が、呆(あき)れたように言う。
「いや、ケルベロスがいる限りは、地上戦の方が有利です。森に入って樹上から攻撃されたのではたまりません」
結局、成川も中島のそういう意見に従うことにし、一行は崩れた歩道の敷石に足をとられぬよう用心しながら、再びゆっくりと歩きはじめた。

——囲まれている。
蘇我の森を目の前にして、成川の第六感に強く働きかけるものがあった。
ケルベロスは早くも頭を低くして、戦闘にそなえ身構えている。
樹林の中から数百の目が彼らを見つめていることに中島も気づいていた。
そしてその目は、じわじわと一行に近寄りつつあった。
グボッ、グボッ。
喉(のど)を締めあげられたような声をあげながら、闇を抜けて怪人が姿を現した。
人間の姿でありながら、その体表はびっしりと黒く光る鱗(うろこ)に覆われている。
一行を睨(にら)むつりあがった目は真紅に燃え、同じくらいに赤く裂けた口が、不気味に歪んでい

た。

やがてひとり、もうひとり。

闇の生み出す鬼子のように、怪人は次々と樹林を抜け出てくる。

原始的な恐怖にとりつかれ、成川はワルサーを連射していた。

九ミリ弾が、ぶすぶすと音をたてて腹にのめりこみ、白濁した体液を流す。

だが、怪人達は一向にこたえた様子もなく、両手を前に突き出してにじりよってくる。

ケルベロスが地を蹴った。咆哮とともに、魔獣の牙と爪が、たちまち数十の怪人をのけぞらせる。

「成川さん、下がって！」

叫ぶと同時に中島は、心の中に青の玉を念じた。

火炎の渦が巻き起こり、右手がヒノカグツチの剣を呼ぶ。

その柄を今一度握りしめると、中島は裂帛の気合とともに剣を薙いだ。

間近に迫っていた怪人の胴が、真っ二つに割れる。

倒れた怪人の体表からは、波が引くように鱗が消え去り、白い肌が顕わになる。彼らは死して後、ようやく人に戻りつつあった。

「悪魔め……」

唇をかんで剣を操る中島の眼が、いいようのない寂しさに濡れていた。

フィードはと見ると、十字架を握りしめたまま、S&Wをめったやたらと乱射している。

硫化水銀をしこんだ弾丸は、たまたま当たれば、確実に怪人の息の根を止めているようである。
「教授、戦いはこれからです。ちゃんと弾をとっておいてくださいよ」
倒しても倒しても、怪人達はむしろその数を増しているかのように思える。
おそらくは千人近くに達しているのではないか。
中島は一歩退いてケルベロスを手元に呼び戻すと、うごめく無限の厚い壁のような怪人の群れを睨み返した。
——何とか中央突破をはかるしかないか……。
と、そのとき不意に、怪人達の眼から殺気が消えた。
差し伸べていた両手をだらりと落とすと、一向に背を向け、ぞろぞろと森の奥へと引きあげていく。
その虚ろな眼差しは、むしろ恍惚として見える。
ケルベロスのうなり声に振り向いた中島は、いつの間にかフィードと成川の眼にも異様な光が浮かんでいることに気づいた。
「教授、成川さん！」
中島は見えない糸を断ち切ろうとするかのように、二人の目の前にヒノカグツチの剣を振り降ろした。
ほっと溜め息をついた二人が、顔を見合わせる。

「すんでのところで悪魔のとりこになるところじゃった」
フィードはばつが悪そうに、S&Wを上着のポケットにねじこんだ。
一行は怪人達の後をつけて、魔界と化した蘇我の森を抜けていく。
時折、ハーピィが嘲るように羽音を立てて頭上を舞う。
やがて開けた視界の中に、彼らを待ち受けていたのは、想像を絶する奇怪な光景であった。
「あれは……！」
三人はほぼ同時にうめきとも叫びともつかない声をあげていた。
傍に水面を朱と緑の縞紋様に輝かせた沼を従え、高さ数十メートルはあろうかと思われる巨大な肉質の塔が、そこに屹立していた。
怪人の群れは、次々とその塔によじのぼっていく。
途中で力つきたかのように動きを止めた者は、その場でずぶずぶと原形質の中に飲みこまれ、肉の塔に同化してしまう。
肉柱の表面全体が、半ば崩れかけた怪人達の体で覆い尽くされ、無数の短い触手をうごめかせる原生動物を連想させる。
フィードも成川も我を忘れ、憑かれたようにその悪夢画に見とれている。
が、いち早く正気を取り戻した中島は、肉柱の陰からゆらりと歩み出た銀髪の男を認めていた。

中島はその顔にどことなく見覚えがあるように感じたが、間もなくその理由をフィードの叫びが明らかにした。

「イスマ、やはり貴様が裏で糸を引いておったんじゃな」

――この男がイスマ……。フィード教授の弟なのか。

「中島君、遠慮はいらん。そやつが生きている限り、この世に安息はない」

「わが兄とはいえ、たいへんないわれようだな」

イスマが冷笑する。

黄ばんだサリーが風に舞った。

「ケルベロス、行け！」

イスマに向かって飛んだケルベロスが、突然宙で見えない壁にぶつかったかのように、はじき飛ばされた。

「フォッ、フォッ、フォッ」

笑い声とともにイスマの体がふっと宙に浮かんだかと思うと、その足元に怪しい光が二つ。

漆黒(しっこく)の鱗に身を包んだ大蛇テュホンは、黄金の眼で中島を睨(にら)みつけながら、大地が巨木を生むように、イスマを頭に乗せたまま、ゆるゆると天に伸びはじめた。

肉の塔に並ばんばかりに鎌首をもたげた大蛇は、一気に身を震わせて中島に襲いかかる。

イスマの下半身は、テュホンの体にのめりこんでいた。大地にも空気にも同化することのできるテュホンの、物質融合能力の一つであろうか。

ヒノカグツチの剣も、テュホンの強靭な鱗には歯がたたない。なすすべもなく逃げまどう中島に、イスマの哄笑が追いうちをかける。

「そんなざまでロキを倒せたとは、よほどの幸運に恵まれたのであろう。じたばたせずにおとなしく生贄となれ！」

一方、状況を見定めていたフィードは、成川に何事かを耳打ちすると、自分のハンドガンを手渡した。

「何をしても無駄だ。中島の次にはお主を喰ろうてやる」

大蛇の頭上からイスマが叫ぶ。

横合いから飛びこんだケルベロスは、鞭のようにしなってきたテュホンの尾に、まるでゴムまりさながらに弾き飛ばされた。

「死ね、中島」

まっ赤な口腔を開き迫るテュホンのその口に向かって、成川は両手で構えたS＆Wの引き金を引いた。

大蛇の動きが一瞬静止する。

「おのれ、こしゃくな」

イスマが歯がみした。

そのわずかな隙をついて飛びあがった中島は、すかさず黄金の眼の片方にヒノカグツチの剣を突き立てた。

ギィオー。

悲鳴をあげて、テュホンは身を激しくよじらせた。

剣とともに振り落とされた中島を、ケルベロスが空中で受けとめる。

「イヤーッ」

そのとき中島は、どこか遠くに、弓子の叫ぶ声を聞いたように思った。

戸惑いながら周囲を見回す中島の思念の中に、十字架に結(ゆわ)えられ、身悶えする弓子の映像が浮かぶ。

おそらくはセトが、その仮の肉体である巨大な原形質の核に利用している弓子の有様を、イメージとして中島に送りつけてよこしたのであろう。

その可憐(かれん)な、存分すぎる恐怖を白い肌に刻み込んだ華奢(きゃしゃ)な面(おもて)の一方の目から、血の滴(しずく)がしたたり落ちるのを中島は見た。

「フォッ、フォッ。勇ましい少年よ。弓子がセトにとらえられていることを忘れてはおるまいな」

肉の塔がぬるぬると動いた。

弓子が苦痛に身をよじるさまが、中島の心を裂いた。

「おとなしく喰われればよし。さもなくば、弓子のもう一方の眼もつぶしてくれよう」

――聞いちゃだめ。悪魔達には私の体が必要なの。絶対に私を殺したりはできないはずよ。

弓子のイメージは、そう叫んでいた。

「いかにも、娘にはこの世に魔界を呼ぶのに役立ってもらわねばならん。だが、娘を殺すことはできずとも、死の苦しみを味あわせることは存分にできようぞ」

イスマの嘲笑が容赦なく中島の耳をうがつ。

弓子が必死に苦痛に耐えている有様が、中島に逆らい難い自責の思いを突きつけていた。

弓子の残されたもう片方の眼にも、血の涙が滲んでいる。

「やめてくれ！」

たまらずヒノカグツチの剣を投げ捨てると、中島はその場に膝をついた。

「中島君、目を覚ませ。やつらのいうことを聞いてはいかん。君が屈したら、この国はどうなる。世界はどうなるんだ……」

フィードの喉も裂けんばかりの叫びを耳にしながら、成川はひとりうずくまり、こぶしを地にたたきつけていた。

――いつかもこんなことがあった。

成川は強烈な既視感覚を、自ら処理しかねているのだった。

――俺には力があるはずだ。きっとあの少年を救えるだけの。神でも仏でもいい。俺の力を目覚めさせてくれ。その力が、俺とあの少年のつながりをも、明らかにしてくれるはずだ……。

*

その頃、冥界、黄泉比良坂では、イザナミが気づかわしげに暗い空を見あげていた。

イザナミと現世とのつながりは、基本的には弓子の五感に頼るところが大きい。
弓子が悪魔にとらわれている限り、イザナミには現世の様子を見ることも、弓子に憑依して困難な状況を打破することもかなわなかった。
ただ星の動きだけが、現世と冥界（めいかい）を結ぶ縁（よすが）なのである。
その中島の星が今、見る間に輝きを失いつつあった。隣に並ぶ弓子の星は、目をこらさぬかぎり、見ることもできないほどまで光量が衰えている。
一方、二星を取りまく赤い凶星は、いまわしいほどにいよいよその輝きをましている。
「何があったのか、だが今の私は現世に指一本触れることもできぬ」
苛立たしげに呟いたイザナミは、ふと二つの星の傍にある、微かな煌（きらめ）きに目を止めた。
「あれは……」
——もしや、他の神の転生。
イザナミはひざまずくと、必死の祈りを捧げた。
「いずこの神や知らず。どうか二人のためにお目覚めあれ」
祈りが通じたか、星は徐々に明るさを増しはじめる。
ほどなく、超新星のごとくに、その星は周辺の天空に煌きを誇示するに至っていた。

＊

「天地（アメツチ）の光の魂よ、月の光よ、このツクヨミのもとに集（つど）え」

突然のことに、フィードは度肝を抜かれたように振り向いた。
「成川……？」
まさにその成川が、天に向かって両手を広げていた。
「ついに狂いおったか」
イスマもまた、今しも中島を飲みほそうと口腔を広げた大蛇の動きを止めて、あっけにとられている。
が、次の瞬間、イスマの口元に浮かんでいた嘲るような笑いは、天地の鳴動に歪められた。
――天が落ちてくる。
顔をあげた中島は、そう思った。
煌きを増した星々が、一条の光の束となって、両手を広げた成川の頭上に尾を引きながら落ちてくる。
少なくとも中島の目には、一瞬の光景がそう映った。
「成川さん……！」
いやすでに彼は成川ではなかった。
紛れもない前世のツクヨミ神がそこにいた。
ツクヨミは、間髪を置かず、その右手にしかと捉えた光の束を、大蛇めがけて投げつける。
ギオー。
あたかもレーザーのメスのように、矢となった光がテュホンの体を、縦に真っ二つに裂いて

いた。
もんどりうって落下したイスマに、ツクヨミは容赦のない一撃を見舞う。
中島の目の前で、イスマの銀髪はたちまち炎と化した。
「おのれ、こしゃくな奴め！」
外気を凍らせるような波動が、心を揺さぶった。肉の塔に思念を宿したセトが、自ら戦う意志を固めたものと思われた。
原形質の表皮が激しく波打ち、うねりながらツクヨミに迫る。
ツクヨミの見舞う光の矢が、シュルシュルと音をたてて肉柱に突きささる。が、それはセトに何らのダメージを与える様子もない。
「早く、早く中島君を連れて逃げるんだ。残念ながら今のところこいつに勝てる算段はこれっぽっちもない。私が喰いとめている間に、早く、彼は大切な戦士だ……」
一歩引いたツクヨミが、成川の声でフィードに告げた。
「……わかった。あとは頼む」
うなずくなりフィードは、剣の柄を握りしめる中島の後頭部を、S＆Wの銃床でなぐりつけていた。
「ケルベロス、逃げるんだ」
外見に似合わぬ俊敏さで中島を獣の背に乗せると、フィードも続いて自らケルベロスの背にまたがった。

「許せ、成川」

涙を混じえた叫びに応えるかのように、天空まで連なる光の帯が、セトの肉柱を幾度となく貫く。

だが、やがてそれも次第にまばらになり、蘇我の森は再び不気味な静寂に包まれた。

肉柱は誇らしげにその高度を増し、魔界召喚のスピードをあげる。その原形質の核に、エジプト十字架に結えられた弓子が、血の涙を流していた。

第六章　魔都

「仕方がなかった。彼が身を棄(す)ててあの場をしのいでくれていなければ、二人とも生きて帰ることはかなわなかったろう」

フィードの声が遠くに聞こえる。

柔らかな皮張りのソファに腰かけたまま、ようやく重い瞼(まぶた)をあげた中島は、半ば起き、半ば眠ったままの状態から脱けきれず、ぼんやりと窓の外を眺(なが)めていた。手足の傷はいつの間にか手当てされている。

魔都と化した武蔵野のことなど露知らぬげに、高速道路を走る車の流れが、ヘッドライトで光の河を絶え間なく描き出している。

中島はその光の中に、ツクヨミ神となった成川の笑顔が、一瞬浮かんで消えたような気がした。

「そう言えば、いったいここは？」

中島はようやく思い出したように口を開いた。

「アメリカ大使館じゃ。ここなら安心できる」

フィードの答えに混じって、ノックの音がした。

長身の老紳士が顔を出す。

「お客様の具合はどうかね、教授」

テレビで幾度か目にしたことのある、柔和な細面が中島を見た。駐日アメリカ大使のブラックウッドである。

「もう随分といいようだ。ありがとう」

フィードは中島にはまだ見せたことのない、おだやかな表情で応えていた。

フィードの属する広い世界を垣間見たようで、中島は一抹の寂しさを覚えた。

もはや自分のよって立つ基盤がどこにもないことを、彼自身が一番よく知っていた。

われ知らずうつむいていた中島の様子をとり違えたのか、大使は中島の手を握った。

「大丈夫だよ。フィード教授から十分に話は聞いている。たとえ日本政府からの要請があっても、君を引き渡すようなことはしない」

よどみのない日本語である。

中島は黙って大きな温かい手を握り返した。

「ところで大使、特別機の用意はしてくれたかね」

「F14がお待ちかねだ。明朝八時には、本国に向けて出発してもらおう」

「ありがとう、大使」

「礼には及ばん。それより、君からも大統領によろしく伝えてくれたまえ」

大使の後ろ姿がドアの向こうに消えるのを待ちかねたように、中島が口を開いた。
「アメリカにお帰りですか？　教授」
「うむ、そのことでな……」
フィードは中島に向かい合ってソファに腰をかけると、身を乗り出した。その目が子供のように輝いている。
「私は遂に画期的な退魔の方法を発見した」
「………」
「信じられんのも無理はない。だがこれは確かなことなのだ。私は昔、言ったことがあったな。二つの磁界で同時に悪魔を召喚した場合、力が極端に違えば、悪魔は強い磁界に引きよせられると。では、磁界の強弱は何で決まるのかね？」
「大気の成分、重力、地磁気の方向など。それに人々の心のあり方も大きな影響を与える要素でしょう」
「そのとおり、さすがは私の弟子だ」
いつの間にか、中島は勝手にフィードの弟子にされてしまっている。
「だが、それらは同時に、磁界の成立をさまたげる要因でもある」
中島が首をかしげた。
「私の言う意味が分からんかね。たとえば、もし大気も重力も、地磁気の影響も受けぬようなところに磁界を設けることができたとしたら、どうなると思うね」

「それはもちろん、理論どおりの強力なパワーを持った磁界を設定できるでしょう。けれども実際にそんな場所を人工的に作ろうとしたら、膨大な時間と経費が……」

思い当たることがあったのか、突然中島は言葉を切った。

「そうか。宇宙空間！　人工衛星を使うのですね！」

フィードが満足げに頷いてみせる。

「宇宙に追放された悪魔が、その後はたしてどう行動するかは予測がつかん。だが、衛星の静止軌道上にセトの魔界を引き寄せてしまうことができれば、コンピュータが稼働を続けている限り、二度とやつが地球に手を出す心配はない。その間に迎撃兵器を開発するゆとりは、十分すぎるくらいある。静止衛星の使用を米政府に承認させるために、私は戻らねばならんのだ」

「悪魔を召喚できるほどのコンピュータを搭載している衛星があるのですか？」

「勿論だとも。わが国は東径一三五度の赤道上空に、SDIのコントロール基地にすることを前提とした静止衛星を打ちあげておる。現在の利用状況は、その処理能力のわずか三十パーセント程度そこそこ。まさにセトを宇宙空間に召喚するにはうってつけなのじゃ」

フィードの声には自信が溢れていた。

「君はどうする？　もはや一個人でセトに対抗するのは、無謀以外のなにものでもない。ことの成否が分かるまで、ここにいるのがベストだと思うが……」

中島は幻を追うように、窓の外を見やった。

「成功する確率の高い計画だと思います。でも教授は、一つだけお忘れです」

「何をかね？」

「その計画が実行されれば、アッシャー界（現実世界）との融合を進めているセトの仮の肉体は、猛烈な異次元間の磁気嵐に巻き込まれるはずです。その体内に取り込まれている弓子が助かる見込みは、まずないと考えてよいでしょう」

「…………」

「ぼくはもう一度セトに戦いを挑みます。その前に、イザナミ神に会いに行くつもりです。イザナミなら、なにかいい智恵を授けてくれるかもしれない……」

「……私は人類のために、君は恋人のために、か。まあそれもよかろう」

立ち上がったフィードは、中島に手を伸べた。

＊

次の日の早朝、霞が関の米国大使館から、厳重な護衛を引きつれた二台のキャデラックが、西へ向かった。

一台は横須賀の米軍基地をめざし、一台は東名高速を西へと下って行った。

黒塗りのセダンが後をつけようと試みたようだったが、厳重な護衛に恐れをなしたか、二台がそれぞれの行先へと進路を分かった地点で、ひっそりとUターンしていった。

＊

同日の午後。

永田町の太田事務所を、島崎が訪ねていた。イスマが死んだことをまだ知らない島崎は、至って強気で太田に詰め寄っている。

「困りますな、幹事長。フィード教授が出国したというではありませんか」

「君は彼のプロジェクトが消滅すればそれでよかったんだろう。自ら出ていってくれるなど、むしろ願ったりではないか」

島崎は言葉につまって、冷めたコーヒーを口に運んだ。

「中島も姿を消したとか……」

「私のような立場の者が、一高校生にかまってられると思うかね、君！」

太田は冷笑した。

「われわれの計画に、彼は大きな妨げになりかねませんぞ」

「われわれ？」

小バカにしたような表情で、太田は島崎を見た。

「私は君に何も頼んだ憶(おぼ)えはない。あくまでも世の流れが私を欲しているにすぎぬ。そんなわけのわからない戯言(たわごと)をとなえているよりも、例の武蔵野地区に生じた異変の噂(うわさ)、閣議でも問題になっておる。藤田や浜野を使い、なんとか静めることはできたものの、もし二十三区内にまで現象が広まれば、われわれとしても放置するわけにはいかん。君の大切なセイントに、もう悪魔ごっこは止めにするよう説得するんだな」

「できるだけのことはいたしますが」
島崎は浮かぬ口調で応えた。
彼はイスマなしには、魔界の入口に近寄ることもできぬ、いわば虎の威を借る狐にすぎない。昨夜来、イスマとの連絡が途絶えたことが、不安ではあった。
「自衛隊を使わざるをえんかもしれんな」
「今さら悪魔に敵対するつもりですか！」
「薬も効きすぎれば毒になる。悪魔が消えてなくなったところで、もはや私は痛くもかゆくもない」
「こんな話を悪魔に知られでもしたら……」
島崎はすっかりうろたえてしまっていた。考えてみれば太田はもとより、自分も悪魔が本当はどのくらいの力を持っているのかを、知りもしないのである。
「心配するな。ここでの話が漏れるようなことはない、決してな……」
歯を見せて笑うと、太田は指を鳴らした。
隣室に控えていた長身の男が、さりげなく近づいてくる。
太田が顎をしゃくると、男は島崎の背後にまわりこんだ。
反射的に身を固くした島崎の猪首に、チクリと刺すような痛みが走った。
「何をする！」
島崎はソファからはね起きた。

「いくら太田さんでも、妙なことをなさると容赦しませんぞ」
が、すでに島崎の赤ら顔には脂汗が浮き出、足元がふらつきはじめている。
「楽に死ねるさ。最近、テキサス州で死刑執行に使っている麻酔薬だ。ほんの一眠りするつもりで、死んでゆきたまえ」
「な……に」
懸命に唇を嚙みしめる島崎の体が、グラリと前にかしぐ。
「よし、黒田。あとは任せた。今日の閣議には私も出席を求められておる」
何事もなかったように立ち上がると、太田は床に転がる島崎の死体には目もくれず、ゆっくりとした足どりで部屋を出ていった。

*

首相官邸。
夏ものの背広を隙なく着こなした瘦身の中内首相に、十数名の記者が群がっている。
「総理、緊急閣議の中味は何ですか？」
「秋の総裁選の進捗状況はいかがでしょうか？」
記者達の質問は、途切れることがない。
しかしその誰もが、どこかもどかしげな表情を浮かべていた。
武蔵野地区を中心に広がる大規模な行方不明事件は、今や公然の秘密となっている。

だが、徹底した箝口令がしかれ、記者達は質問をぶつけてみることもかなわなかった。当初は巧妙に一部地区の住民だけを集めていたセトは、アッシャー界における参謀格であったイスマを失ったことにより、無差別な人間収監をはじめていた。

すでに事態は、もはやこれ以上隠しおおせないところまできていた。

「君達が欲しがっている答えを、私もまた欲しいんだ」

ぽつりと一言、思わせぶりな呟きを残して、首相は沈痛な面持ちのまま、閣議室に姿を消した。

「お待ちしておりました、総理」

藤田官房長官が低い声でいう。

宰相に登りつめる原動力ともなった忠臣のやつれた顔を、首相は痛ましげに見やった。

——行方不明事件を静観するよう、強硬に主張したのは彼だ。ここまで事態が大きくなった以上、詰め腹を切らせざるを得まい。

それが首相の気がかりの一つであった。官房長官がアピペに憑依されているなどと、彼が知るはずもない。

「さっそく自治大臣から報告を願います」

「今日午前十時現在の行方不明者数は四万二千五百人。被害地域は東は練馬区、杉並区、西は小金井市まで広がっています。早急に対策を打つ必要があります」

一切の捜索活動の中断を命じられていた高堂自治大臣が、不機嫌な声で言った。
「現状をご覧いただきましょうか」
加藤防衛庁長官は、立ち上がるとテーブルのボタンを押した。
正面のスクリーンに、武蔵野市の街並みが浮かぶ。
「RPV（無人偵察機）が送ってくる映像です」
セトの無差別な人間狩りが開始された頃から、それまであたりを覆い隠していた霧のベールは次第に薄らぎ、現に今、RPVは鮮明な画像を二メートル四方の液晶ディスプレイに送り伝えていた。
吉祥寺駅周辺のビジネス街が、井の頭公園の広大な緑が、閑静な住宅街が画面を横切っていく。
その画面がいやに平面的に見えるのは、そこにほとんど動くものが、映っていないせいだろう。
加藤が手元のローリングスイッチを回すと、画面がズームアップされた。
井の頭通りには、無秩序に車が乗り捨てられ、夏の日射しがボンネットを焦がしている。
人間の存在を忘れた街に、猫達がわがもの顔で集まっていた。
「いったい何が起こったんだ」
だれからともなく呟きがもれる。
やがてRPVは、西に進路をとった。

ディスプレイの映像は、いつの間にか熱帯を思わせる密林に転じていた。
その樹林の緑が途切れたところに、それは唐突に姿を露わにした。
「何だ、あれは？」
閣僚達の口からどよめきがもれる。
加藤がスイッチを操作すると、ズームアップしたカメラが、その異様な姿を画面いっぱいに拡大して見せた。
それはぬめぬめと輝くゼリー質に覆われた、とてつもなく巨大な原生動物のように見えた。
そして、それは明らかに生きていた。
中心部の肉質を包むゼリー状の表皮が、ゆっくりと脈打っていた。
加藤は黙したままRPVを、まるで肉の塔のように屹立（きつりつ）する異界の生物を中心に旋回させた。
「おい、あれは人間じゃないのか」
中内の叫びに応える者はなかった。
それほどまでにその光景は凄惨（せいさん）なものであった。
幾百という人々の列が樹林を抜け、塔に向かって行進を続けている。彼らは塔に近付くや着ていた服を脱ぎ棄て、裸になって、あたかも夢遊病者のように両手を前に差し伸べたまま、原形質の中へと取り込まれていく。透明なゼリーはほんの一瞬のうちに彼らの肉体を融（と）かし、中心部の肉塊に同化させてしまうのであった。
「官房長官、それに浜野外相、事態を静観するよう強引に主張なさったのは、あなた方お二人

でしたな……」
口を開いたのは、非主流派の北村文相である。
が、うるさがたとして知られる文相の声も、今はカサカサに乾いて聞こえた。
「不測の事態です。打つ手があるわけもないでしょう」
皮肉な笑いさえ混じえた藤田の口調に、閣僚達の背筋に悪寒が走る。
とうてい首相の番頭役としての、実直さと優秀さをだれもが認める藤田の言葉とは思えない。
——狂ったか？
内線電話が気詰まりのする静寂を破った。
「閣議中はいかなる電話もシャットアウトしろと言ってあったはずだ」
受話器をあげた秘書官が押し殺した声で言う。
その顔色が変わった。
「首相、米国のリガニー大統領からの緊急コールです」
「何ごとだ」
いぶかしげに中内首相が受話器をとる。
中内は日本の政治家の中では、最も流暢(りゅうちょう)な英語を話す。
「信じられん話だ！」
その彼が思わず日本語で叫んでいた。
「うわっ！」

背後に悲鳴が湧き起こった。
振り返った中内は、大統領との会話中であることも忘れて、一瞬受話器をとり落としそうになった。
藤田と浜野が声をあげずに哄笑していた。
その顔が見る間に紫色に変じていく。
裂けた唇が鮮血とともに耳まで口を開き、虚ろに宙を睨む眼球が、眼窩から飛び出さんばかりに膨れあがっていた。
いいようのない腐臭が、会議室を満たしはじめている。
「ＳＰと救護班を中に入れろ。絶対に報道陣には悟られるな！」
いち早く正気を取り戻した太田が、口を開け放ったまま呆けたように突っ立っていた秘書官に命令を下している。
――まあ仕方あるまい。ここでこの二人が死ねば、後顧の憂いも断つことができる……。
太田の願いは、ほどなくかなえられた。
もはや正視に耐えぬ形相となった二人の首が、ぐらりと傾いたかと思うと、その肉体は腐った果肉が崩れるように、どろどろの肉汁と化していた。
右往左往する閣僚のだれ一人として、原形さえとどめない二人の体から、二匹の小さな白い蛇が湧いて出たことに気付いていない。
心中ひそかに笑いを洩らしていた太田の顔が、次の瞬間、恐怖に歪んだ。

白蛇の赤い目が、じっと太田を見つめていた。

「ヒェッ」

思わずあとずさりした太田の足を、血糊を吸った絨緞(じゅうたん)が捉(とら)える。

どうと転倒した太田の首に、二匹の蛇が素早く這(は)い寄っていた。

観客を失ったスクリーンは、相変わらず肉の巨塔を大写しにしている。

そのカメラアングルが、突然変わった。

画面が大きく揺れたかと思うと、スクリーン一面が緑色に染まり、ほどなくＲＰＶからの情報は途切れた。

＊

同日、午後三時。奈良県明日香村。

焼けつくような日射しを浴びて、木々の緑は目に痛いほどであった。

砂利道を歩くハイカー達の顔は、汗にまみれている。

「ねえ、次は岡寺に行ってみない」

女子大生ふうのおかっぱ頭の娘が、連れの男に甘えた声で言った。

「多武峰のホテルまで、まだ結構あるんだぜ。あんまり遠回りしてると、日が暮れるよ」

男はサングラスを外して、間近に見える山を指さしてみせる。

「いいじゃないの。まだ日は高いんだし。あっ、車よ」

女の声に、男は緩慢な動作で道をあけた。
「ちぇっ、こんな田舎道にキャデラックかよ。乗っけてって欲しいよな」
砂利をはねながら走り去った車をうらめしげに見やり、やがて男は女の後に従った。
ゆっくりと停止した車の後部座席のドアを開けて、中島は飛鳥に降り立った。
石舞台を目にした中島が、運転席の黒人に声をかける。
「このあたりで降ろしていただけますか」
「Good Luck」
黒人は歯を見せると、片手を振りながら車をターンさせた。
しばらく感慨深げに遠い風景に目を細めていた中島は、ふっと大きく息をつくと、白鷺塚に向かって歩き出した。
強い日射しが、中島をともすれば地に足のつかぬような非現実感の中に追いやろうとする。セトの肉柱に捕われている弓子の姿を思い描くことによって、かろうじて彼の意識は一連の不可思議な体験を現実世界のものと得心していた。
――本当にイザナミにまた会えるのか？　もうとうの昔に、黄泉の国との通路は閉ざされてしまっているのではないか。
イザナミの玄室に向かう通路を見つけられず、石室に呆然とたたずむ自分の姿が脳裏をよぎる。

ようやく白鷺塚に足をかけた瞬間においても、中島はまだひと月前の記憶を、幻想とわかち切れずにいた。

かつてケルベロスがのたうった痕跡は、生い繁る雑草がすっかり隠してしまっている。

中島は熊笹に覆われた入口から、ひんやりとした空気の中に踏み込んだ。

石室の奥に冷風を吹きあげる小さな穴を確認したとき、はじめて中島の瞳に生気が甦った。

数時間をかけて、延々と続く竪穴を下る。

羨道の奥に、イザナミの玄室を示す銀のレリーフが輝いている。

けれどもその周囲の壁は、ロキとの闘いの凄まじさを語るに十分な傷跡を残している。

素焼きの壺の破片すらが、あのときのままであった。

中島は玄武岩の寝台の傍に跪いた。

わずかに壊れずに残った壺から香油をすくいあげ、台の上に人の形を描く灰に注ぎかける。

畏怖の念に中島は両手を組み合わせ、瞼を閉じた。

ほどなく、香油の香が清浄な冷気に吹き流されたかと思うと、目の前に紛うことのないイザナミ神が微笑んでいた。

「あなたを、待っていました」

子を迎える母のように優しいその声に、焦りが混じっているのを、中島が聞きのがすはずはなかった。

——やはりイザナミは、現世のありさまを知ってはいなかったのか……。

中島は女神に、弓子との再会とそれに続く悪魔セトとの戦い、フィードが密かに進めている退魔の計画などについて、こと細かに語り伝えた。
「ツクヨミには気の毒なことをしました」
話を聞き終えたイザナミは、ぽつんと言った。
「ツクヨミ……成川さんのことですね。ぼくとあの人の間には、何か深いつながりがあったんでしょうか？」
「ツクヨミは夜の光を操る神、前世においてあなたの最も有力な眷族の一人でした」
束の間、二人の間に沈黙が降りた。
転生を謳歌することもなく悪魔に葬り去られたツクヨミに、中島は慚愧の念を覚えた。
しかし、感傷にひたっている時間はない。
「イザナミ様。フィード教授の試みが成功した場合、弓子はどうなるのでしょう？」
それが中島の最も知りたかったことである。
「そのようなことは、かつて試されたこともないこと。残念ながら私の知恵も及びませぬ」
他にこれといった決め手がない以上、フィードが米政府内の説得に成功すれば、一両日中には静止衛星上に悪魔召喚のプログラムが発動されることになるだろう。
「お願いです。ぼくにセトを倒す力を下さい。そのために命を落とすことになろうと、後悔はしません」
「私には、もうあなたに授けられる力はないのです。ただ……」

イザナミは静かに貫頭衣を脱ぐと、それを中島に差し出した。
「この衣を身につけなさい。天空を駆ける力を得ることができるでしょう」
イザナミの清楚な、白い裸身のまばゆさをのがれ、中島は手にした衣に目をやった。
それは羽のように軽く、人肌のぬくもりを保っていた。
「その衣は、背の君イザナギが私に下すった物。私と現世を結ぶ縁でもあります。衣をとれば、私は二度と現世に現れることはできなくなるでしょう。おそらくは、弓子に憑依することさえ……」
思いもよらぬイザナミの言葉に、中島は一瞬身を固くした。
「でもそれは、イザナギの心。まことあなたの身にこそふさわしいものなのでしょう」
イザナミの声が徐々に途切れがちになる。おそるおそる目をあげると、輝くばかりの白い肌が、闇に溶けこむかのように実体を失いつつあった。
「さあ、もうお行きなさい。くれぐれも弓子を頼みます……」
「イザナミ様！」
思わず差し伸べた手が、すでにホログラフのように半透明になったイザナミの体を抜けて空をつかむ。
その手にはうっすらと灰が残されていた。

＊

夜を迎えた新宿歌舞伎町は、人いきれに満ちていた。

国鉄新宿駅の東口に続く小道では、飲み屋から溢れ出る雑多な音楽が女の嬌声と入り混じり、騒音のうねりをまき起こしていた。

道端では酔いつぶれて嘔吐する女の背中を、若いサラリーマンが撫でさすっている。

いささかうんざり気味ではあるが、かといって放置するわけにもいかないといったふうである。

振り向く者がいるわけでもない。

毎度のことながら呆れはてたといった顔のハイヤーの運転手だけが、二人の様子を眺めている。

若い男の傍に、髪を赤く染めた中年の女が屈みこんだ。

「お兄さん、火かしてくんない」

「えっ？　ああ」

誰であろうと声をかけてくれたのは、気を紛らすには格好の出来事と、ほっとしたように男はライターを差し出した。

「つけてよ」

人のよさそうな男は、図々しい申し出に怒りもせずに百円ライターをひねる。

うまそうに煙をくゆらすと、女は男の顔を覗き込んだ。

「あんた、意外とやさしいのね。こんなの放っといて私とつき合わない？」

た。
まだ、すべてを吐き出しきれずにあえいでいる連れの女に、敵意のこもった一瞥が投げられ
と、唐突に娼婦の指先からぽろりと煙草がこぼれ落ちた。
「聞こえるわ、呼んでる！」
立ち上がった女は、目に恍惚の光を浮かべている。
それにつられたように、若い男も立ち上がる。
「達也、どこ行くのよ」
唇の端からたれた唾を手の甲で拭いながら、若い女がしゃがみこんだまま男を仰ぎ見る。
だが、彼氏はもう連れのことなど忘れたように、赤い髪の娼婦と並んで歩き出していた。
「何よ、人でなし！　もう二度とつき合ってやんない！」
ブラウスの胸をはだけたなりで、女はよろよろと立ち上がった。
やがてその両目も、虚ろに宙をさまよう。
西へ。
人々はただ黙って歩きはじめていた。

＊

防衛庁の庁舎地下に設置された、急ごしらえの首都防衛本部。ビデオスクリーンには、十数キロにわたって延々と続く人の列が映っていた。

ＲＰＶが中継する、副都心の状況である。
「ついに新宿まで来たか！」
閣僚達の声は、底知れぬ恐怖におののいていた。
「方策については、大統領閣下に一任いたします。結果をお知らせ下さい」
リガニー大統領との幾度目かの通話を終えた中内首相は、青ざめた顔で受話器を置いた。
「米国はすでに退魔プロジェクトの最終検討段階に入った。非常時に備え、第七艦隊の主力が日本に向かいつつある。私は、たった今、首都圏に戒厳令を布告する。成田、羽田両空港の閉鎖および、都民の関西・東北地区への避難誘導を直ちに開始してほしい。加藤君、自衛隊の動きは？」
「レンジャー部隊を含む七万の陸上自衛隊員の配備がすでに完了。機動隊と協力して、あの異様な行進の流れを分断する作業にあたっております。現状では市民を巻きぞえにする恐れがあり、重火器の使用は困難なのですが、なんとかチャンスを見出ししだい、攻撃を開始いたします」
加藤防衛庁長官が、つとめて平静に状況を説明する。
「ただ、自衛隊のこれ以上の急な動きは、ソ連を刺激する危険があります。現に極東ソ連軍の偵察回数が、目立って増えてきております」
「外交ルートを通じ、現在のわが国および米国の動きに、他意のないことは伝えてありますが……」

急逝した浜野外務大臣の代役を勤める次官が、力の無い声で補足する。
スクリーン上には、今や一段と巨大化した肉の塔のうごめく様子が、映し出されている。
ひとり太田だけが、憧憬をこめた眼差しを、その異界の生物に投げかけていた。

＊

ＲＰＶの情報は、防衛庁からＡＩＦ（米空軍情報部）の通信衛星を経て、コロラド州ピーターソンにある宇宙コマンド本部にリアルタイムで電送されている。
「大統領も、基本的にはフィード教授の考え方を支持される意向です」
スクリーンの映し出す、日本の首都東京を襲った異様な事態を睨みながら、ワシントンから急遽当地にかけつけたリチャード大統領補佐官が口を開いた。
長方形の会議卓には、ちょうどスクリーンと反対側に大型のディスプレイが置かれている。席についたメンバーは、リチャード補佐官とフィード教授、それに宇宙軍のルイス司令長官とＳＤＩの実質的な担い手である工学博士のベーカーが並ぶ。
ディスプレイには、リガニー大統領の厳しい表情が映っていた。テレビ会議システムが、この宇宙コマンド本部とホワイトハウスとを結びつけているのであった。
「宇宙空間に悪魔を呼び出す際に、低軌道の衛星を使うか、静止軌道上の衛星を使うか、それとも一挙に地球の引力圏外に追放してしまうことを狙うのかの選択を迫られることになります」

ベーカー博士が度の強そうな眼鏡を人差し指でずり上げる。
「悪魔を召喚できる能力を持った衛星は、現在二基しかありません。高度千八百キロを飛ぶ早期警戒衛星ハミングバードと、三万五千八百キロの静止軌道上を飛ぶスタースコーピオンです。ただ、両衛星ともわが国の国防に重要な役割をはたしており、機能に万が一のことがあれば、核戦略に重大な支障を起こしかねません」
淡々とした口調は、ルイス司令長官である。
「もちろん日本の自衛隊が独力で事態を解決してくれれば、それに越したことはありませんがね……」
リチャード補佐官が手元のスイッチに触れると、スクリーンに東京都下の地図が浮かんだ。その中央よりやや左よりの赤い十字に向かって、東京のあらゆる場所から、緑の点線が集中していた。
セトの位置と人の流れを示しているのであろう。
ホワイトハウスにも同じ画像が送られているとみえて、ディスプレイに映ったリガニー大統領が横を向いた。
「自衛隊が直接セトに攻撃をかけるためには、市民の流れをセトに近付けないようにする必要があります。ただ、CIAのコンピュータのシミュレートによりますと、これには三十万人以上の兵力を要するのです。日本政府が直ちに首都圏に確保できる人員はせいぜい十万どまり。どうしても外部からの援助を求める結果となりましょう」

「諸君は、どの衛星を使うのが妥当（だとう）と考えるね？」
　ディスプレイの大統領が、呼びかけた。
　いずれにせよ軍事衛星を犠牲にするハメに陥りそうな成り行きに、ルイス司令長官は天を仰いで嘆息する。
「その結論はたった一つ。静止衛星を利用するしかありません」
　フィードがディスプレイのリガニーに向かって身を乗り出した。
「その理由は？」
「低軌道衛星に生じる異変は、それが仮想敵国を含む各国の上を通過するものである以上、国際間の軋轢（あつれき）を生じる危険が大きすぎます。
　かつ、永久的に悪魔を葬り去る対応策の開発に思いのほか日時が費やされた場合、やがては地球に落ちる運命にある低軌道衛星は、悪魔を地球に再召喚する可能性があります。
　また一方、地球の引力圏外追放は理想的な方法ではありますが、いかんせん準備に時間がかかりすぎます。こうしている間にも、一分間に約五十名の同盟国の市民が、セトの人間マグネタイト採取の餌食（えじき）にされているのです」
「わかった。静止衛星を使用した作戦を実施する旨（むね）、ナカウチ首相に通告しよう。ルイス司令長官、現場の指揮は任せる」
「イエッサー」
　ルイスは一軍人に戻って敬礼した。

＊

東京を南北に縦断するように、環状七号線ぞいに陣取った機動隊は、人の列をなんとか新宿方面に押し返そうと、懸命のバリケードを築いていた。
数十万の人の列を目にしてすくみあがる若い隊員を、指揮官が叱咤激励する場面も、そこここに見られた。
「催涙弾を使ってもかまわん。なにがなんでも人の流れを押しとどめるんだ」
だが、ジュラルミンの楯は空しく人々に押し返されていた。
楯に邪魔されて転倒した人々を、平然と次の集団が踏み越えていく。
意図せぬ流血の惨事に、若い隊員は脅えてしまっていた。
さらには、そうこうするうちに、隊員達自身がセトの呼び声にとらわれたか、持ち場を離れて人々の列に加わってしまう事態すら発生していた。
一方、攻撃命令を今や遅しと待ち構えていた自衛隊のミサイルランチャー隊も、車両を放置したまま市民の列に加わってしまっていた。
主を失った火炎放射器や携帯用地対空ミサイルが、空しく道路わきに転がっている。
戦闘ヘリのヘッドアップディスプレイに悪魔の巨塔をとらえながら、攻撃もならず歯がみしていた航空自衛隊員は、やはりセトの呼び声にひかれたのであろう、ためらいもなく機首を下に向け、蘇我の森の樹林に墜落していった。

近代兵器がセトに通用するかどうかを知るより前に、首都防衛本部の参謀は、それらを操作できる者がいなくなってしまったことを、認めざるをえなかった。

第七章　宇宙へ

熊笹が朝露に濡れている。

白鷺塚を後にした中島の凜（りん）とした表情には、イザナミの力を借りることを最後の頼みに、この塚にやってきたときの不安は、もはや微塵（みじん）も見られなかった。

今一度、塚を振り返った中島は、ひとつ大きく息を吸い、思い切って地を蹴（け）った。

体が羽のように軽く感じられた。

空気が海の底から水面に浮上するように、中島はゆるやかに両手を泳がせながら、天空に舞い昇っていった。

耳元に風が唸（うな）る。

が、それは思いのほか激しいものではなく、むしろ衣のはためく小刻みな震動とともに、心地よくさえ感じられる。

片腕で空気をかくようにして体をひねらせた中島は、水平飛行に入った。

眼下に石舞台が、古寺の屋根が、一面の淡い緑のパノラマ図の中にちりばめられている。

中島は飛鳥の地に別れを告げると、一路東に向かった。

やがて視界に、目を射らんばかりのブルーブラックの輝きに満ちた伊勢湾の海原が広がる。その前方には濃尾平野が、そしてはるか左の彼方には中央アルプスの峰々が、穏やかに空を翔(かけ)る中島の姿を見守っている。

——この自然の中に、幾億の生命が生まれ、また死んでゆくのか……。

いにしえの昔、イザナミとイザナギの二神が激しく争ったことがあった。

そのときイザナミは、日毎に百人の命を奪うと宣言し、これに対してイザナギは、それならば日に二百人の命を誕生させてみせようと応酬(おうしゅう)したという。

神々にとっては、人間という種族の存亡こそ興味の対象であったにしろ、個々の命の生き死になど、おそらくは争いの種にもならなかったのであろう。

——かつてこの豊葦原(とよあしはら)は、神々の住む国だったのかもしれない。けれども現在の日本はあくまでも人の力によって造りあげられ、人が支配している。もはや、そこに神の介在する場所を見出すことは困難だ。それにしても、自分は本当にイザナギ神の転生なのか。少なくともイザナミはぼくにそう告げた。自分は神でなどありたくはない。人として生き、人として死んでいきたい……。

自らを神に伍(ご)してしまうことができるのなら、中島の心はどれほど軽くなったことか。自分の作った一本のプログラムのために、母が、弓子の家族が死んでゆき、さらには数千、数万という人々が死に向かっていることも、神が人という種族に与えた運命の一局面にすぎない事象として割り切れる。

神は、自らの力を過信した人間に、文明の生み出した悪魔との対峙という苛酷な試練を与えてみただけのこと。悪魔が人間世界を破壊し、人に自らの力の無力さを知らしめた後に、今度は悪魔を退けることによって人類を救うのも、もともと気紛れな神の仕業と考えれば、いとも自然な成り行きなのである。

——もし本当にぼくがイザナギの転生なのだとしても、やはりぼくは神にはなれない。あのプログラムも、理由もなくぼくに危害を加えるやつらへの復讐のためだけに組み上げたものだった。そして今またぼくは、イザナミ神から授かった力のすべてを、弓子のために、たったひとりへの愛のためのみに使おうとしている……。

中島は空をひとかきすると、高度をあげて雲の中に泳ぎ入った。

ひんやりとした冷気が頰を撫でる。

悪魔に戦いを挑む行為を、弓子を救い出すことへの執着のなせるわざなのだと自ら納得することにより、中島は人としての自我を確かめようとしていた。

が、皮肉なことに、個のために全体を滅ぼすこともいとわないという所業もまた、神の気紛れの常套的な表れ方である事実に、中島はまだ気付いてはいない。

しかも彼の肉体は、イザナミの衣を身につけた瞬間から、内部からも微妙な変化を遂げていたのであった。

耳を聾する爆音が思索を破る。

胴に星のマークを誇示したF14が、雲を裂いて急降下していった。

いつの間にか中島は、戦場の上空にいた。

真下の視野に、戦慄すべき光景が展開されていた。

醜悪な生肉の塔が、緩慢にゆらめいていた。

とてつもなく巨大な肉塊であった。

その表皮をなす透明な、薄緑色をしたゼリー状の物質が、貪欲になおも肉の塔の裾野を広げていた。

幾筋かの黒い河が、肉の塔に流れ込んでいる。

いや、黒い河と見えたのは、塔に向かう人々の頭髪であった。

幾万、幾十万の人々が服を脱ぎ棄て、全裸となって行進を続けていた。

炸裂音が連続して響きわたる。

第七艦隊から飛来したF14の応援を得た自衛隊が、可能な限り人々を傷つけぬよう、肉の塔の頂点部分に目標を絞った攻撃をしかけていた。

攻撃ヘリがガトリング砲の銃弾の雨を見舞う。

戦車の装甲をも貫くその弾丸も、空しい攻撃を嘲笑うかのように膨張を続ける異界の生物の体内に、何の抵抗もなくとり込まれていく。

すべての攻撃が、その無意味さを立証するために繰り返されているのではないかとも思われるくらいであった。

　中島は心の中に青い玉を念じた。
　たちまち体を渦巻く熱風が包み込み、中島の右腕にはヒノカグツチの剣が握りしめられていた。
　その柄を今一度戴(いただ)くように両手に握りなおすと、中島はためらいもなく一気に空を切って肉の塔の頂きめがけて突っ込んだ。
「グォォ——ッ」
　地を揺るがす悪魔の叫びが、塔に向かって行進を続けていた人々を、夢遊状態から解き放った。
　津波のように襲いかかる飴状(あめじょう)のひだにとり込まれて、数機の攻撃ヘリが逃げまどう人々の頭上に炎の塊(かたまり)となって降り注いだ。
　地獄絵であった。
　目覚めた意識の前に不意に突きつけられた恐怖は、人々の許容能力をはるかに越えていた。
　とにかく逃げるんだ。
　本能が人々を支配し、悪魔に心を支配されていたとき以上の残酷さを彼らに付与していた。
　我先に逃れようとする人々は、盲滅法(めくらめっぽう)に人をなぎ倒し、裸の背を、腹を、踏みにじっていく。
　血と肉汁(にくじゅう)の海が、さらに新たな犠牲者を求めて異臭を放っていた。
——やはり、おまえがやってきたか。

すでに肉の塔の内部に入っていた中島の脳髄を、強烈な思念波が襲った。
頭が割れるような痛みを振り払おうと、中島は剣を振り回した。
セトの体内でヒノカグツチの剣は不思議に軽々と肉を切り裂いた。
——おまえが喜んで切りきざんでいるのは、わしの一部となった人間の体だ。心ゆくまで料理するがよい。
嘲るようなセトの思念波は、多少とも歯応えのある相手の出現を喜んでいるようにさえ感じられた。
——弓子はどこにいる！　弓子を返してくれ！
応えはない。
かわって目の前の空間が突如開けたかと思うと、そこには不気味に音をたてて煮えたぎる血の沼があった。
粘性を帯びた気泡のひとつが弾け、ぬっと人の手が突き出される。
それが合図でもあったかのように、身を低くかがめた裸の人間が、鮮血をしたたらせながら次々と沼を這い出てくる。
——殺すがいい、俺達を殺すがいい。早く俺達を楽にしてくれ……。
全身を沼から引きあげると同時に、血に濡れた髪をひとしきり片手でかきあげる。口々に呪文めいた呟きを発しながらにじり寄る者達の顔は、明らかに近藤の、高井の、いずれもが中島の呼び出した悪魔ロキによって、命を失ったはずの級友達のものであった。

一方、こちらはコロラド州スプリングスの米宇宙防衛軍司令室。
幅五十フィートの巨大スクリーンの全面を占める世界地図も、二千を越えるポイントを表示するには十分な面積を持たない。
宇宙防衛軍は、中国・ソ連のものを含む衛星の軌道を九十九・九パーセントまで正確に把握している。

＊

地図にポイントされた二千余の衛星は、その中から防衛軍が、一応マークの必要ありと判断したもので、おそらく全体数の四十パーセントにも満たないだろう。
目に見える速度で移動するポイントは、低軌道に打ち上げられた写真偵察衛星である。
移動速度が遅くなるほど、一般に衛星の高度は高くなる。
北米・ヨーロッパ・日本附近の赤道上空には、五度間隔でびっしりと静止衛星が並んでいる。
その中にあって、東経一三五度にひときわ大きく光るポイントが、スターースコーピオンである。
スタースコーピオンは早期警戒衛星による敵国のＩＣＢＭ発射情報をキャッチし、独自に弾道を算出したうえで、迎撃衛星および地上に置かれたレーザー砲をコントロールするとともに、海洋に散らばる原子力潜水艦に、報復核兵器の使用を指示するのが役目である。
まさに宇宙防衛のコントロールタワーといえる。
だが、ＳＤＩ自体がまだ十分に機能していない現在、その能力の七十パーセントは宇宙空間

に死蔵されていた。

「悪魔召喚プログラムがコンピュータを占有するのは、一時的なことです。悪魔が衛星を破壊してしまわないかぎり、再使用の可能性は十分にあります」

ベーカー博士の説明に、

「気休めは結構だ。それよりも、計画が上院に洩れないよう用心することの方が、よほど大切だ。悪魔の実在を全上院議員に納得させるなんぞ、ニカラグア侵攻を百回承認させるより困難だ。そのうえ呼び出した悪魔が衛星を破壊でもしたら、口を揃えて二十五億ドルの無駄使いだと大騒ぎしだすに決まっている」

ルイス長官はむしろ政治的配慮の方が得意分野の様子である。

「二十五億ドルが何だっていうんです。今はたしかに日本一国の問題にすぎないが、このまま魔界の膨張が続けば、被害がアジア、ユーラシア、そして、いずれは北米大陸にまで拡大することは目に見えているというのに。この計画は、いわばそのための最後の賭けといってもいい……」

フィードは苛立ちを隠さない。

「60秒前、50、40……」

プログラム伝送のカウントが開始された。

「20、10、9、8、7」

「中断！　ソ連衛星が妨害電波を発信してきました！」

コンソールの円形ディスプレイを見つめていた将官が、叫び声をあげた。
フィードの顔色が変わる。
「心配御無用、毎度おなじみのコースだ」
ルイス長官はさして動揺した様子もなく、仕方がないといったぐあいに、肩をすくめてみせる。
「妨害を受けた受信ビームのナンバーを知らせろ」
別の将官の事務的な声が処理を促す。
「No.2から40および50から80です」
「該当ビームの機能を直ちに停止せよ。No.41から49のビームのみを使用する」
「イエッサー」
再びプログラム伝送のカウントが始まった。
「……3、2、1、伝送開始!」
ホストコンピュータが唸りをあげる。
伝送状況をチェックするメッセージが、次々とコンソールのディスプレイをスクロールしていく。
「プログラム伝送を完了しました。いつでもスタンバイOKです」
司令室にどよめきがもれる。
「よし、スタースコーピオンの通信中継機能を中断せよ。代替衛星は、東経一四五度のマーク

Vだ。フィード教授、いつでもプログラムをスタートしてくれ」
ルイス司令長官は、自ら発令の権限をフィードに委譲した。
フィードは十字架を握りしめながら、視線を傍らの小型ディスプレイに走らせた。
日本からは自衛隊のRPVがとらえた凄惨な画像が送り続けられている。
すでに小山ほどにも膨れ上がったセトの肉の塔は、全容の映像を見るかぎり、生き物としての動きは定かには認められない。
――ナカジマ・アケミ……。君とはあれっきりになってしまった。残念ながらもう一刻の猶予もない。わしにできることは、ユミコの身に奇跡の加護を祈るばかりなのだ……。
拳を握りしめたフィードに、今まさにその中島が、肉の塔にとび込んでセトと戦っていることなど、分かろうはずもない。
「よし、プログラムスタート！」
フィードの叫びが、腹わたから絞り出された。
この瞬間、赤道上空三万五千八百キロに浮かぶスタースコーピオン上に、悪魔召喚のプログラムが稼働をはじめた。

＊

何の前ぶれもなく、異変が空間を襲った。
セトが送ってよこす思念波との戦いに、極度の疲労を強いられていた中島の精神を強烈な低

周波がばらばらに破壊した。

血の沼から抜け出てきたばかりの死霊の群れが、片手でこめかみを押え、もう一方の手を天空に救いを求めるかのように差し伸べながら、空間の歪みに押しつぶされていく。

すべてが磁界の嵐に飲み込まれつつあった。

——間に合わなかったか……。

新たな波動が五感を揺さぶった。

剣にまとわりつく細胞片が、飛沫となり渦となって、軽々と中島の肉体を翻弄する。

——弓子……！

彼はすでに身を棄てていた。

このままセトが首尾よく宇宙に追いやられるのだとしても、その体内から弓子を救い出すことが出来なかった以上、自分もまた運命をともにすべきなのだとの意識が、いつともなく心を支配していた。

棄てた身は、心に軽かった。

——イザナミ。どうやらあなたのくれた力を、極限まで試してみることになりそうです……。

ヒノカグツチの剣の刃を抱きしめるように、中島は両腕を胸に組んで、黙禱に入った。

＊

かつて体験したことのない凄まじい力に、肉の巨塔が抗っていた。

ぬらぬらと空をのたうっていた塔の頂きが、突然硬直したかと思うと、雷鳴ともつかぬ凄まじい咆哮が空を切り裂いた。

ズッ、ズッ、ズッ。

大気を震わせ、直径数キロにもおよぶ巨塔の根幹が、地表から浮きあがりつつあった。

樹林を丸のみにするクレバスを大地にうがち、家々を、アスファルトの道路をまといつかせたまま、肉の巨塔は竜巻のごとき磁場の渦に吸い上げられ、ゆったりと浮上しはじめていた。

いや、たしにそれは竜巻であった。

天の一角にその渦の中心が口を開けていた。

真夏の空をカンバスに、筆いっぱいに含んだ墨をはじきかけたかのようなブラックホール。

原形質の塔の表皮が、強靭な吸引力に波打っている。

閃光が、呆然と天を仰ぐ自衛隊員達の目を射た。やがて眩んだ目が再び視力をとり戻したとき、すでにそこには何の変哲もない青空が広がっていた。

＊

果てしない虚空が、星々の煌きとともに、中島を取り巻いていた。

足元には、よどみなく回転を続ける、青く輝く球体が彼を見上げている。

中島は自分が宇宙空間に漂っていることを知るのに、しばし手間取った。

組んでいた腕をほどく。

その手には、宇宙の漆黒に一条の光の筋を放つ、ヒノカグッチの剣が握られている。
幾万もの星が、刃の輝きに呼応するかのように、ゆらめくような瞬きを繰り返していた。
不意に邪悪な思念波が、背後から中島を捉えた。
イザナミより授かった衣は、彼に宇宙空間を自在に泳ぐ能力をも与えてくれているようであった。
剣をないでゆっくりと体の向きをかえた中島は、いきなりかっと開かれた真っ赤な口に視野を奪われた。
それはとてつもなく巨大な蛇であった。
地球上に仮の肉体を持った悪魔を、強引に宇宙に誘い出した強力な磁界が、その当然の結果として、今やセトに完璧な実体を与えていた。
六十フィートにもおよぶ太陽電池を、翼のように広げるスタースコーピオン。
大蛇となったセトは、機能美を誇る静止衛星を核に、うす緑の鱗をきらめかせながら、幾重にもとぐろを巻いていた。
——どうやら、小ざかしい人間の知恵が、わしをこのような虚空に呼びよせたようだな。
声が中島の心に響いた。
——だが、これでわしを放逐できたと考える人間どもは、自らのあさはかさをとくと思い知ることだろうて。わしにとって、この衛星ごと地上に天下るなど、造作もないこと。それだけではない。見るがいい、この空間に引き寄せられてきた悪魔の群れを。

中島の傍を、淡い光を帯びた綿帽子のような浮遊物が、いくつか、心もとなげに漂って行った。

——ほどなくこやつらは、それぞれの実体を得て、地球に安住の場所を求めはじめる。愚かしい人間どもが地球を支配できる時代は、遠からず終わりを告げるのだ。中島よ、お前ははからずも、人の世にあって滅亡の笛を吹きならすという、黙示録の騎士となったのだ。お前に残された道は、人であることを棄て、わしの配下となる以外にない。殺すには惜しい者よ。とくと考えるがよかろう……。

黙したまま中島は、怒りのすべてを真正面に構えた剣に集中させた。

悪魔に実体を与えた宇宙空間の環境に、神の力もまたあらゆる制約を解かれたのであろう。長大な光の束となったヒノカグツチの剣が、朱の光を放つ鞭のごとく弧を描きながら、大蛇の胴に振り下ろされる。

——命を惜しまぬ奴め。

セトが大きく身をうねらせた。襲いかかる大蛇の牙をするりと縫うように泳ぎ逃れた中島の全身を、氷のような瘴気が包む。

衛星にとぐろを巻いた大蛇の胴に、ヒノカグツチの剣は、すでに幾度となく青白い火花を走らせていた。

が、強靭な鱗は、さしてダメージを受けた様子もない。それればかりか、いつの間にか中島の周囲には、新たに実体をものにしはじめている悪魔の醜怪な顔が、無気味な触手が、亡霊のよ

うに空を彷徨（さまよ）っている。

キュッ、キュッ。

悪魔達のざわめく声が、押し寄せるように音量を増してくる。

——早く何とかしないと、次から次へと実体化してくる悪魔が相手では、到底勝ち目があるはずもない……。

いったん実体化を遂（と）げた悪魔といえども、強固な磁界なしに、アッシャー界に留（とど）まることはむつかしい。地球侵略を狙うセトにとって、スタースコーピオンが破壊されてしまうことが、最も痛手となるはずであった。

衛星を離れることのできぬセトに対し、自在に宙を舞う中島は、一見優位に戦いをすすめているかに見える。だが、果てしのない戦いが続くにつれ、潜在的なパワーの差が歴然としてきた。

疲労した腕に剣は重く、その輝きさえ、次第に衰えはじめているように見える。

けれども戦いの手を休めるわけにはいかない。

セトの魔界に巣くっていた小悪魔どもが、次々とアッシャー界に現れ出ようと、うごめき続けているのである。

——中島君、ここよ！　ここを狙うのよ！

不意に中島の心に、聞き違えようのない懐かしい声が響いた。

——弓子！　本当に弓子なのか！

空を薙いだヒノカグツチの剣が、ひときわ新星のように輝きを取り戻した。

――私の声を目がけて、剣を突き刺すのよ。

いちはやく中島は、鱗に覆われた大蛇の胴の一部に、淡く白い燐光を認めていた。

――そう。私は悪魔の体の中にいます。内と外から同時に攻撃をかければ、何とかセトを倒せるかもしれない……。

ためらわず中島は、燐光を頼りに剣を振り下ろす。

ガシッ。

次の瞬間、中島の体ははるか遠くにまではね飛ばされていた。大蛇の尾が激しく剣を払ったのである。

ようやく体勢を立て直した中島の眼前に、今やとぐろを解いて、泳ぐように虚空をうねる大蛇の姿があった。

――愚か者め。わざわざ生きていたことを知らせてよこすとは。もうこのようないまいましい機械をあてにする必要はなくなったわけだ。

セトの太い尾が、スタースコーピオンの翼をへし曲げる。

人知を結集した静止衛星は、束の間こわれた玩具（がんぐ）さながらの姿を宇宙にさらし、やがて閃光とともに焼けただれた鉄屑（てつくず）と化した。

衛星と同様に、弓子の強力な生体マグネタイトもまた、悪魔を呼ぶための強力な磁界を形成している。

その弓子を体内に生きたままとりこんでしまったセトは、結果として、実体を保つための空間的制約から解き放たれていたわけである。
瘴気を吐く鎌首が、中島の衣をわずかにかすめて虚空に消える。
と、次の瞬間には鱗をきしませる太い尾が、剣と交わり火花を散らす。
自由な動きを得たセトに、中島は逃げるのが精いっぱいという有様であった。
ところがふと、セトの動きが鈍った。
見ると大蛇の胴の一部に、小悪魔達が群がって爪をたてているのである。
衛星の破壊により人工の磁界を失った魔物達が、先を争ってこの世に現れ出ようとして、弓子の宿るセトの体に懸命によりすがっているのである。
動きの鈍ったセトの牙を逃れた中島は、素早く宙を泳ぐ大蛇の胴の真下に回り込んだ。
――今よ、中島君！
中島は、胴に群がる小悪魔もろともに剣を突き立てた。その瞬間に、弓子の叫びを聞いた。
ビシッ。
束の間、あたかも時の流れが止まりでもしかたのように、大蛇の動きが停止した。
銃弾に貫かれた硬質ガラスのごとく、胴に突き立てられた剣の先を中心に、巨大な蛇の全身を覆う鱗に、亀裂の網が広がりつつあった。
一瞬の静寂を置いて、セトの体は微塵(みじん)に砕けて宇宙に散った。
剣の放つ光を反射して、さながら雪の結晶のように虚空を舞う鱗の破片の彼方に、エジプト

十字架に結えられた姿のままの弓子が遠ざかっていく。

——弓子！

もどかしげに空を泳ぐ中島の視界の中で、その姿がどんどん遠ざかっていく。

何とかこの世に留まろうともがく小悪魔の群れが、最後のよりどころである弓子の体に、十字架に、爪をたててすがりつく。

だが、残されていたわずかな力を、セトを倒したその一瞬に使い切っていた弓子に、それを支えきれるだけの力があるはずもない。

そのまま弓子は悪魔達と共に、魔界に引きずり込まれようとしていた。

——いいのよ、中島君。私はこれでいいの……。

懸命に追いすがる中島の心に、弓子の叫びがか細く届く。

——何を弱気なことを言っている。すぐに助けに行くから、少しの間、頑張るんだ。

——違うの。お願いだから、私のことはあきらめて。私がこの悪魔達と一緒に魔界に堕ちさえすれば、もう二度と悪魔が地上に現れることもなくなるのよ……。

——待て！　待つんだ！

セトとの戦いに倍する執念で、中島は二人の距離を詰めつつあった。

手が届かんばかりの距離まで近づいた中島は、弓子にとり憑く悪魔達に向けて、無我夢中でヒノカグツチの剣を振るった。

その切っ先が十字架に触れる。一瞬、青白い火花が散った。

そのとき中島は、悪魔達が口々に喜びの声を発するのを聞いたように思った。

――いけない、中島君。今、この十字架は、魔界と現世を閉ざす扉の役目を果たしているのよ。もし、私を十字架から離したら、その扉が……。

弓子の叫びは、十字架に手をかけた中島の胸に直接響いていた。

「五十億の人間より、ぼくは君一人を選ぶ！」

声にならぬ叫びを発すると、中島は弓子の体を抱きしめ、ヒノカグツチの剣で、十字架を真っ二つに断ち割った。

虚空が燃えた、と中島は思った。

閃光が宇宙空間を駆け抜けていった。

＊

抱き合ったまま、二人は虚空を舞っていた。

中島の胸を、途切れることのない熱い滴(しずく)が濡らしてゆく。

セトにつぶされた両目の瞼(まぶた)を固く閉じたまま、弓子は中島の顔の輪郭を思い出そうとでもするかのように、しきりに細い指で中島の頬を撫でていた。

弓子の唇がかすかに震えた。

声は聞こえずとも、中島にはその唇が語るべき言葉がわかっていた。

――あなたは、本当に、あなたは……。

その先は、もう一方の暖かな唇が、続けることを許さなかった。
二人の傍を、いくつかの赤い流星が、抜きつ抜かれつ宙をよぎる。
あるものは喜びの声を発しながら、またあるものは哄笑を発しながら。
束の間、開かれた扉を抜けて、首尾よく現世に実体を得た悪魔の群れである。
だが、やがてその扉も、とり残された悪魔達の呪詛（じゅそ）の声を遠く響かせたまま、静かに閉ざされる。
イザナミの衣に包まれた二人の体は、もうすでに青い星の間近にあった。

解説

服部康夫

本篇は、先に同じくアニメージュ文庫から出された『女神転生』の続篇にあたる。前篇で主人公の中島朱実の手によって、コンピュータのオンラインシステムを利用するという奇想天外な方法により、現世に実体化する際の場所的制約を解かれた悪魔達が、これ幸いと本篇を通じて縦横無尽に暴れまくる。

荒唐無稽（こうとうむけい）な話といってしまえばそれまでなのだが、この作者独特の淡々とした筆致にかかると、物語が急に現実味を帯びてくる。

おそらくそれは、西谷史が自らの生み出す登場人物達に感情移入することを嫌う、稀（まれ）な作家であることに起因している。

これまでヒロイックファンタジーの範疇（はんちゅう）に属する作品群の多くは、超常的な能力を持った主人公が、現実的な舞台設定のもとに活躍するケースと、逆にごく普通の主人公が、超常的な環

境に放り込まれるケースといった、２パターンをとってきた。

そして後者のパターンにおいても、物語が進むに従って主人公は物理的にも精神的にも成長を遂げ、最終的にはスーパーヒーローになってしまっているケースが多かったように思う。

ところが西谷史の描く主人公は、技術面での向上は見せるにしろ、精神的にはさしたる変化を見せない。

前篇で自分のエゴから悪魔を召喚し、無関係な人々をも巻きぞえにした中島朱実が、本篇では一転、正義の味方となって人類のために悪魔と対峙するのかと思いきや、何のことはない。恋人を救うために多数の悪魔を地球に呼び寄せた上、「五十億の人間より、ぼくは君一人を選ぶ」などと開き直ってしまうのである。

主人公ばかりではない。ほとんどすべての登場人物が、自分勝手な奴は自分勝手なままに生き死にし、悪い奴は改悛の念を抱くこともなく死んでいく。

何とも痛快なまでの、冷徹な目ではないか。

ところで、この西谷史という大型新人は、こうして人間に対する無機的ともいえる冷めた視点はもとより、そのデビューの仕方からしてが、新人類作家と呼ばれるにふさわしいものだった。

パソコンを使った通信の代表的な手法に、ＢＢＳというのがある。端末機としてのパソコンから、センターのホストコンピュータ内に用意された記憶領域にメッセージを書き込んだり、もしくはそれを好きな時に読み取ったりすることができる、いわば電子の伝言板である。

彼はそこに、ＳＦのショートショート作品を送り込んだ。まさに「電子小説」とでも呼ぶべきなのだろう。

これが評判を呼んで、ＢＢＳの参加者から活字化を望む声が湧きあがった。やがてこうした要望に応えるべく、数誌のパソコン関連誌が西谷史のショートショートを連載するようになり、ファン層も急速に拡大していった。

少数の、コンピュータを友とするマニアックなファンの熱意が、西谷史の作品群をパソコンのディスプレイから引きずり出したわけである。

考えてみれば、この過程は、中島朱実がコンピュータから悪魔を呼び出したプロセスによく似ている。いったん自由を得た悪魔がこれからどんな大暴れをするのか、これればかりは作者自身にも予測がつかないのではないか。

とまれ、オンラインから静止衛星にいたるまでを自在に操る豊かな発想が、正確な技術的裏付けのもとに展開されることは、心強い限りである。

中島朱実と白鷺弓子の行く末も、このますんなりとハッピーエンドとはいきそうにない。続篇を早く、と、早くも悪魔に魅入られてしまったようだ。

（はっとりやすお　コンピュータ・システムコンサルタント兼評論家）

「デジタル・デビル・ストーリー」アニメ化記念プレゼント

著者サイン入り

テレホンカードを50人に!!

「デジタル・デビル・ストーリー」シリーズの第1作「女神転生」がアニメ化されることが決定しました。完成は'87年3月の予定です。これを記念して、著者のサイン入りテレホンカード(西谷史・北爪宏幸、それぞれ25枚)を抽選でプレゼントします。また当選・落選にかかわらず、応募者全員にアニメ版のくわしい資料をお送りします。

希望の方は、官製ハガキに自分の住所・氏名・年齢・性別・電話番号・学年または職業・ふたりのうちどちらのカードがほしいか、アニメ化に関する要望を明記の上、左記へお送りください。

〒105東京都港区新橋4―10―1徳間書店AM文庫「デジタル・デビル・ストーリー」プレゼント係まで。締切りは'86年11月末日。発表は発送をもってかえさせていただきます。

アニメージュ文庫

デジタル・デビル・ストーリー2

魔都の戦士(まとのせんし)

N-018

1986年10月31日 初版

著者 西谷史(にしたにあや)
発行者 尾形英夫(おがたひでお)
東京都港区新橋四—一〇—一〒一〇五
発行所 株式会社徳間書店
電話〇三(四三三)六二三一(大代)
振替 東京四—四四三九二番
印刷
製本 大日本印刷株式会社
〈編集担当 高橋望〉

ISBN4-19-669558-2C0174(乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

★この本を読んでの感想を右記までおよせ下さい。また、著者へのお便りもお待ちしています。

AM文庫既刊

〈ノベル〉

- 宇宙戦艦ヤマト完結編（前編）　文／岬　兄悟　絵／金田伊功
- 宇宙戦艦ヤマト完結編（後編）　文／岬　兄悟　絵／金田伊功
- 戦国魔神ゴーショーグン　文／首藤剛志　絵／なにわあい
- その後の戦国魔神ゴーショーグン　文／首藤剛志　絵／なにわあい
- またまた戦国魔神ゴーショーグン　狂気の檻　文／首藤剛志　絵／天野喜孝
- 4度（たび）戦国魔神ゴーショーグン　覚醒する密林　作／首藤剛志　絵／天野喜孝
- 戦国魔神ゴーショーグン　時の異邦人（エトランゼ）　作／首藤剛志　絵／天野喜孝
- 戦国魔神ゴーショーグン　はるか海原の源へ　作／首藤剛志　絵／天野喜孝
- 永遠のフィレーナ1　作／首藤剛志　絵／高田明美
- 永遠のフィレーナ2光への脱出　作／首藤剛志　絵／高田明美
- 魔法のプリンセスミンキーモモ　夢の中の輪舞（ロンド）　文／首藤剛志　絵／わたなべひろし
- 早瀬未沙　白い追憶　構成／河森正治　文／大野木寛　絵／美樹本晴彦
- オーディーン光子帆船スターライト　文／小熊耕二　絵／松岡　伸
- デジタル・デビル・ストーリー　女神転生　作／西谷　史　絵／北爪宏幸
- デジタル・デビル・ストーリー2　魔都の戦士　作／西谷　史　絵／北爪宏幸
- エイプリル・シャワー物語（ストーリー）※　作／藤川桂介　絵／おおた慶文
- 天空の城ラピュタ（前編）　原作・絵／宮崎　駿　文／亀岡　修
- 天空の城ラピュタ（後編）　原作・絵／宮崎　駿　文／亀岡　修
- ぼくらのペレランディア！※※　作／島田　満　絵／田中敦子

〈キャラクター〉

- 六神合体ゴッドマーズ　十七歳の伝説　原作／横山光輝　文／藤川桂介
- いつかきっと（『ミンキーモモ』より）　アニメージュ編集部編
- 夢みるプレリュード（『マクロス』より）　スタッフ　シナリオ共著
- あれから4年……クラリス回想　アニメージュ編集部編
- マクロス・ラブ・ストーリー　徳木吉春編
- また、会えたね！（『未来少年コナン』より）　富沢洋子編
- オーガス・コネクション　徳木吉春編
- ANIMATION GALS　1日本サンライズ編　徳木吉春編
- ANIMATION GALS 2竜の子編　走りつづける少女たち　町田知之編
- 未来警察ウラシマン倶楽部　アニメージュ編集部編

アニメージュ文庫は

AMJuJu(ジュジュ)と

呼んでください。

●JuJuには6つの部門があります。

NOVEL
アニメ作品の小説化はもちろん、オリジナル作品もたくさんあります。

CHARACTER
人気キャラクターの個人写真集。ピンナップや名場面がいっぱい載っています。

FILM
傑作アニメのフィルム文庫。コマを豊富に使用したオールカラー版です。

PEOPLE
アニメーター、演出家、脚本家など、この1冊で、その人のすべてがわかります。

THE BEST
「アニメージュ」で、好評のうちに連載終了したもの、およびオリジナル作品。

SFX
アニメージュ文庫の新シリーズ。主に特撮ものを扱う予定です。

カバーイラスト＝北爪宏幸
カバーデザイン＝真野薫
カバー印刷＝真生印刷㈱

徳間書店
アニメージュ文庫
ISBN4-19-669558-2 C0174 ¥380E (0) 定価380円

